

# 生活文化

VOL. 3



生活文化同人機関誌

# 生活文化 第3号

1998.8

昨日・今日・明日	吉田 桂二	2
木はいのち	豊崎 洋子	14
「木のいのち」	土岐 安麗	20
「一本の樹プロジェクト」とは	土岐小百合	22
木から始まり知へ	高橋 大助	23
花をみつめるこころ	井出 泰平	25
東村山～小平探訪	吉塚 幸雄	26
薬師寺伽藍から学ぶ	鈴木 久子	32
熊川宿にモノヅクリの原点を見た	松本 昌義	38
ベトナム・ホイアン・ミンカイ通りの家屋	金田 正夫	44
落葉松	赤桐 雅子	52
『山と人との関わりについて』	飛山 龍一	56
写真について	日影 良孝	66
大平建築宿（1997）から		73
『古い町並み・これから町並み』	西村 幸夫	74
『まちづくりの様々な手法』	八甫谷邦明	80
『住民参加のまちづくり』	藤原 恵洋	82
『古建築の修復と現代の工法』	渡辺 隆	85
『自然を遊ぶ』	羽場崎清人	88
『ドイツの郷土保護とエコロジー運動』	赤坂 信	89
御縁木物語	高橋 俊和	101
たかがへい・されどへい	森山 ゆき	108
私と木の十年	岡部 知子	114
生活文化同人会則		120
編集後記		122

# 昨日・今日・明日

1997.4～1998.4

吉田桂二

昨年の機関誌にも、「エコロ21住宅」と名付けて、ますますハウスメーカーがのさばりつつある、住宅供給の現状に対するアンチテーゼとして、21世紀のキイワードを「環境」と位置付け、これからのお宅のありようを提示するという意味での、生活提案型住宅を手がけ始めたことを述べているが、これが少しづつ実体化してきたことを、まずレポートする。

「エコロ21住宅」は何がねらいか

この生活提案型住宅の資質について、復習する意味で要約しておこう。

- 環境共棲      自然素材・地場産材をもとにした安全性と健康性の実現。  
                  人工気候化を廃して、自然条件に適合した風土性の確保。
- 広がり空間      小間割り空間を廃し、平面的・立体的に一体化した生活空間で、家族の触れ合いを回復。通風・換気にも利する。
- 架構グリッドプラン      架構と間取りの同時設計方法としての、架構グリッドプランニング手法による設計。
- 架構グリッドフレーム      国産中目材・5寸角を使ったメインフレームを主構造とした「百年架構」で、可変性と耐久性を獲得。
- 住み継ぎ      上記の主構造に可変部分を付加することで、多様な間取りへの展開を可能とし、長期にわたる耐用性を獲得。
- 伝統構法の継承と発展      伝統構法の継承を前提として、これに現代性を加え、さらなる発展を図る。
- 需要の確保      年間100～200戸程度を生産単位とする、地場生産の住宅供給態勢を組織する。
- 低コスト化      需要の安定的確保で、直接的な国産材の流通を図り、木材コストを低減。プレカット工法と構造金物の使用による低コスト化。

「エコロ21住宅」の最初の提案は、昨年出版された「これからのエコロジー住宅」に、「国産材による百年架構の提案」として発表した。

これについての概略は、昨年の「昨日・今日・明日」で既に述べているが、2間角グリッドを4つ集合させた、4間角メインフレームの家である。しかし、プランについては、バリエーションを2案、提示したのみであった。

この提案は、PAC工法に適合させたものであったが、これを一般的なものにして、その詳細を、この4月末に出版された「健康な住まいのつくり方」に、「環境共棲住宅の提案」として発表している。この本は、同人の宮越・日影・鈴木3氏との共著である。(図1, 2)

これを実際に建てる計画としては、「四季工房」が仙台で建てるモデルハウスで先ず始まり、これについても昨年の「昨日・今日・明日」で述べているが、これが昨年の秋、完成した。モデルハウスを建てる用地が変更されたことがあって、当初の案(図3)は実現せず、改められた案に

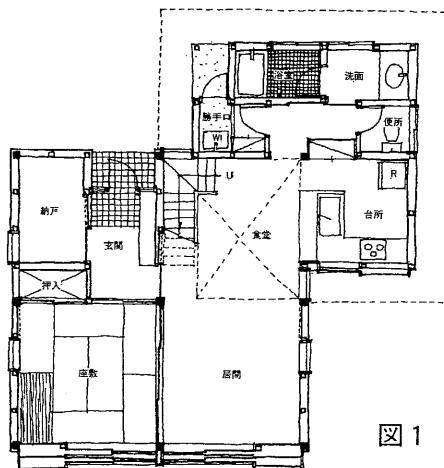


図1

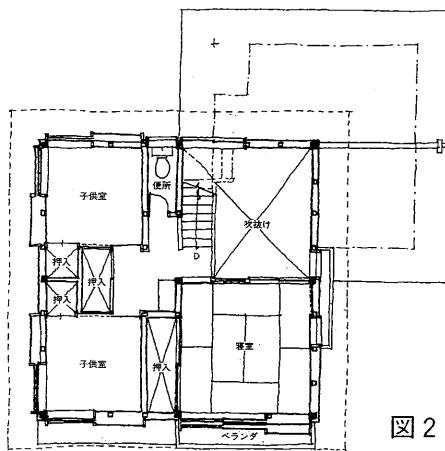


図2

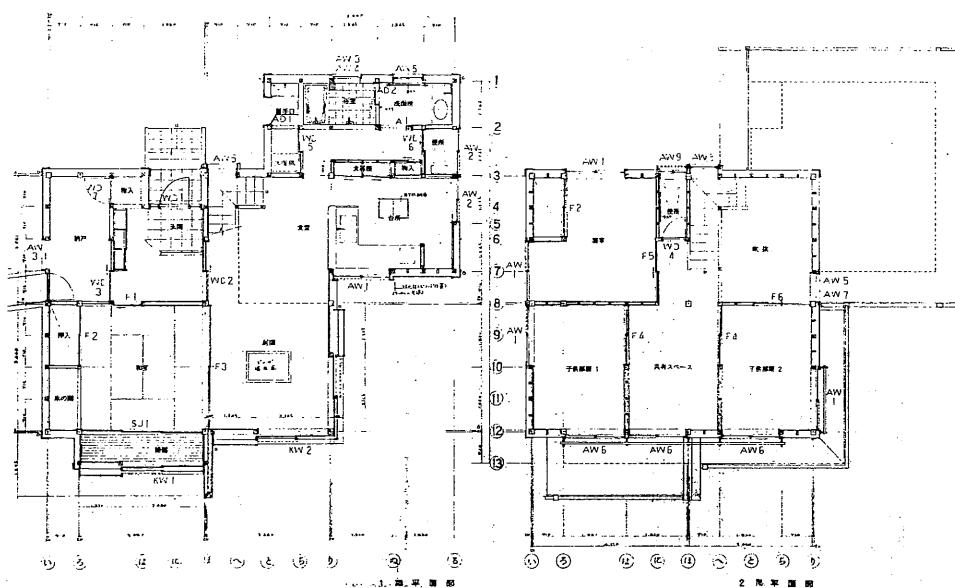
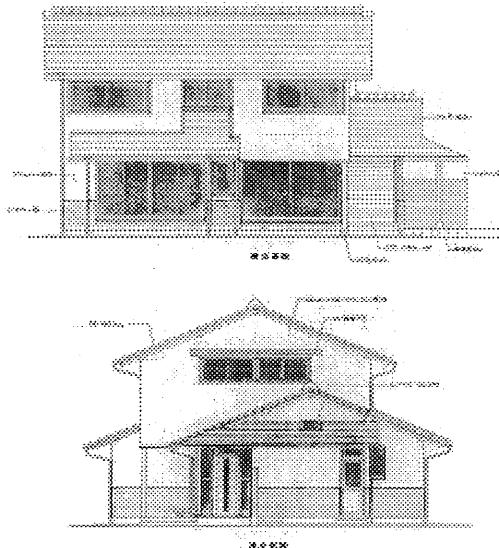


図3

よって建てられた。当初の案は、2間角グリッドを4つ集合させた、4間角メインフレームでは面積が不足したので、3尺巾を追加するという、明快さを欠くものだったが、実現したのは、4間角メインフレームの中間に、1間×2間のグリッドを、縦に2つはさんだ明快な架構になっている。(図4～7と写真4点)



▲ 図6

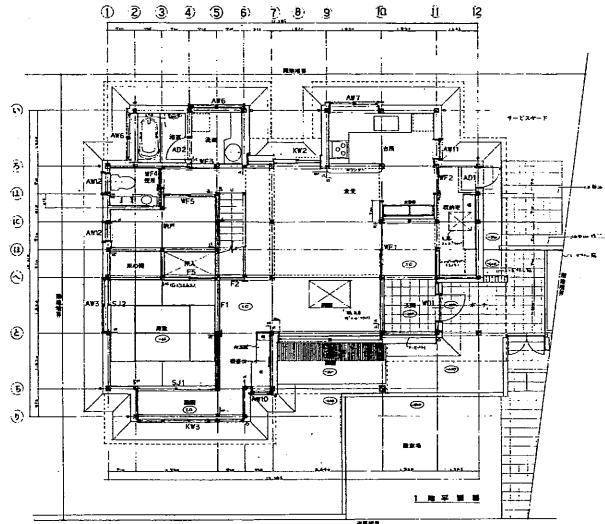


図4 ▲

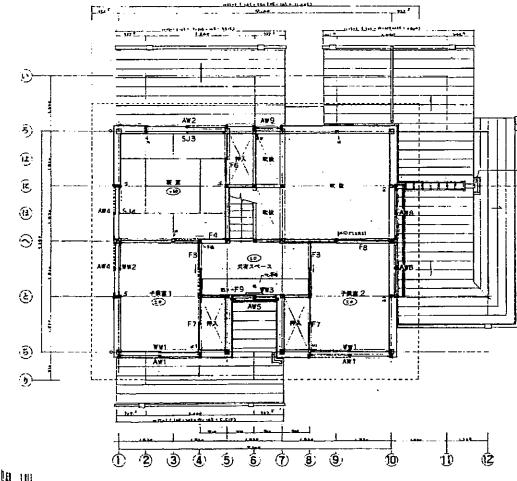


図5 ▲

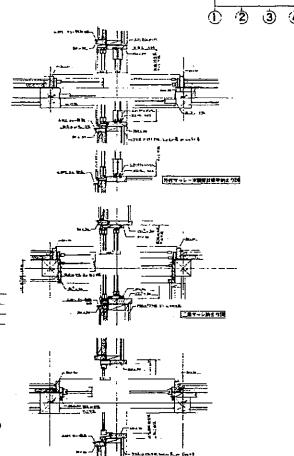
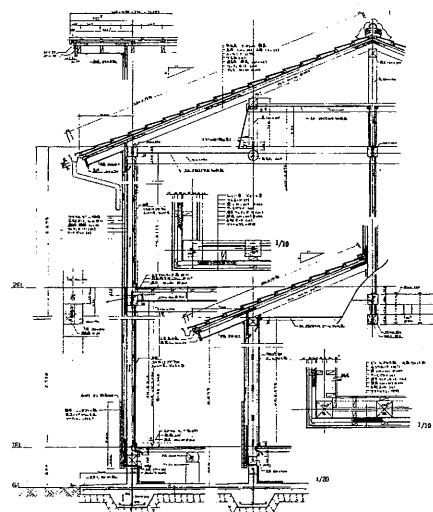
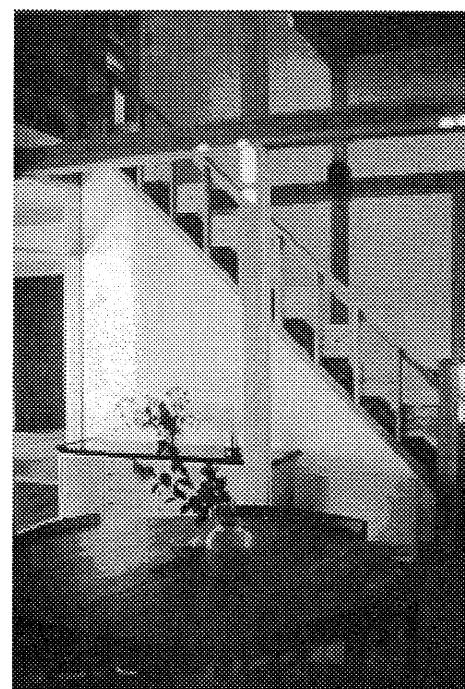


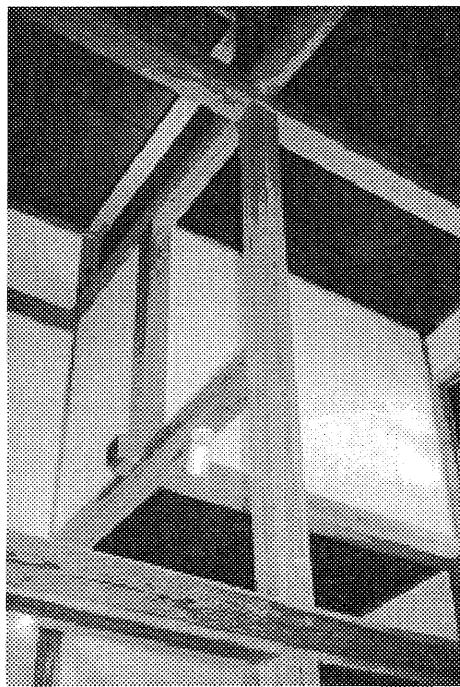
図7 ◀



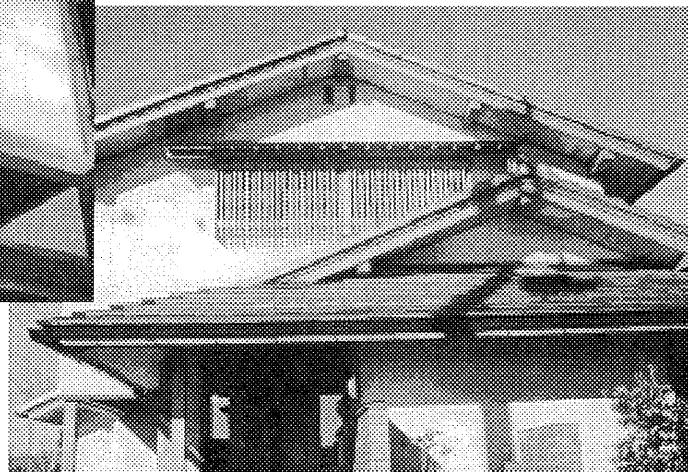
◀ 子供室（西側）



▼ 食堂と階段



▲ 吹き抜けから見る  
2階の押入



▼ 東側外観

次いでは、これも昨年の「昨日・今日・明日」に文  
章だけでふれてい  
るが、熊本の「新  
産住拓」が、大津  
に建てるモデルハ  
ウスで、これから  
着工するところ  
だ。このメイン  
フレームは、1間  
半角のグリッドを  
6つと、その間  
に、1間×1間半  
のグリッドを3つ  
はさんだもの、2  
間角グリッドより  
も、細かく面積対  
応できるのではないかと思  
っている。(図8~10)

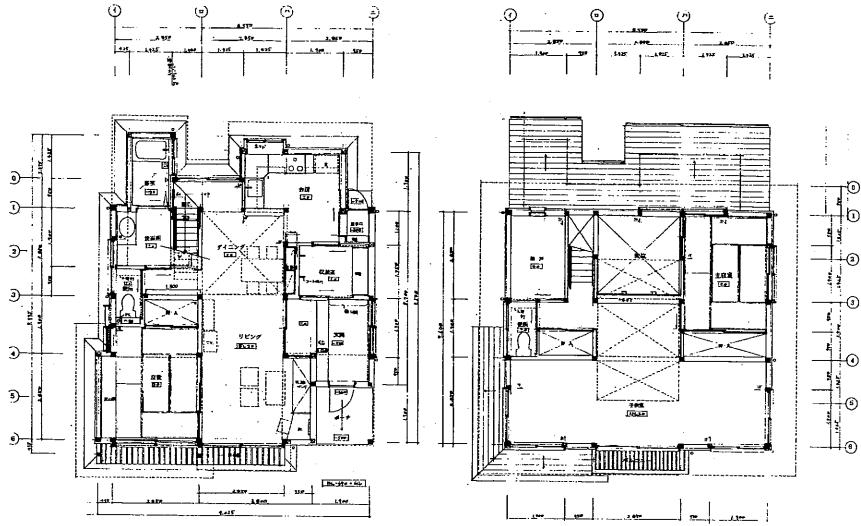


図8



図9

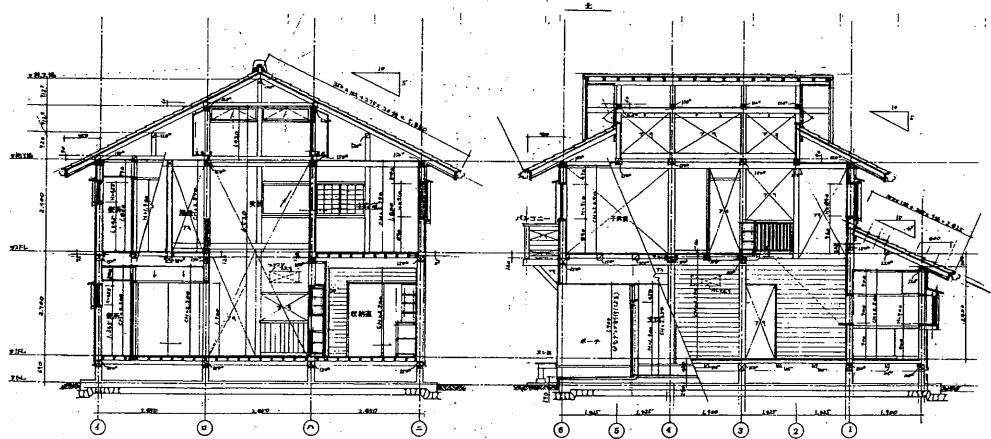


図10

この形のメインフレームを使って、違う間取りを造ってみたものを、これから出版される「キッチンと収納のつくり方」に発表している。(図11～16) この本は、彰国社の「暮らしから描く」シリーズとして、当初の「快適間取りのつくり

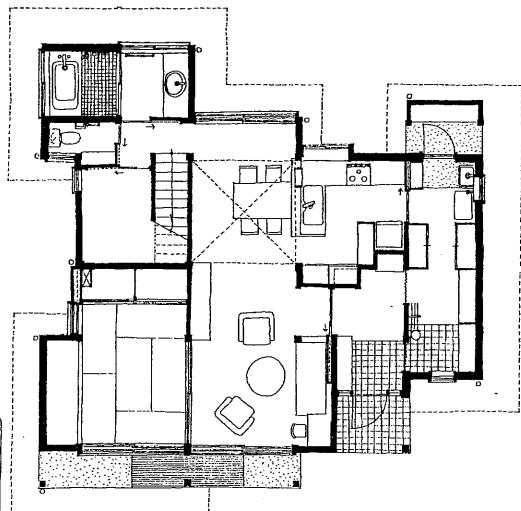
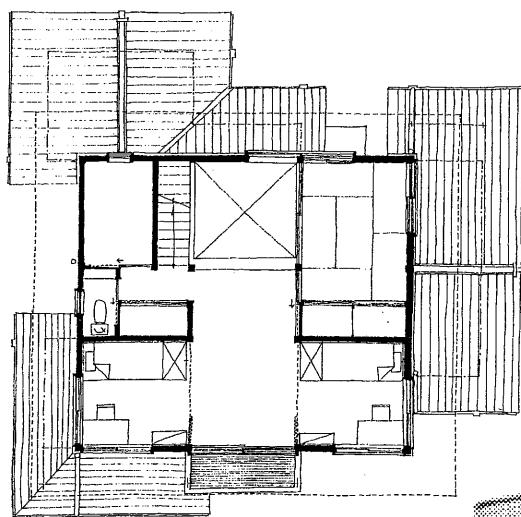


図11 ▲

◀ 図12

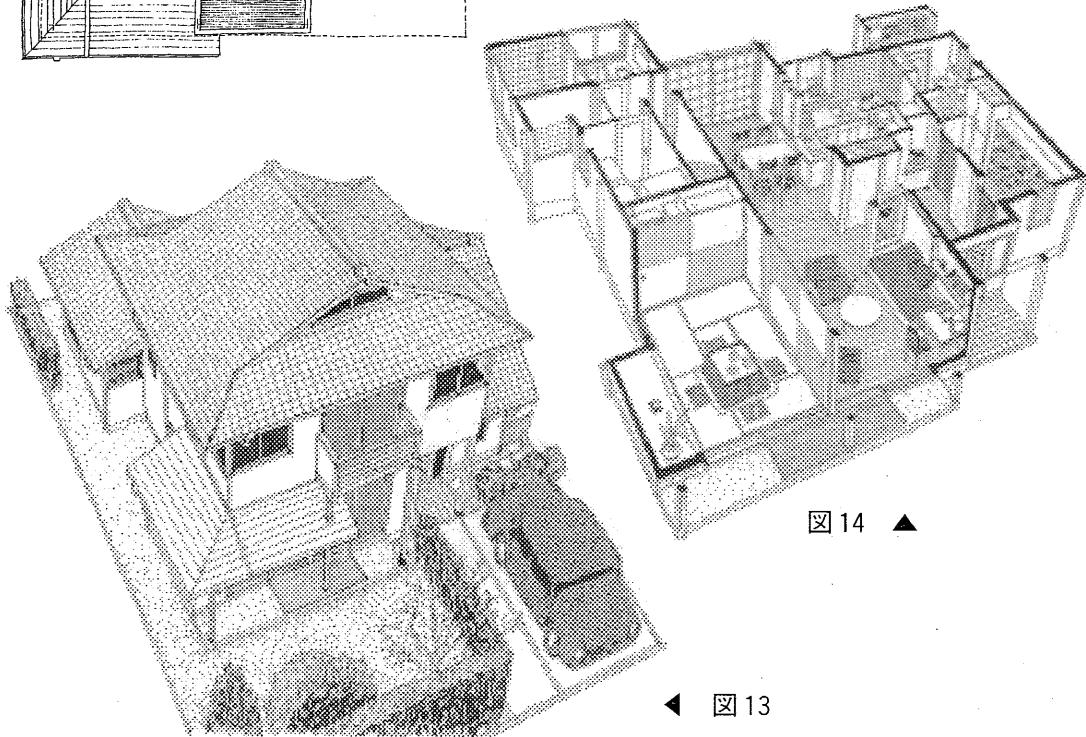


図14 ▲

◀ 図13

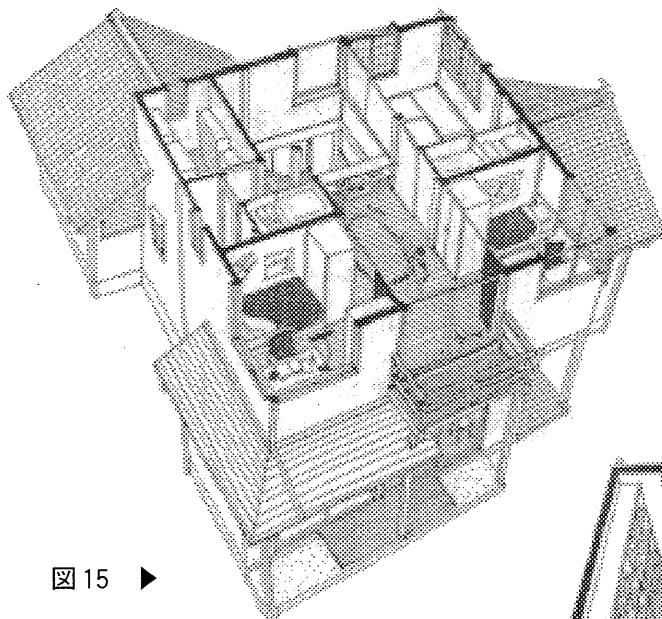
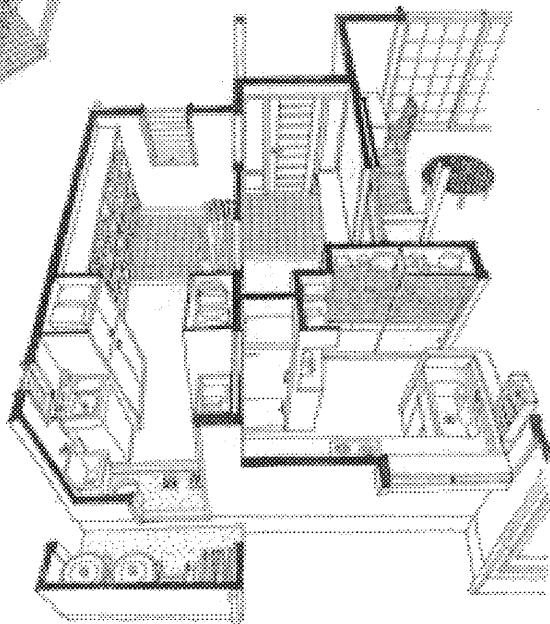


図15 ▶

図16 ▶

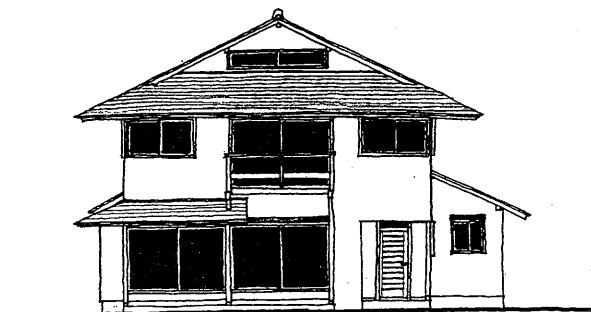


方」小林・松本・長谷川3氏との共著、次いで  
の「健康な住まいのつくり方」宮越・日影・鈴  
木3氏との共著に続く第3弾で、島田・西岡・勝  
見・西山、女性軍との共著、同人メンバーによ  
る著作が増えてきた。

これからの展開としては、常磐新線の付設に  
よって開発されるであろう、茨城県内の各地に、  
都市・住宅整備公団の所有地が多くあるのを対  
象にして、茨城県住宅公社を中心とした組織で、  
県産材である八溝材を使った産直住宅を造る動  
きがあり、これをこのタイプによる設計で行う

べく、目下推進中というところだ。これは量的な供給を当初から計画的に実施できるので、順調に進行すれば、大きな展開が期待できる。1案として提示しているのは、やはり同じメインフレームを使ったものである。(図17～21)

「エコロ21住宅」の展開は、まだこれからというところだが、国産材の安定的流通と、ローコスト化を意図するならば、量的需要の確保が、やはり先行しなければ、常にゲリラ的な一発勝負で終わってしまう。「四季工房」や「新産住拓」がモデルハウスとして提示できているのは、年間建設戸数の多さがベースにあって、国産材の流通を、自社の力量で確保できているからだ。この意味で、茨城県住宅公社の企画に期待するところは大きい。



南立面図 1/100

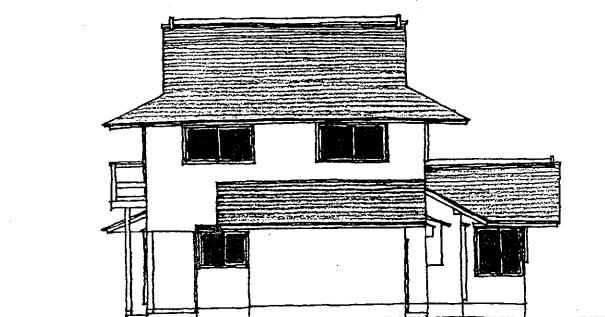


図19 東立面図 1/100

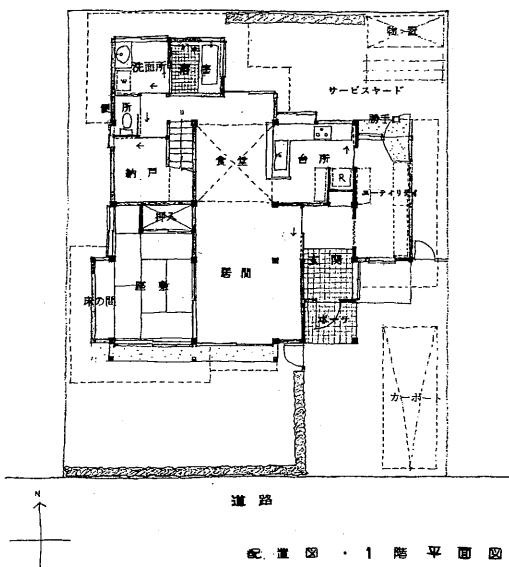


図17

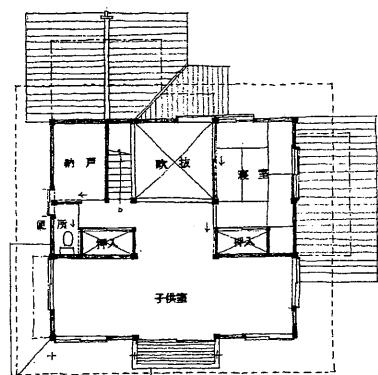
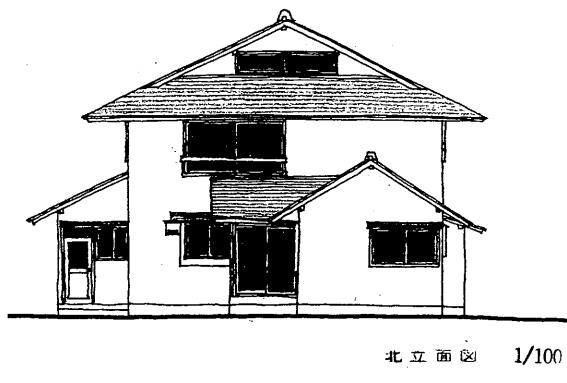
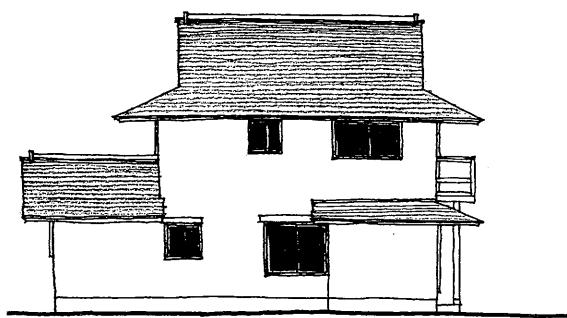


図18 2階平面図 1/100

ここで、似たようなプランを続々とお見せしたのは、架構グリッドプランニングの手法が、いかに多様に展開できるものかということを、見てほしかったからだ。最後に、架構グリッドフレームとして考えられる8つのタイプを提示しておく。興味のある方は、この形を使ったプランを造ってみてはいかが。(図22)

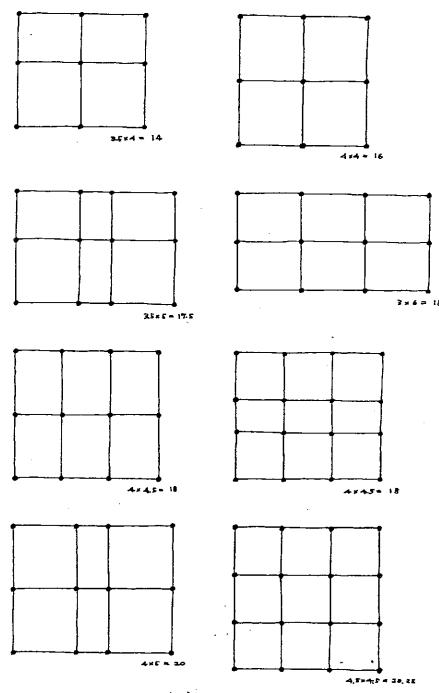


北立面図 1/100



西立面図 1/100

図 20



架構グリッドのパターン

図 22

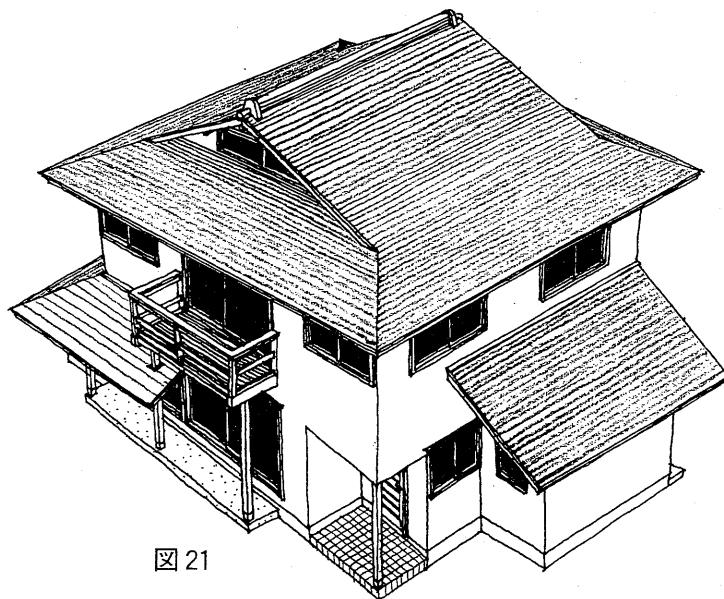


図 21

## 今、動いている仕事

### ●住 宅

昨年の「昨日・今日・明日」で工事中だった郡山市の増子さんの家と、東村の鈴木さんの家は、昨年竣工した。

今は、鈴木さんの家に近いところで、石屋の小室さんの家が工事中。この家は、家の北側に既存の雄大な庭園があって、家はその眺めを意識したものになっている。この4月末には、藤沢市で若松さんの家が竣工したばかり。この家は、道路面である北側をスキップフロアにして、下部をカーポートにしている。奈良の御所市では奥野さんの家が工事中。奈良の「大乗院庭園文化館」の棟梁を勤めた山本さんが取り組んでいて、平屋の離れ屋風の小さな家。横浜市では荒川さんの家が工事中。これは、娘さん家族との2世帯住宅、というところ。

設計中の家は、つくば市で牧内さんの家。これは会計事務所と合体した住宅で、述べ300坪弱、敷地は600坪の規模。

これから設計する家は、岡山市の佐野さんの家。岡山大学のキャンパスに隣接した200坪の敷地が用意されている。それと、伊那市の南信コスモのモデルハウス。これが「エコロ21住宅」の展開となるかどうかは、先方の意識をどこまで誘導できるかがあるので、まだ定かではない。

### ●公共建築

熊川宿では旧逸見家住宅の文庫蔵と庭園の保存改修（松本氏担当・住建に発表）が終わり、これから「道の駅」が着工するところ。これは、設計は昨年の春に終ったが、用地の取得で着工までに、1年の間が空いた仕事。

愛知県一色町では「べんてんさろん」が施工中。現地在住の筒井さんという女性建築家に協力してもらっている。

古河市では、（仮称）古河文学館が間もなく竣工するところ。この用材には、八溝の中目材が多用されている。また、歴史博物館と、この文学館への導入路の、ポケットパークが、これから施工される。

熊本の小国町では、「坂本善三美術館」に続く仕事として、老人保健施設の設計を終え、これから施工される。これは、できうるかぎり木造でということを目指したため、平屋部

分の多い建物になったが、述べ3000平米という規模なので、ひと町あるほどの甍の波になった。

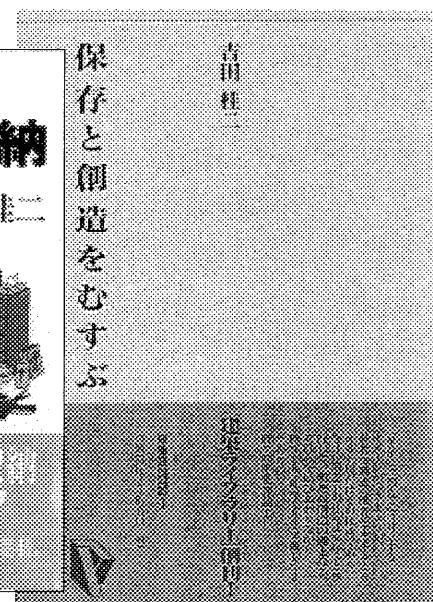
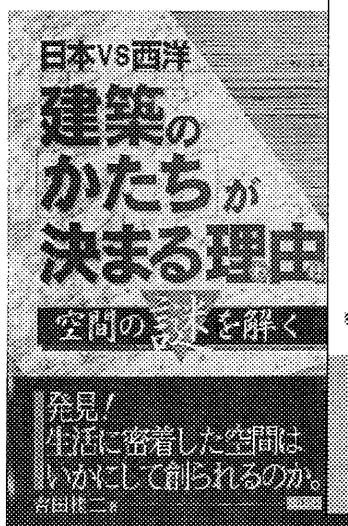
大洲市では、肱南地区という、町の原点をなす古い部分全体を見据えた、町づくりの指針を、まとめあげたところ。かなりの数のポイントを指摘して、そこにどんな施設を置くか、その形まで提示している。6月には市民集会で、これについての講演をし、何らかが実施の段階に入る予定。

変わったところでは、日本出版クラブの箱根の靈地に仏舎利塔を設計した。

## 出版物など

新しく出版されたのは5冊

- 「からだによい家・100の知恵」  
講談社 1200円
- 「保存と創造をむすぶ」 建築Library 1  
建築資料研究社 2300円
- 「住まいの収納・100の知恵」  
講談社 1300円
- 「健康な住まいのつくり方」  
彰国社 2600円
- 「建築のかたちが決まる理由」(住の神話・改題)  
鳳山社 2400円



著作中の出版物は 3 冊

● 「キッチンと収納のつくり方」

彰国社

● 「絵ごころの旅」 鈴木喜一、白鳥健二と共に著

東京堂出版

● 「虹を架ける溪」 小説・原三溪

?

#### 昨年の個展

11月 7日～19日・アユミギャラリーにて

第17回吉田桂二個展

「桂離宮 12景 + 重要文化財民家 4点」

#### 受賞

今年の 1 月

坂本善三美術館が第10回くまもと景観賞

記念大賞を受賞

1998.5.10 以上



スヌード

# 木はいのち

豊崎 洋子

## 棟染だった祖父

東北の山村にその人は、棟梁として生き55歳でこの世を去った。私の小学校6年生の夏であった。見事なカイゼル髭とやさしい瞳に時折宿る鋭い視線が妙に恐ったのを覚えている。その人とは私の祖父である。

小学校校長の次男として明治31年に生まれた祖父は絵が上手く、手先の器用な子で、父親の反対をおして宮城県気仙沼で大工の修行をし、岩手県南部一町十二ヶ村の棟梁組合長として棟梁達を率い、役場、郵便局、学校等の公共建築の請負から住宅建築と忙しい日々を過ごしているのだと折々大人達から聞かされていた。

私は高校生になるまで毎年夏休みの一ヶ月間、そんな祖父のいる田舎で過ごしていた。田舎で過ごす夏休みは何をするにも楽しく、特に家のものが出来た後、入ってはいけないといわれる祖父の作業小屋に従兄弟達としおり込みドキドキしながら大工道具にさわったり、小屋裏のかくれんぼや鉋屑や木片での遊びに夢中になった。

祖父の家に向かうバスの中ではこの一月の夏休みの冒険を思うと心がはずみ一目散に祖父の家に着きたいと思った。しかし、わざわざ1つ手前のバス停でおりるのが私の習慣になっていた。

そのバス停は小さな郵便局前にあった。郵便局もここから500～600m行ったところにある中学校も祖父が建てたものとバス停に近い酒屋の主人から聞いてからここから祖父の家歩くのが習慣になった。大きな木々の合間に点在する茅葺き屋根ばかりの地域のなかに、この郵便局は切り妻屋根で外壁は木造下見張りで白いペイントで塗られ、赤いポストが愛らしく、小学生の私はすきだった。

記憶によればその中学校は木造2階建で、入口は切り妻屋根のどっしりとした車寄せを持ちそこからL型に一列ずつ長方形の教室が連なっていた。車寄せの破風には、なにか葉の連續模様らしき彫刻がなされていた。ハウスメーカーをやめて、とある事務所にいれてもらったものの自らの掴むものに悩んでいたある日、幼い頃の短かかった夏休みの遠い記憶が従兄弟の一本の電話で目覚めさせられた。

聞けば、祖父が建てた大正末期から昭和にかけての建物を写真に撮っておいたらどうか

と建て主や市役所の友人に勧められたそうである。早速、私は小学校から中学校の夏休みを過ごした懐かしい地へ東北新幹線ででかけた。

夏休みになると上野を夜行で出かけて、翌朝は仙台ですすぐよごれた顔などを洗い、昼頃祖父の家についていたのに今では数時間でついてしまう。忙しい身にはうれしいが、速さの分だけ色々思い巡らす時間が切り取られてしまったり、退屈なまでにゆったり車窓から見る景色にも縁がなくなってしまったのが残念でならない。

## 1軒目の家

1軒目のいえは、祖父の家から車で20分ほど離れ村の主要道路から少し坂をあがったところにあった。

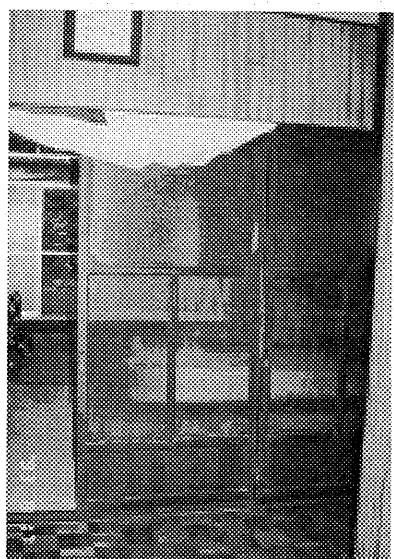
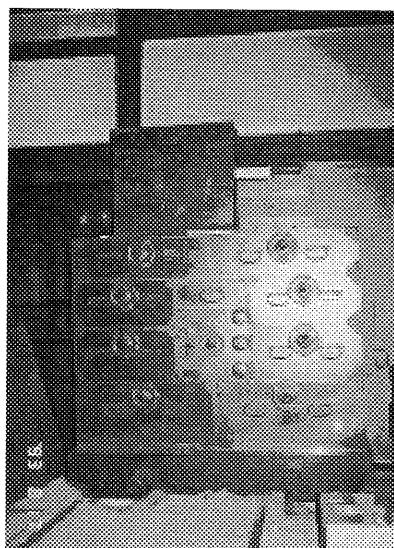
坂をあがってすぐ右に家畜小屋があり、典型的な岩手の鼻曲がり屋である。聞けば子供たちは夫々独立し83歳のおばあさんは一人で住んでいた。

祖父が大正末期に建てたとそのおばあさんは話してくれた。

「元治で一くさまは、たいした細工の上手い、でえーくさまでした。おらえの自慢のものといったら、この車簾笥とあの頃のまんまの戸だべのう。あどは、わらしらが、かぜっこが家さ、へえって寒いて、いたっこを、あっちさへったり、こっちさへったりして当時と随分変わってしまったおんや」と申し訳なさそうに話してくれた。

外は小雨だった。おばさんは豊かな方言で話してくれた。曲った指と腰は農業の過酷さを物語っている様ではあったが、若かったころの遠い日をみつめて祖父の作った簾笥の話をするおばあさんの顔が初々しく感じられた。

おばあさんと共に生きてきた祖父が作った簾笥を見ているうちに幼い夏の日の、こっそりと覗いた祖父の金物の箱と仕事が終ってうまそうにきざみ煙草をくゆらせていた祖父の横顔を思い出していた。

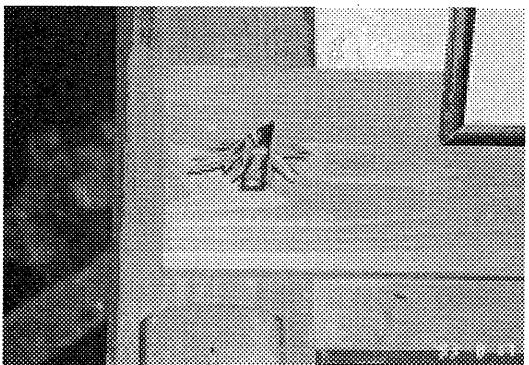
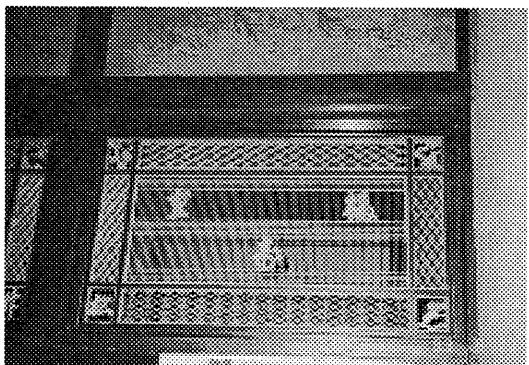
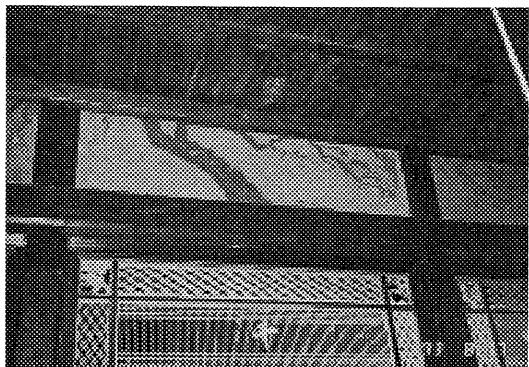
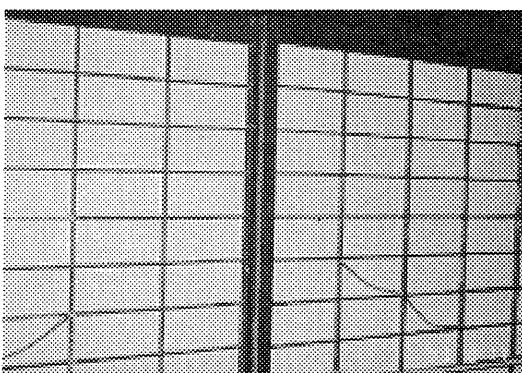


## 2軒目の家

通称、ほしっぱの家と呼ばれ藤里と言う地域の庄屋の家である。ほしっぱとは藁縄に挟み乾燥された煙草の葉のことである。煙草の葉を手広く栽培していた家である。また東北の米づくりは、冷害に悩まされ、米栽培の農家はひどく天候に左右される事に苦しんでいた。何代も続いているこの庄屋は積極的に米栽培の改良に取り組み近郷の人達のリーダー的役割をなしていた。又煙草の栽培でも指導的立場にあった。

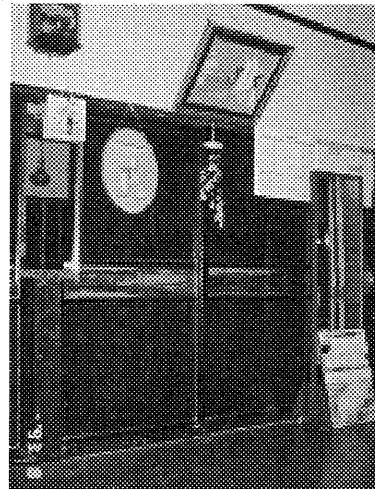
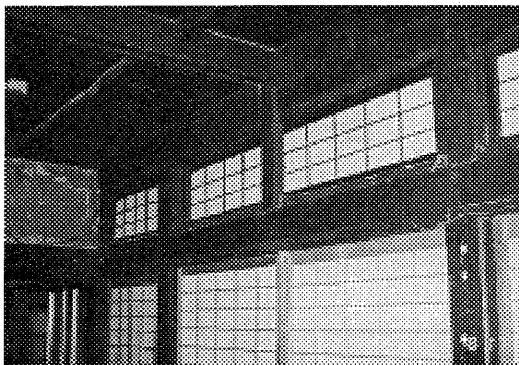
この家は村の中心に位置ししかも長い坂を登りきった小高い丘にあった。その坂の途中にやはり祖父が建てた集会所があり、木立に囲まれたそこは夏休みの子供達の勉強会の場になったり、遊び場となったり周りの田畠で作業する親も子の様子が見えるかっこうの場所にあった。ここに祖父の在所に生きる知恵と人との繋がりを大切に思う土地を提供した庄屋の温かさを感じた。

この庄屋の家は大正末期の春にこの家のおばあさんが嫁いでくる為に造ったそうである。欄間には、めでたい文字が細工され、



壁には桜の木が埋め込まれさらに満開の桜が彫られ長押と柱の取り合いには彫竹の一枝が埋めこまれている。祖父の遊び心が見えてくる。花嫁の為の鏡もこの家に似合っているように思えた。

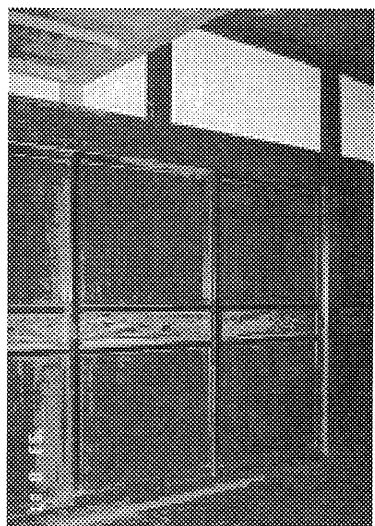
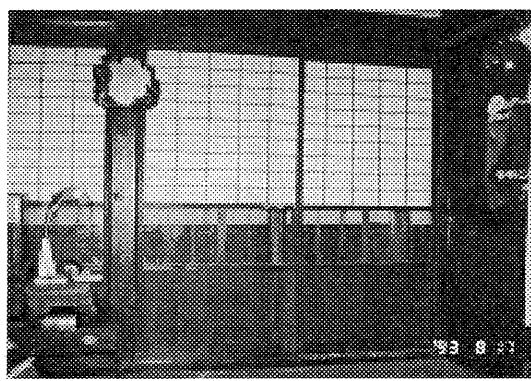
一晩に一升飲んだと言われている祖父も、婚礼に呼ばれ酔いもほどほどにまわったころ、自慢の「名が持ち歌」を披露したそうである。



### 3軒目の家

この家は、岩谷堂簾筈の生産地の町に近い持田地区に残っている明治後期の建物である。

代々村長を勤めた家で今は高校教師の子孫がこの家をまもっている。この方の話では先代の村長と祖父は若さもあって東北農村の改善など熱っぽく語りあっていたらしいとの事である。まだ若い祖父は中学校をたてるに

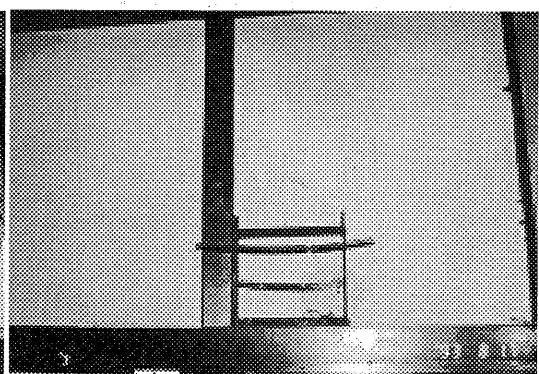
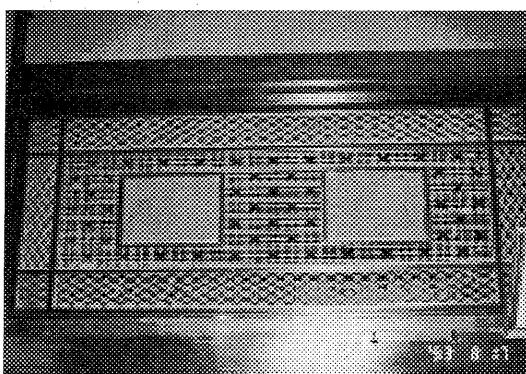
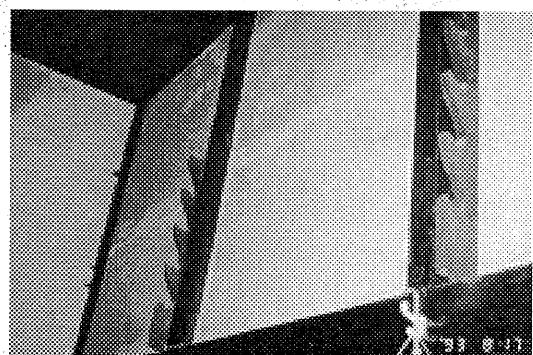
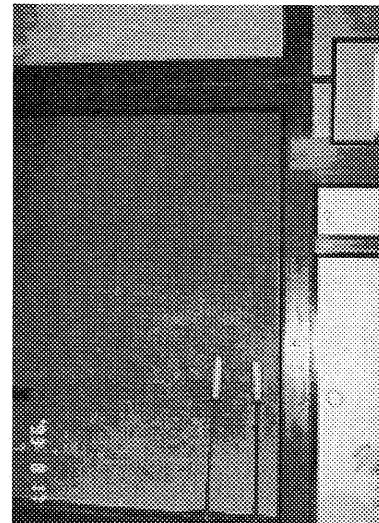
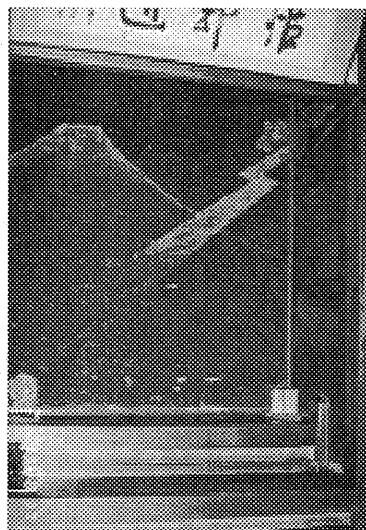


あたって今で言う事業  
資金を借りた事があつ  
たという。そういえば  
この3軒の家を訪る前  
に祖父の家により、祖  
父の道具のあった小屋  
で私は何通かの役場あ  
て借用証文をみた。

そして、同潤会発行  
の「住宅改善読本」と帝  
国工業教育会の一部講  
義録、大日本工業学会  
の一部講義録をひろい  
持ち帰ることにしてい  
たので家主の話にうなづいていた。

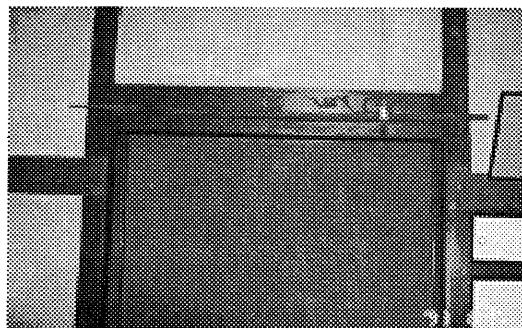
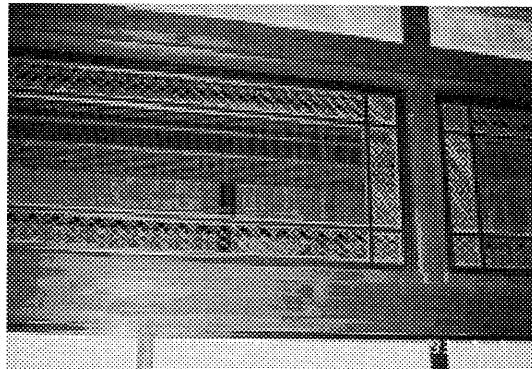
大工修業の後も祖父は建築の新しい波に  
遅れまいと学んでいたこともうかがえる。

床の間の黒漆喰に螺鈿で描いた富士山し  
かも稻妻まで…、なぎなたが掛かってい  
る長押の木彫刀かけ、板戸に埋め込んであ  
る板は柿の木そして仕上げは吹きうるし、  
緻密に組んだ組子の欄間、障子に組み込まれたガラス、絵画が好きで手先の器用な祖父の  
若い時の力強さがかんじられた。ここに住まわれている方は、高い天井と木の建具は寒い



冬には辛いが、ご先祖の遺言により補修は良いが建て替えたり現状を変えてはいけないことになっているのだそうである。安易に家を現代風に変える事なくこの話を守っている当主はこの家の歴史物語を聞き知り住み継いで行こうとしている。私は祖父の技の残っていることに感謝していた。

と同時に木の命は脈々と後世に連なりそこに住む人のその家の昔話を語り聞かせているのだとも思った。



# 「木のいのち」

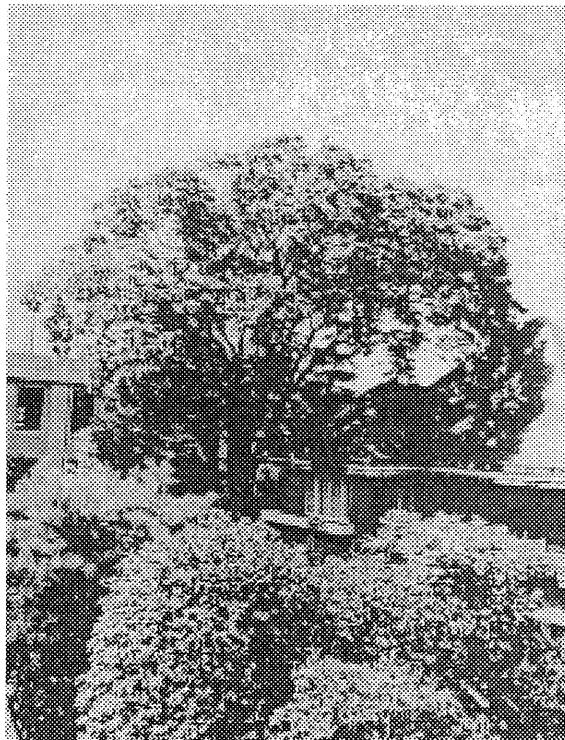
土岐安麗

「木」に対して持つ私の感情が、普通の人と少し違うことに気がついたのは、小学校に入って間もなくだったと思う。どこが違うかというと、「木は切られても木材になって生き続ける」や「木のために枝を切る」などの言葉を見ると、非常に腹が立つのだ。植物だからなのだろうか。「なるほど」と、こうした言葉に疑問を持たない人が多い。しかし（クサイセリフではあるが）命は命である。動物に置きかえれば「ワニは殺されてもワニ皮のバックになって生き続ける」「人自身のために腕を切る」などという事になる。少なくとも後者の言葉で不自然に思わない人はいないだろう。しょせん人間は、自分達の都合に合わせて適当な事を語っているにすぎない。

もちろん私も人の事は言えない。まわりは死んだものたちに囲まれていて、こんなことを書いている私こそが偽善者かもしれない。しかし無責任な人間の目しか持っていない、いや持とうとしない人々よりは、まだマシだろうと思っている。（まあこんな言葉を並べたところで何が言えた義理ではないが）、「木」として考えてほしい。「木」は自分が殺されると分かっていても逃げられない、抵抗もできない。普通の人間が一人死ぬのと、「木」（特に大木）が殺されるのとでは、だんぜん「木」のほうが影響がでるだろう。人は何も与えはしない。死んだほうがいいのかもしれない。けれど私は死にたくない。何度もなくこの矛盾を考えるが、どうしたらいいのかわからない。結局人間とはそういうものだろうと、この頃は考えるようになった。

もともと私は、そんな事を考える人間ではなかった。「木」と「人間」に対して今の思いを感じ始めたのは、私が

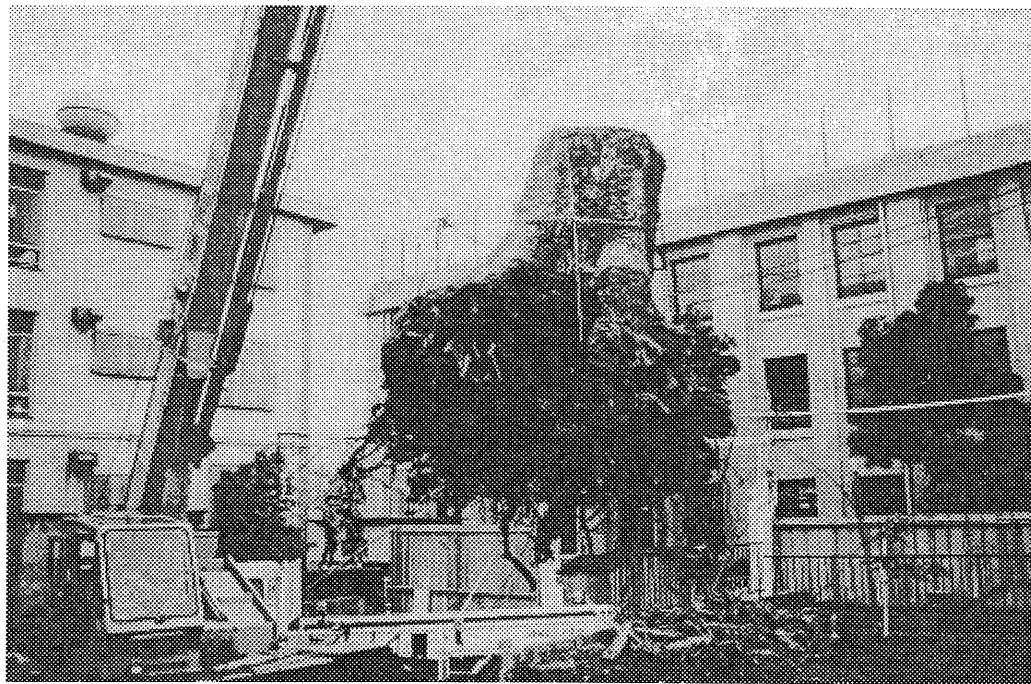
たくさんの、たんさんの葉が落ちるので、庭の地面はやわらかい良質の腐葉土だった。



五歳の時に殺された、一本のケヤキが原因だったようだ。その木は祖母の家の庭にあり、樹齢百三年という渋谷区ではなかなかの大木だった。私にとっては、あって当然という、いろいろな意味で大切な木だった。しかし、家が建つことによりそのケヤキが切られる事になると、私は初めて身近なものが消える時のやるせなさが分かった。自分の力ではどうしようもない、このもどかしさ。今考えれば、私はこの時「木」と「人間」に対して今の思いを持ったのかもしれない。枝が落ちる度に「痛そう」と思い、ケヤキの幹も音を立てて倒れた日、私は自分に対して腹を立てた。それと同時に悲しんだ。数日後に根も掘りだされると、今度こそ「いなくなつた」と実感した。どんな思いでケヤキが殺されたのかは分からぬが、少なくとも安らかな気持ちだった事は絶対ないだろう。時々、つくづくとそんな事を考える。

私はこの文章を通して、何を伝えたかったのだろうか。自分でも分からぬが、ただ人の命だけが重く、他のものはどうなつてもいいとは思わないでほしい。最後にケヤキの冥福を祈ります。

(ときあうら／中学2年生)



重さ4t。「土を取り除けば500kgは減るけど、大変だからこのままつけておくしかないな。」これを素人がレンタカーのトラックに載せて、埼玉県名栗村の山奥まで、夜中に運ぼうというのだから、今思えばむちゃな話。細くて暗い山道も無事クリアーした大山公一さんに感謝。

# 「一本の樹プロジェクト」とは

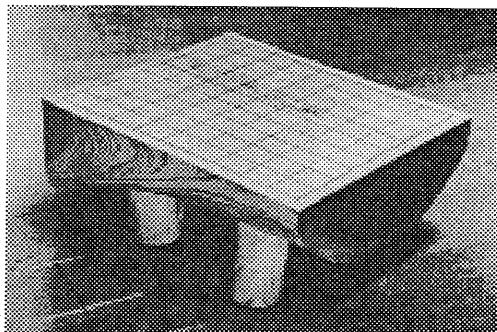
土 岐 小百合

「一本の樹プロジェクト」はJR恵比寿駅から山手線の内側に（歩いて十分のところに生きていたケヤキが伐採されるのを機に生まれた。時は一九八九年「バブル」真っ盛りの時である。地価が上がったことによる相続対策として、ケヤキを切ってマンションを建てようとしたのだ。子孫に土地を残したいという土地の所有者の意志は拒めない。しかし、幹の太さが大人一抱えもある大木は、放っておけば切られてゴミとして捨てられるのも事実である、その樹の下で育った私は、仲良しの下中ナボさんと写真家の土田ヒロミさんと共に、その切られたケヤキの一部を友人知人に分け、作品を作って再び持ち寄り展覧会を行うプロジェクトを始めた（ちなみに土地の持ち主は私の叔父）。せめて何かできないかという気持ちだった。

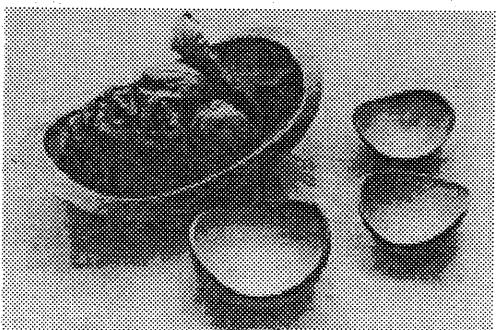
ファックスや電話での呼びかけに応じ、100人以上の人気が集まった。そして沖縄から北海道までケヤキは散っていった。年齢も職業も様々。幼児の造形教室、小学校、デザイン専門学校の授業にも使われた。木工のプロもアマも平等の立場で関わった。皮で籠を作った人、ケヤキの灰を釉薬として陶器を焼いた人。ケヤキを染料にした糸で布を織った人もいた。この樹を卒論のテーマとし研究した人によると、ケヤキは降雨量や湿度などの自然条件とはあまり関係なく育っていたことがわかった。このケヤキを主人公に「樹は最後にいいよと言った」という、紙芝居を作った人たちもいた。

伐採三年後に青山の子供の城で開かれた展覧会には、机、椅子、人形などの木工作品をはじめ、焼き物や染めの作品もたくさん集まつた。もちろん紙芝居も実演された。作品数は500点にものぼった。

展覧会終了後、作品は各自が持ち帰り今日



松倉勲さんは、太めの枝を半割りにして将棋盤を作った。半円形の盤に丸い足がユニークだ。



九州熊本県から参加の河津良隆さんはおちょこや器を作ってくれた。

に至っている。もうケヤキがとりもってくれた縁で多くの人と知り会うことができたのは何よりの喜びだった。樹について多くのことを知ることができた。そしてこのプロジェクトから三つの新たな種が生まれ、各地で大きく育っている。

ひとつは「一本の樹から始まった」アリス館から出版されたプロジェクトのドキュメンタリーの単行本。

ふたつめは八十枚のスライドとナレーションによる「一本の樹」(監督、藁谷豊制作ワークショップミュージアム)。今までに1000人以上の人々に見られている。

そして去年やっと出来上がった映画「一本の樹」(監督 島野義孝 配給 ワークショップミュージアム)が三つ目の種である。

もしこのプロジェクトに興味がお有りの方は、事務局のあるワークショップミュージアム(03-3475-7730)までお問い合わせ下さい。

(ときさゆり／プロデューサー・住み継ぎネットワーク)

※この章に使用した写真は、一本の樹から地球へⅠ「けやき」という本から転写したものです。

## 解題 木から始まり知へ

高 橋 大 助

「木のいのち」と聞いてすぐに「一本の樹プロジェクト」のことを思った。もともと「一本の樹」と「住み継ぎ」は双子の関係にある。土岐邸をめぐる出来事の中で、建物に関った人々が「住み継ぎネットワーク」を形成し、玄関前のケヤキの木に関った人々が「一本の樹プロジェクト」を進めたのである。藤原恵洋さんを初め、その両方に携わった人もいるけれど、私の場合「住み継ぎ」に殉じて(?)おり、「一本の樹」とは無縁と言ってよく、その全貌を知ったのは、土岐小百合さんが書いた二冊の本「一本の樹から始まった」(アリス館)と「月刊かがくのとも6・いっぽんの樹」(福音館書店)からだった。どちらも面白く読めたが、特に前者は、プロジェクトの運営の様子を具体的に分かりやすく、そして、著者があまりエカッコせずにストレートに書いてるので、何かイベントを起こそうとする人にはマニュアルとしても使える良い本だった。中学の課題図書となつたのも頷ける。が、むしろ、大学生協あたりが推奨図書とするべきではないかと思ったぐらいである。その一方で、両書から<美談>だけが抽出され消費される危険があるようにも思った。我々

の罪悪感が自然と人間の間に美談を求めるあまり、問題の核心としてのケヤキの死を見失ってしまうことはありはしないかと思ったのだ。プロジェクトに実際に関わった人たちにそんなことはないだろう。

「紙芝居」にあった「いいよ」と許して切り倒されるケヤキの木には、自らの死を生き続けてくれる他者の存在信じて死に赴きたいと願う人間自身の姿が投影されていることを、参加者は無言のうちに了解し合ったに違いない。しかし、それは十分に伝わるだろうか。

近代の都市には初めからその傾向があったのだが、二冊の本が出た九十年代の前半は、生命主義の思潮が高まったこともあり、人々の生への賛美が、死の隠蔽、いや、死の躊躇と言うべき状況を作りだしていた。価値ある生に対し、死は無価値でしかなく、あるいは、ゲームの中で消費される記号でしかなくなつたのである。(その反動が、神戸や黒磯での中学生による殺人事件をもたらしたと言えるのではないだろうか。) それゆえ、私は「一本の樹」に折り込まれていた「かかぐのともタイムス」に寄稿した土岐さんの文章に、正確には、その一文に記された娘さんの言葉に惹かれたのだ。<<当時五歳、現在は小学校三年生になった娘のアウラは、あのときのことをよく覚えている。私がこの「いっぽんの樹」を書いている横に来て、「ケヤキが倒れたとき、人々から歓声があがつたでしょ。喜びに満ちた声だったよ。どうして、樹が切られたことが嬉しいんだ」と言ってくる。>>

この子の中にはしっかりとケヤキの死が刻まれたのである。そんな彼女が中学二年生になった今、「木のいのち」というテーマに対して何を思うだろうか。その答えが、先の文章である。ケヤキの死は彼女の中で力強い怒りとともに、思想の萌芽ともなりつつある。彼女の文章は、大人が罪悪感の向こうに追いやって忘れようとする人間の根源的な暴力性を言い当てるだけではない。自らの内にも大人と同じ罪を認めて恥じ、それでも何とか生きる謙虚さと力強さを獲得しつつあることが読み取れるのである。と同時に、けしてその生の矛盾から目を反らすまいとする姿勢も窺える。ケヤキの死は今や、彼女の内で、若く猛々しく知性へと変りつつあるのだ。

(たかはしだいすけ／住み継ぎネットワーク)

# 花をみつめるこころ

井 出 泰 平

私はよく仕事帰りに花屋に立ち寄る。とりわけ花を趣味としているわけではないのだが、なんとなく物の多い殺風景な六畳の自室に花が欲しくなる時がある。その花屋というのは、東京は某放送局の近くにあり、スタジオで使う花をアレンジメントしたりという一風変わったことをしている。夕方にはスタジオから下げられ、一仕事終えて花屋に帰って来た花達はたまに訪れる私の部屋を飾ってくれるという寸法であったりする。眩しく、そして容赦のないテレビ局内のスタジオで呼吸することも許されない環境で花達は、「花である」ということを表現する。自らに課せられた仕事を十二分にはたした為であろうか、その疲労の色は隠しきれず、野に咲く花にくらべ見劣りすることは否めない。だが、そんな花達は残された命で私の部屋を豊かにしてくれる。そしてなにより心をほっとさせてくれる。

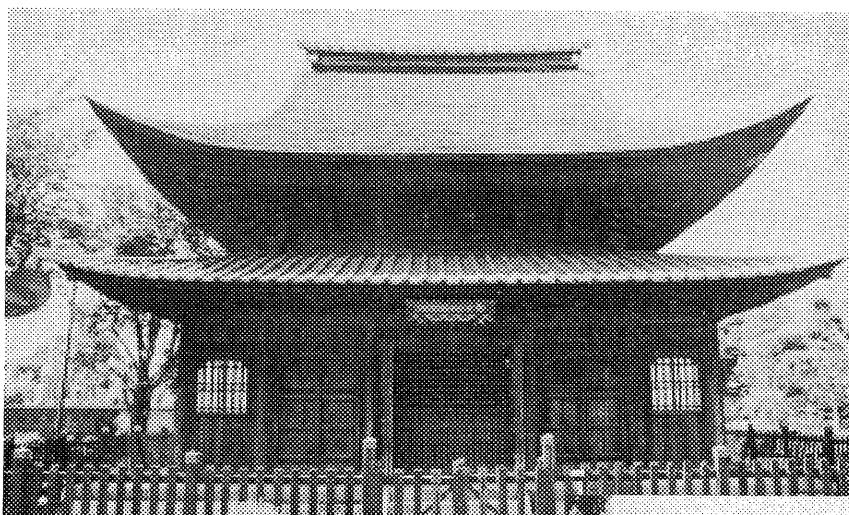
先日、私は「もののけ姫」という映画を観ました。その中で二人の主人公が出てくるのですが、その一人は、欲に目がくらんだ勝手な人間達にいいように森の秩序を乱され、破壊されていく自然の中で育った「もののけ姫」。そしてもう一人は矛盾だらけの人間社会で育った「あしたか」。この両者に代表される自然と人間社会は何度も争いを重ねた末に、「共に元の世界に戻り、生きよう」という結末にたどりつけます。そのストーリーの中で「森と人間の共存」という大テーマに敢然と立ち向かう二人の主人公の姿は、私にはとてもたくましく映り、そして勇気を与えてくれました。

経済中心に動き、そして技術の進歩による「何でも出来る。やっていいんですか？いいんです！」状態の人間様的考え方のはびこる現在の世の中。そんな自分の生きている環境から逃げ出すことなく、大きな視野で物事を見ることを忘れずに改善していく、またそう努力する。花が私の部屋や心を豊かにしてくれたように、森羅万象の産物が私たちに与えてくれるかけがえのない贈り物に「ありがとう」と感謝する気持ちを、なによりもまず初心として、忘れてたくないと思う今日この頃であります。

# 東村山探訪 近くて見つけた宝物 1

吉 塚 幸 雄

■ 都下東村山市に、徳蔵寺という臨済宗の寺がある。江戸時代初期の開山といわれ、鎌倉時代末期、倒幕の兵を挙げた新田義貞が、この地に布陣したことを裏付ける重要な史料、元弘の板碑（国重要文化財）があることで有名である。この寺に父の墓があるので、毎年2回この寺を訪れる。今年3月お彼岸、始めてこの周辺を散策していた時に偶然、正福寺という寺を見つけた。境内中央に古そうな建物があるので近寄ってみると、「国宝正福寺地蔵堂」と書いある。灯台もと暗しとはのこと、こんな近くに（私は隣の小平に在住）国宝の建物が現存していたとは、驚きであった。この地蔵堂は寺の縁起に因ると、弘安元年（1278年）この千体地蔵堂を建てたと伝えられ、昭和8～9年の改修工事で発見された墨書銘によって応永14年（1407年）建立であることがわかった。この地は、北に八国山という狭山丘陵が広がる。あの宮崎駿原作「となりのトトロ」の舞台となったところ



■ 国宝正福寺地蔵堂近景

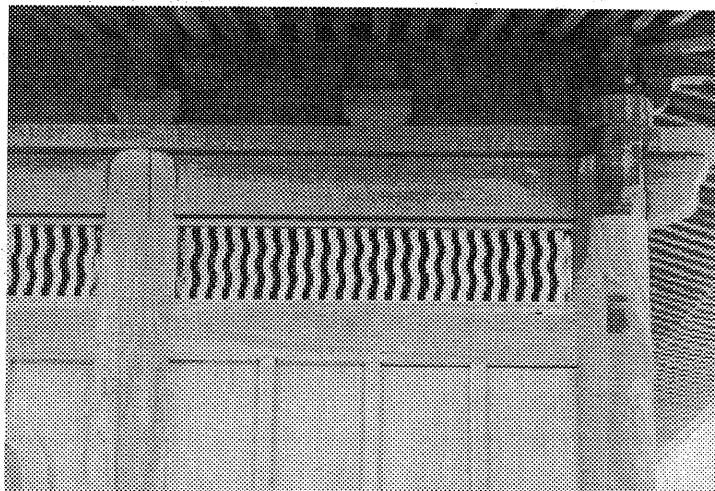


■ 昭和8・9年の改修時は茅葺きであった

だ。まだまだ、武蔵野の面影が残っている。しかし、御多分にもれず、無秩序な開発の波がすぐそこまで押し寄せ、のどかな田園風景も近い将来、一変してしまうに違いない。

■ この正福寺が都内唯一の国宝建造物で、鎌倉円覚寺舍利殿と並び称される唐様建築の代表的な遺構であることが、二つ目の驚きであった（勉強不足がはづかしい）。円覚寺舍利殿は、普段正面の姿しか見ることができず、いつも悔しい思いをする。しかし、この建物は周囲を隈無く、観察できるのが喜ばしい。反りのある威風堂々とした柿葺きの屋根、花頭窓に唐様の特徴を見せ、約600歳という高齢ではあるが、まだまだ矍鑠たる姿を見せている。

この正福寺について、実に詳細に解説されている本があった。それは、「伝統のディテール」廣瀬鎌二氏執筆（彰国社）である。貫構造の始まり、そしてその発展など、克明に記されている。（写真の解説文は、この本からの引用です。）



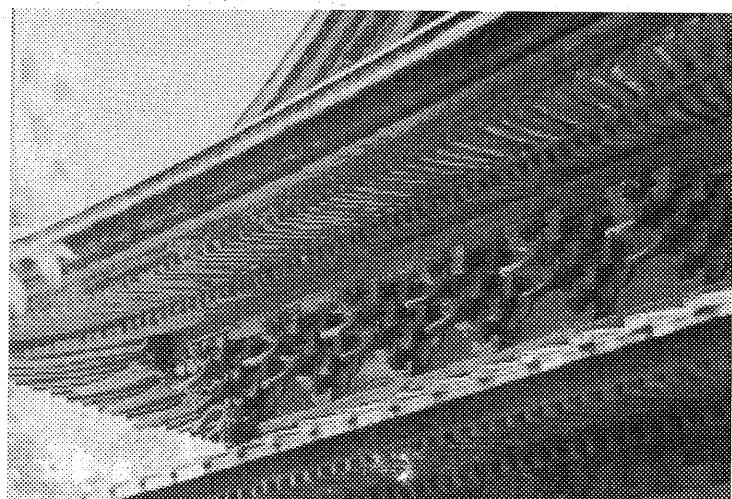
#### ■ 貫構造

天竺様・唐様とともに導入された貫構造。

唐様では、隅で合欠きにして柱を抜き、くさびを打ってとめる、「こねぼぞ」になっている。

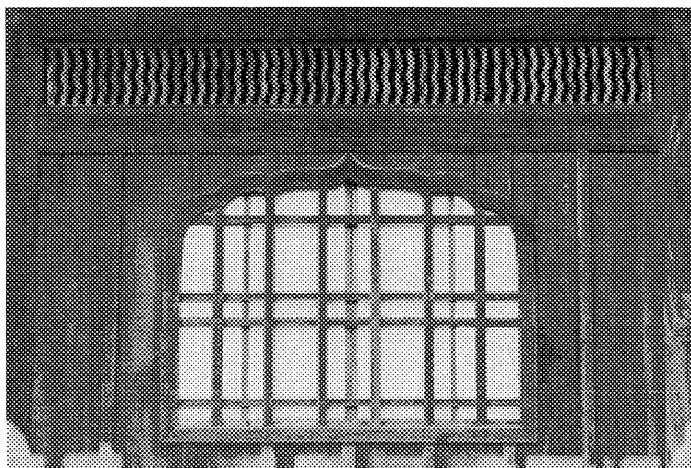
室町時代にはいると、内法貫、足固め貫へ発展する。

（P52参照）

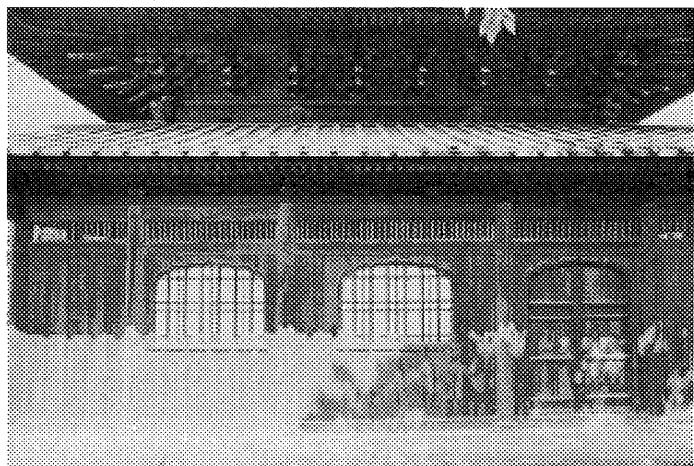


■ 組物：唐様の組物は三手先の場合尾垂木が2本見えるが、このうち下の1本は普通肘木の先を尾垂木風にこしらえる。

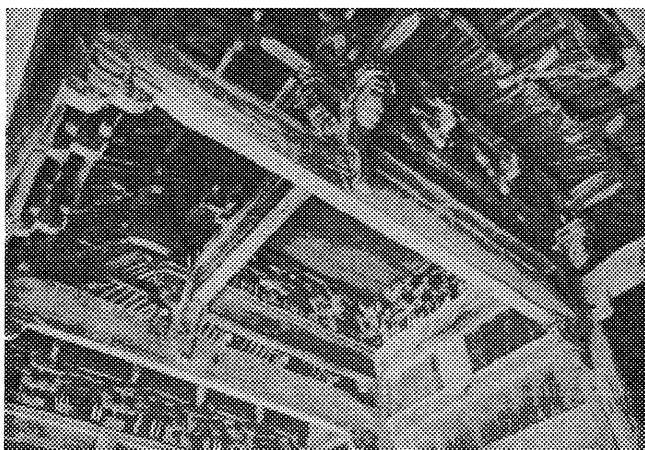
（P58、P64参照）



■ 窓：花頭窓。(P 90 参照)  
欄間の波形のデザインが  
美しい。



■ 板壁：貫構造の導入とともに貫を利用した竪羽目が  
はじまる。(P 114 参照)



■ 化粧小屋裏：唐様正福寺も当  
時の中国輸入の形式で小屋組が  
そのまま化粧になっている。  
(P 154 参照)

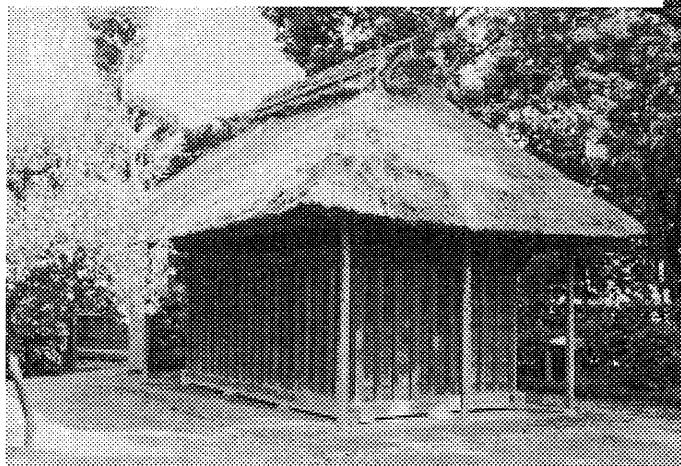
■ 長い歴史のなかで、貴重な建造物が戦火や火災で焼失してしまった中で、正福寺地蔵堂が、こうして現存していることは奇跡に近い。いつまでも長生きしてほしいと願わざにはいられない。

## 小平探訪 近くでみつけた宝物 2

小平の地は、江戸時代初期、玉川上水の開通にともなって開発が行われた新田村落であった。青梅街道を中心として、かつては屋敷森に囲まれた農家が並び、街道をはさんで、南北に短冊型の畠が続いていたという。私が引っ越しして来た昭和41年頃は、まだ茅葺きの農家が残っていた記憶がある。今思えば、写真に記録しておけば良かったと悔やまれる。屋敷森は、関東ローム層特有の春の赤風と、秋の台風に備えて植樹された櫻が多い。春の新緑、秋の紅葉、冬の裸木が美しい。その面影は、小平霊園に突き当たる東京街道（江戸街道）や、西武新宿線南側の鈴木町あたりに現在も色濃く残っている。中に、樹齢300年、高さ35メートルにおよぶ大櫻（市天然記念物）が、今も健在である。これからも風景の中に、市民の共有財産として、いつまでも残ってもらいたいと思う。しかし、「良い環境は、私達一人一人がつくるもの」という意識が定着しない限り、いつかはこの風景も無くなってしまうだろう。

平成5年3月、小平の地に残っていた茅葺きの農家や旧小平小川郵便局舎などの市の文化遺産を移築、復元し、一般公開を目的として「小平ふるさと村」がオープンした。この中に旧鈴木家住宅穀櫃がある。穀櫃とは、別名「ヘーゲラ」と呼ばれ飢饉、天災に備えて、各村が幕府の政策の基に作った稗倉のことらしい。

この旧鈴木家穀櫃は、激動の幕末、維新動乱期に備えて建てられたもので、昭和54年まで屋敷森の中にひっそりと佇み、風景の一部となって、大事に使われていた。



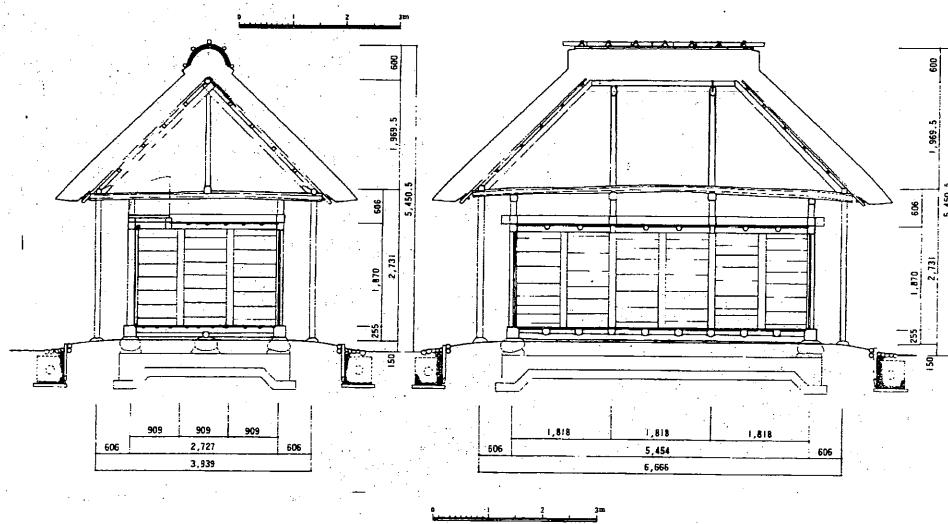
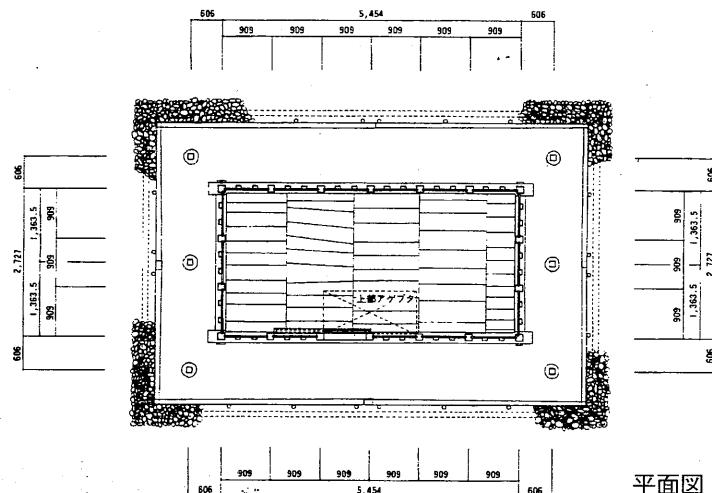
▲写真：新田村落の記憶「屋敷森」

◀写真：旧鈴木家穀櫃近景

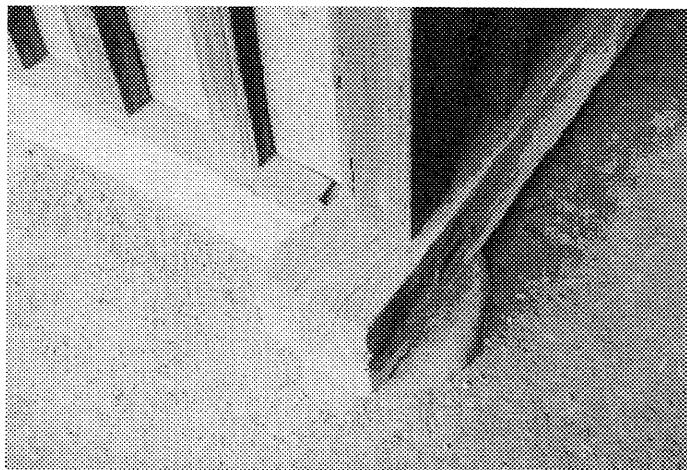


## ■ 旧鈴木家穀櫃の特徴

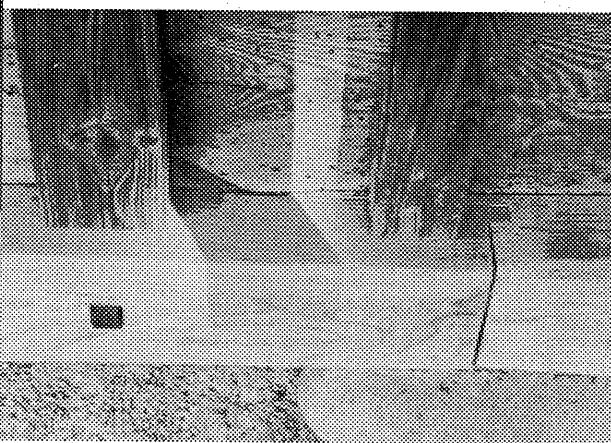
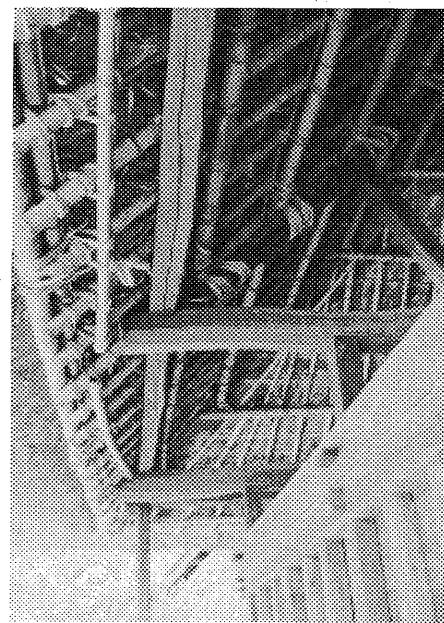
- ① 建物の大きさは、間口3間、奥行き1.5間。
- ② 檜の土台を基礎の上に廻し、その上部に3尺ごとに柱、1尺ごとに太い間柱をたてて、厚板を柱の間に落とし込む板倉造りである。
- ③ 屋根は茅葺き、小屋は、敷桁に束をたてる。桁梁を架けて叉首を組み、棟木をのせる。
- ④ 天井は、梁間2尺ごとに、杉丸太（末口90mm程度、上面手斧はつり）の根太を架け、桁に蟻落とし、その上に厚さ20mm程度、巾1尺の松板を和釘で止め水平合成をとっている。
- ⑤ 軒の出を深くするために2尺の出桁造りになっている。



## ■ 仕口・継手あれこれ



■ 土台の材質は檜、玉石礎  
石光付け仕口は桁行の土台  
へ長ほぞ差し楔2枚打ち。



- 柱は土台に長ほぞ差し込み栓打ち桁に長  
ほぞ差し楔打ち。
- 土台の継手は尻挟み継ぎ
- 側廻りは3尺ごとに松板を落し込む、板  
は相決りとなっている。
- 梁は桁に2枚横ほぞ差し、割楔締め。

■ この建物は、屋根と下の壁と縁が  
切れ、浮いてみえるのがとても良  
い。そしてこれらの無駄のない単純  
明快な骨組み、意匠と構造の一一致を  
見て、木を愛した昔の職人は、どん  
な仕事でもけっして手を抜かなかつ  
たのだなと思う。先人に倣うこと  
は、実に多い。

# 薬師寺伽藍から学ぶ。 その1編

鈴木久子

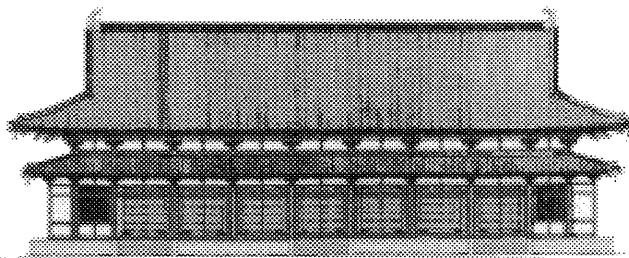


薬師寺遠望（勝間田池より）

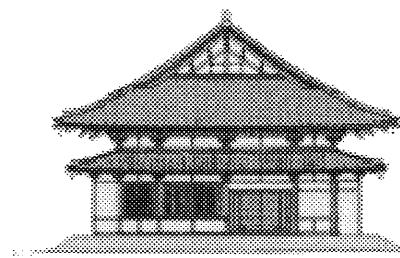
奈良の街は何とも言えない居心地の良さがある。だから奈良にくるとホッとする。それは何だかすまして歩いている鹿達の眼のように親しげであたたかいからかも知れない。薬師寺では昭和43年から平成14年迄の40年にわたる歴史的大事業が続いている。途方もない歳月と莫大な費用を費やすそれを、寺は国の補助金を頼みとしない型で進めている。いわば孤立無援の地道な宗教運動として受け継いでいる。白鳳時代の堂塔伽藍復興がそれで、すでに西岡常一棟梁による西塔の再建は終わった。西岡棟梁逝去は未だ記憶に新しいところである。現在は大講堂を建設中で基壇部分がほぼ姿を表しつつある。

## ■薬師寺伽藍復興見学会に参加

大講堂再建の話を聞き、大工棟梁たちが受け継いできた知恵を直に学ぶ機会あらばと思っていた矢先の昨年10月24・25・26日、見学会に参加することができた。



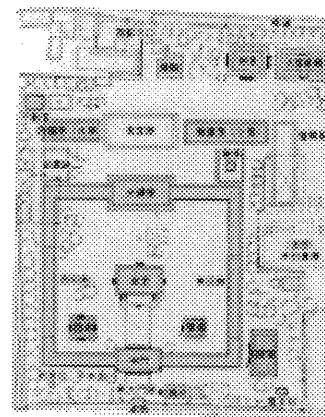
薬師寺大講堂 南立面図



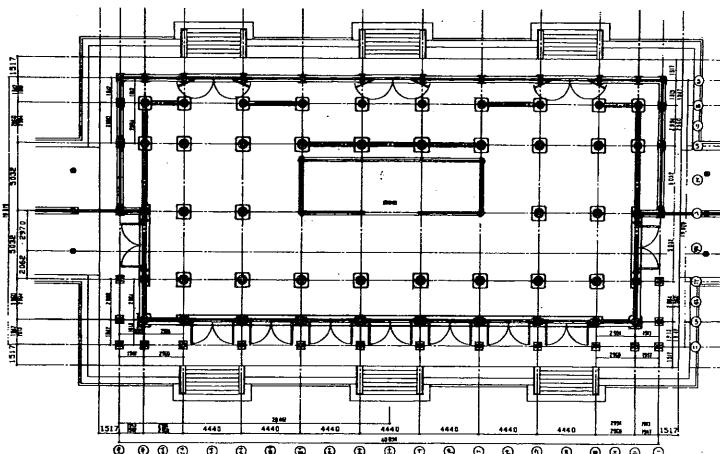
薬師寺大講堂 西立面図

工事を担当している池田建設は西岡棟梁も「池田建設は大工が仕事しやすい環境づくりをしてくれるので大変良い。」と評価しておられたとうかがつた。案内役の薬師寺工事所長の石川博光さんは20代で池田建設の主任となられ、以来30年薬師寺再建一筋に生きてこられた。伝統的木造技術についても、歴史的事実についても実に詳しく、大きな声で熱心に話していただいた。正に生き字引の様に正確で豊かな知識の持主である。

西岡棟梁亡き後を引き継がれた上原筆頭棟梁は小柄な体格と物静かな語り口に長い経験の実績からくる凜としたものを感じた。どんな質問にも具体的かつ正確に答えていただいた。

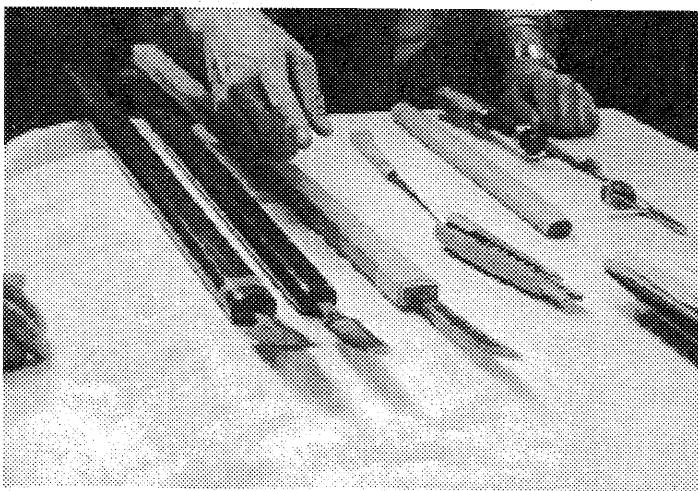


薬師寺伽藍



薬師寺大講堂 平面図

## ■木のいのちを生かすヤリガンナ



ヤリガンナの種類

さである。梁の仕口は驚くほどなめらかで、恐る恐る触れてみた指が吸い込まれそうな精度である。

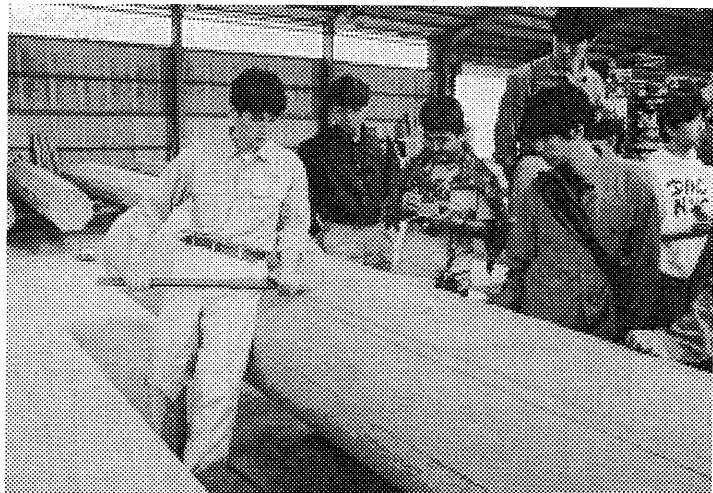
ヤリガンナにもいくつかの種類があつた。平面仕上げ用、曲面仕上げ用、刃が表についたもの、裏についたもの… 大工さんが各々鍛冶屋に注文し、自分に合った柄をつけると聞く。小さな刃のついた長い柄をゆっくりと木の表面に沿って動かすと一筋ずつくるくると丸まった削り屑が生き物のように躍り出てくる。

かつて西岡棟梁は木の繊維を傷めないヤリガンナを奈良時代の和鉄釘を鋳なおして再生したと本に見える。千年の桧のいのちを生かすために、仕上げはヤリ Ganba でなければと棟梁は考え、大講堂の現場でもそれは受け継がれている。

現場の若い大工さんたちの真摯な眼差しと無駄のない動作が印象に残っている。歴史に残る仕事をしていると言う誇りと喜びに充ちた表情は清々しく、見る者をも感動させる。

大講堂の木材加工場では柱、梁、柵、肘木等の加工が進んでいた。柱は千年以上成長した桧が必要であるが、日本で揃えることは今では不可能で台湾で調達されたものである。

芯去り 9.5M の 60 センチ角の断面を八角・十六角・三十二角として円形に近づけていく。芸術品のような木理が正に光り輝くまぶしさである。



ヤリガンナの仕上げ

## ■貧者の一灯・お写経勧進

この白鳳伽藍を現代に再現するという大事業は一巻2000円の写経で賄われている。案内された写経道場の文机を前にゆっくりと正座してまず墨をする。真っ白い半紙の下には原寸大の般若心経のコピーが敷かれていて、それをていねいになぞってゆくシステムである。慣れない所作にしばらくは、ざわついていたまわりからスッと物音が消える。久しく持ったことのない毛筆を手に般若心経一巻(約270文字)を写す。無心に心を込めて一時間あまり。隣の人の進み具合が気にかかる。でも最後に自分の名前を書き終わる頃には、何とか筆の運びもスムーズとなる。言葉の意味をチラッと考えるよりもでてくる。

薬師寺はこの募金形態で何百万巻も納経され、すでに金堂・西塔を完成させている。後で経蔵の中を見せてもらったがきちんと分類され棚に納められたその量の膨大さに唯々圧倒される心地がした。驚いたことに、ひとりで一万巻以上、写経した人もいると事務長の北川さんからうかがった。ちなみに一万巻と言うと約一万時間要することであり、不眠不休で写経し続けたとして約416日という計算になる。いやいや、こんな俗っぽい計算は無しにして写経のひとときは心を洗い流されるような鮮烈な体験であった。

## ■慈恩殿での講義

夕方から深夜に及ぶ講義は広瀬鎌二先生と鈴木有先生、特に広瀬先生は2夜に渡る連続

講義で大変興味深いお話を  
していただいた。広瀬先生  
のお話で心に深く刻みつけ  
られたのは次のような事であつた。

「建築とは人間の生活の  
欲求をつくる仕事である。  
建築がつくられることによ  
つて自然を破壊する。しかしこれは止むを得ないこ  
とであり、必要悪である。」

「私はかって鉄骨で10年  
(約100棟)大学では30年休息した。次の私のライフワークとして木造を中心にして考  
えようと思った。我が国の木造の技術は世界に示して恥じないものである。しかしながら  
法隆寺の五重の塔が千年以上の耐久性をもって建っている、その構造解析すらしてこな

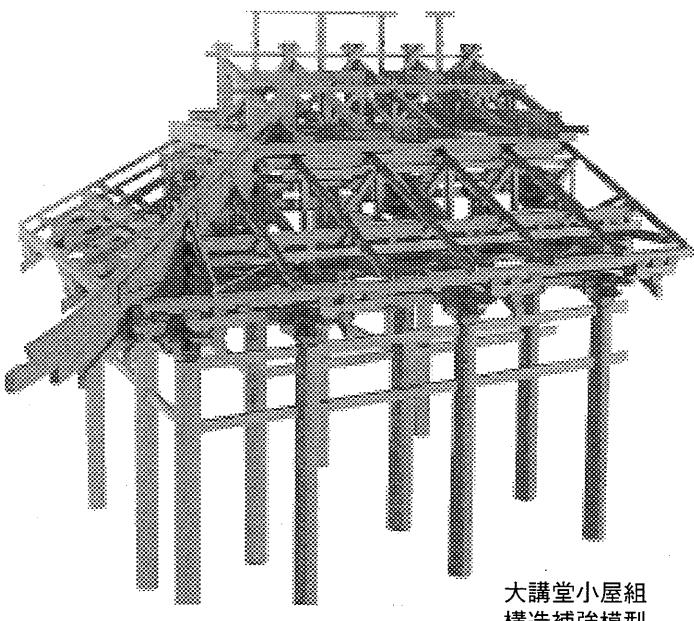


慈恩殿にて広瀬鎌二先生講演

かった。そろそろ心ある建築家達は日本の伝統的な木造の解析をすべきではないのか。」

鈴木有先生は「伝統工法の技術観」について次のように分析しておられる。木造住宅にみる「伝統構法」(民家の中で受け継がれてきた軸組の構法)と「現代工法」(大戦後普及したいわゆる在来軸組工法)の技術観は極めて対蹠的である。

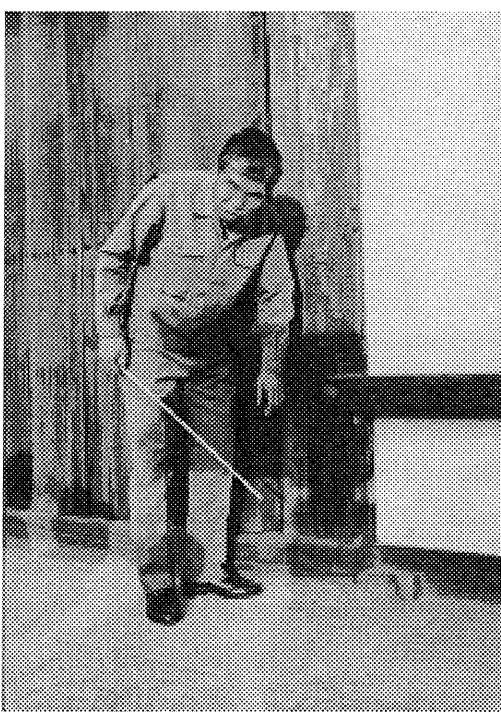
① 現代工法 → 構造力学の論理(西欧的合理主義)に基づき、力には力で抵抗する剛性の高い構造体を造る → 筋違い、厚板などの面材 → 「総力前線防衛型」 → 弱点があると地震力が集中、一気に大破壊に進む。



大講堂小屋組  
構造補強模型

② 伝統構法 → 自然体(日本自然観)で各所に分散しながら吸収する粘り強い構造体を造る → 土塗り壁、通し貫、木組みの接合部、柱直か置き基礎 → 「多段階防衛型」 → 地震力が大きくなれば壊れる部分も造っておき無理をしない。

すなわち「現代工法」は力には力の自然を征服する工法である。逆に「伝統構法」は自然の理に逆らわず、自然と共生するやり方・との説明は、大変判りやすく明解であった。



池田建設・石川博光さんより東塔の解説

## ■生活を問い合わせる

誰かの目覚し時計が鳴る音で目が覚めた。時刻は早朝四時半。まわりはまだ真っ暗である。眼気を振り切るように飛び起きる。今回、女性の参加は13名、写経道場の広間が宿舎として割り当てられていた。

五時から金堂で朝の勤行が始まる。写経道場から金堂に辿りつくには、一旦、門を出て道路を渡り、また北門を入って走らねばならない。1日目は金堂の少し手前で鐘楼の鐘をつく音が聞こえてしまった。遅刻である。男性軍は全員集合しており、朗々たる読経は既に始まっていた。ろうそくの炎に浮かぶ薬師三尊像は鈍い光を放って我々を見下ろしていた。波音のように続く読経のハーモニー、人間の声がこんなに美しく響く事に鳥肌が立つ程感動した。

勤行に続く宿舎の掃除……ふとんを運び、雑巾掛け、トイレとお風呂の清掃、全員黙々と真面目に続けていた。朝食はあたたかい茶粥と梅干し。食事の作法を教わり神妙な顔つきで二杯もいただいた。

何でも満たされないと錯覚している日常生活。贅肉をそぎ落とした心持ちの3日間であった。

今年はいよいよ大講堂立柱の儀が行われる予定と聞く。

# 熊川宿にモノヅクリの原点を見た—現場からの報告

松 本 昌 義

熊川宿は、若狭湾に面した福井県の小浜から京都まで、かつて鰆を担いで走ったという旧「鰆街道」沿い、現在の上中町にある江戸時代からの街道町。今はご多分に漏れず寂れてはいるが、かつての繁栄を思わせる漆喰塗りの倉や平入りの京風の塗屋が往年に近い状態のままに数多く残されている（写真1）。「熊川宿」の魅力はこれだけに止まらない。集落

が形成される過程における民家の形態的な変遷を記録したかのような、妻入りあり、茅フ

キありのバラエティー豊かな町並みや、かつては旅人の喉を潤したであろう、街道に沿って流れている通称「いどっかわ」の清らかな流れも魅力的だ（写真2）。

この歴史的な町並みを最も望ましいかたち、すなわち「人々が住み続けることにより、暮らしの文化を伝えながら保存」していくと、町役場や住民有志を中心とした長年におよぶ保存再生運動の成果として、2年前に国の重要伝統的建造物群保存地区（略して伝建地区）に選定された。

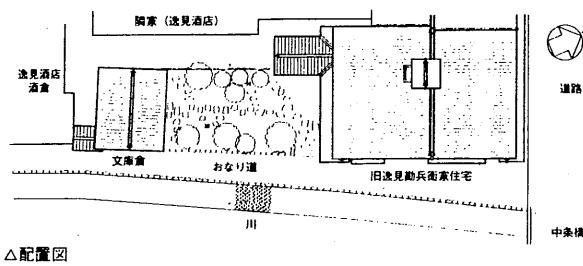
旧逸見勘兵衛家はこの「熊川宿」のほぼ中央部、街道沿いにあり、町並み景観上重要な質の高い町屋。伝建地区の選定に先駆け平成7年度からの2ヶ年に渡り、「熊川宿における民家保存



写真1 熊川宿の町並み



写真2 「いどっかわ」の流れ



△配置図

図 1

のモデルケース」と位置付けられた主屋の改修整備事業に際し、私は連合設計社市谷建築事務所の所員として、吉田桂二さんの元に設計と現場監理を担当した(図1、写真3・4)。その内容については、「住宅建築」97年9月号に紹介されているので詳しくはそちらをご参照願うとして、ここではその3期工事として実施された「文庫倉」と庭園の整備事業に関して、その概要および私が初めて経験したことや感じたことをご報告しておきたい。

## ●改修前の文庫倉

文庫倉(土倉)については、ギャラリー的な再利用を前提として、改修設計に先立ち庭園も含めた詳細な実測調査を行った(図2)。その結果、外壁の脱落や木材の腐朽などの痛み具合は主屋ほどではないものの、建物全体が川側および隣の酒蔵側に傾いている状況や建物と基礎に残されていた痕跡と昔の写真から、以前は蔵前が付属していたことなどが判明したため、これらを踏まえて改修計画をたてた(図3)。

図1 配置図

写真3 主屋外観

写真4 主屋内部

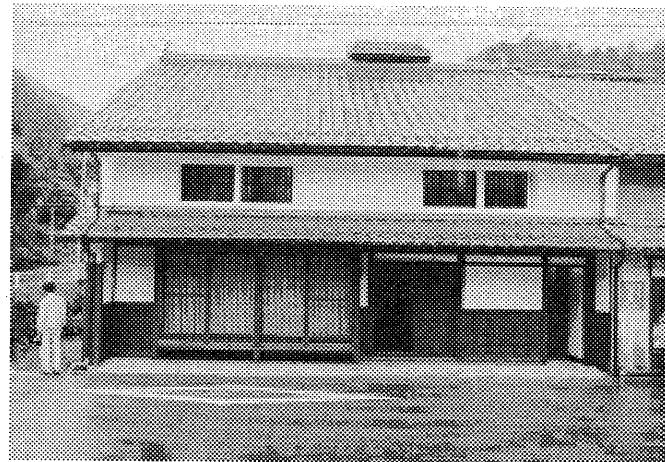


写真 3

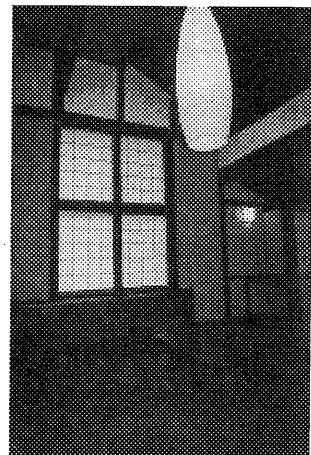


写真 4

## ●改修計画の概要

### 1. 土壁を付けたままのジャッキアップ

建物が傾いているのは既存の石積み基礎が部分的に沈下しているためなので、本来ならそっくりやり変えたいところだが、予算や工期との兼ね合いと現場の状況判断により、既存基礎の上にRCの基礎を新たに打って水平を出すことにした。そのためには、基礎工事期間中、建物をそっくり上に持ち上げておかなければならない。当初は骨だけにして持ち上げることを考えていたが、再度土壁を塗るとなると工費、工期ともに無理が生じる。手を尽くして調べた結果、土を付けたままで持ち上げられることが判明、ひとまずはほっとしたが、見積りを取ってみると、そのための仮設費用はざっと100万円かかる。ただでさえ少ない予算の中にこれを見込んで設計しなければならないことは辛かったが、フタを開けてから頭を抱え込んだり、業者を泣かせたりするよりはよっぽどましと思い直した。写真5はバタ角を何段にも重ねジャッキを使って建物を持ち上げている工事中の様子。見るからに危なっかしい様子に、地震が来て大事に至らぬうちに早く降ろして欲しいと願わざにはいられなかった。



写真5 ジャッキアップの様子

### 2. どんな工法を選択するか

外壁の補修については、当初、ラスモルタル下地に漆喰塗という現代の一般的な工法による方法を提案したが、最終的には土塗壁による方法が採用された（写真6）。伝建地区選定以降の熊川宿における一般民家の改修を前に、あくまでも伝統的な工法を採用して、その技法を含めて継承しようとするのか、それとも形態は尊重するとしても、工法にはこだわらずに現実的な経済性を優先するのかといった点については、慎重かつ早急な議論の必要性を強く感じた。個人的には、熊川宿に限らず一般に、建物の重要度に応じて柔軟に対応してよいと考えているのだがどうだろうか。

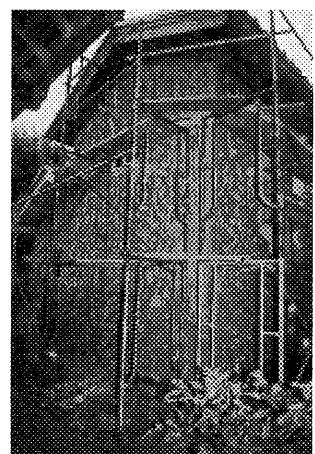
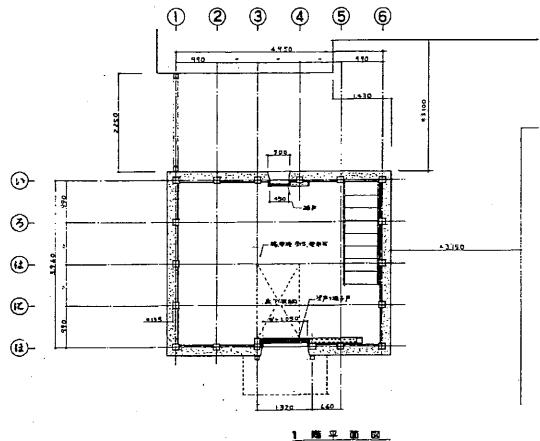
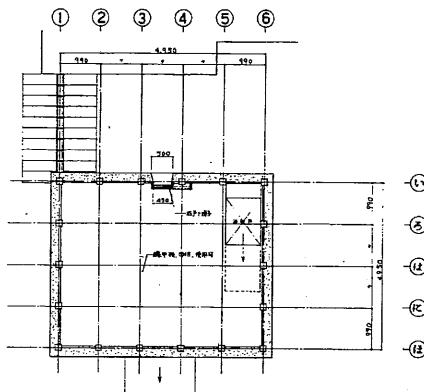


写真6 土塗壁を施工中の様子



1 既存1階平面図



2 既存2階平面図

図2 既存1階平面図

既存2階平面図

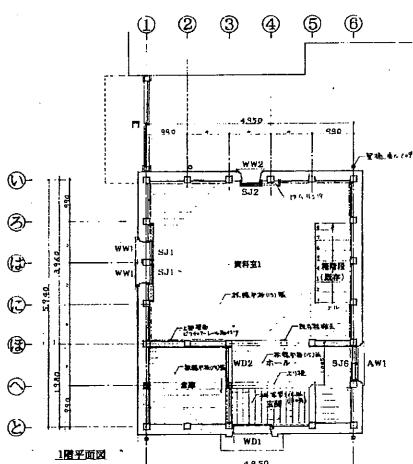
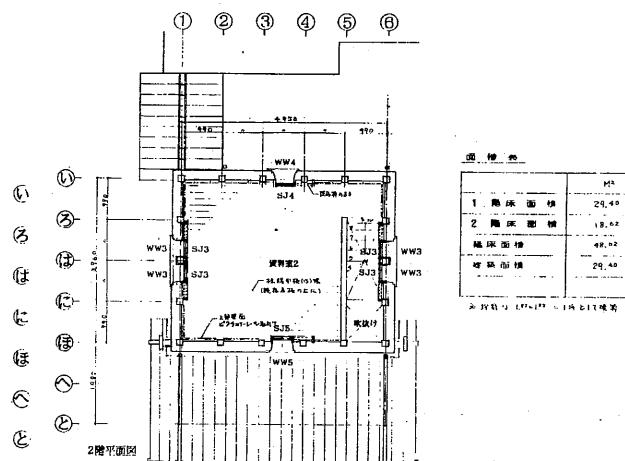


図3 改修1階平面図



改修2階平面図

### 3. 蔵前の復元

ギャラリーとして利用する際の利便性を考え、玄関ホールや受付、収納などの機能を附加するために、庭側に1間増設して蔵前を復元することにした。高さについては既存外壁にあった屋根の痕跡から推定している。また、蔵の出入り口は塗り戸が本来であるが、重すぎて使い勝手が悪いので板戸を採用した。

#### 4. その他の改修と設計の姿勢

屋根に関しては、既存の役物瓦を極力使用するようにして葺き替えるよう特記したが、実際に再使用できたのは鬼瓦、巴、立波と棟瓦の一部のみ。軒先やケラバ瓦は今の瓦と寸法が違うために使えなかった。ちなみに、「立波」はこの辺り特有の形態をした鳥伏間のことと指す。

妻壁には採光および立面を美しくするために、1階1ヶ所、2階に2ヶ所の窓を新設した(写真7)。建物の歴史的な評価にもよるが、建物の利活用を前提とするときには、昔のかたちのままに補修するよりも、使い勝手や美観を優先させた方がよいと考えてのことだ。元々板張りであった1階の内壁を明るい塗り壁に変更したのも展示の都合、つまり使い勝手を考えてのことだ。



写真7 改修後の文庫蔵川側の外観と主屋

#### ●初めに材料があつてのかたち

かつて私は、四角を書いて×を入れれば隠れる柱で、斜線を入れれば見える柱、材料がどこからくるかは知らないけれど、工務店に頼めばなんとかなる、といった程度の意識で設計していた時期がある。しかしそれで納得していたわけではなくて、何か振っ切れないものを感じながら仕事をしていた。数年前に、岐阜県の付知という所で工芸をやっている人を訪ねたことがある。そこで働いている職人から、「私たちは材料をみて、それから形を決めるんですよ」という話を聞いて少しうらやましく思った。設計者が材料を切ったり削ったりすることは考えにくいが、目の前にある材料を創意工夫して使うような設計姿勢にこそ、設計者における「ものづくりの原点」があると考えていたからだ。しかし、いちいち材料を見てからというのでは経費もかかるし、設計の能率も上がらない。第一、設計の段階から材料について相談できる相手がない。そうありたいと思っても、難しい現実があった。

この文庫倉においては、私の考える「ものづくりの原点」を目の当たりにすることができた。根曲がり松梁の美しさを実感している人は多いと思

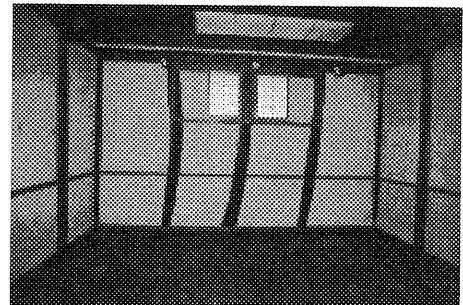


写真8 改修後の1階展示室曲がった材を柱に使っている

うが、文庫倉では、今の常識では考えられないような曲がった材を柱に使っていたのだ（写真8）。そして、それが妙に美しい。材の曲がりなりに根元が壁に吸い込まれていく出隅の柱（写真9）には感動すら覚えた。

### ●熊川宿の課題と私のこれから

町並み保存は息の長い仕事なので、その間にはたくさんの設計者や施工者が関わるだろうし、またその方が望ましいと思う。熊川宿が「住みながら保存」してゆくのであれば、保存は復元に止まるはずではなく、創造的な保存が不可欠とすれば、どこまでが許される範囲で、譲れない線はどこなのか、調査資料を基にした誰にでも納得できるようなガイドラインを決めておく必要がある。「熊川宿における造形言語」なるものの調査と整備が急がれるところだ。さらに、町並み保存は住民の賛同と協力が大前提としても、同時に実際の工事に携わる工務店や職人の生活、そして誇りをも満足させられるものでなければ長続きしない。これらの人々に呼びかけて「熊川宿技術者会議」なるものを興す事により、保存の意義的及び経済的な了解のもとに、これに携わる真のプロフェショナル集団をつくりあげてゆく必要があると感じた。

私はといえば、連合設計社を退社してから、自分のかたちを追い求めてきたつもりだが、そう簡単に見つかるものでもないということも解ってきた。しかし少しヒントが見えてきたような気もしている。つまり、「人」と「材」の力が何らかの契機になるかもしれないということ。

旧逸見勘兵家文庫倉での体験はよい参考になった。この場をお借りしてこのようなきっかけを与えてくれた吉田桂二さんやお世話になった上中町の関係者の方々に、改めて心からお礼申しあげたい。

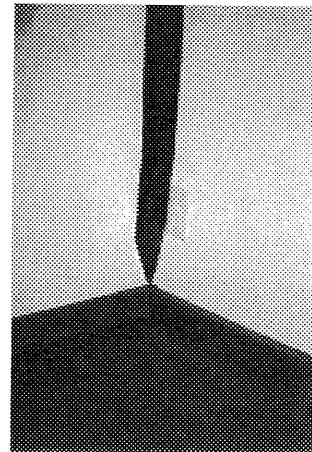


写真9 根元が壁に吸い込まれていく出隅の柱

# ベトナム・ホイアン・ミンカイ通り6番家屋の概要

金田正夫

## 1. ホイアンの歴史

ホイアンはベトナムの中部に位置し、海に近い立地条件は貿易港としての歴史を残す。

4世紀～10世紀 チャム族の支配するチャンパ王国の時代。チャキュウを都とし、ミーソンに祀堂群を建立し、ホイアンを貿易港とした。古代インドヒンズー文化の影響を受ける。

16世紀～18世紀 ベトナム北部をチン(鄭)氏、南部をグエン(阮)氏が支配した時代。ホイアンは南部の貿易港となる。ヨーロッパ・中国からの船や日本からの朱印船が来港し、市がたち、絹・香木・ショ糖の売買が盛んになる。それに伴って、日本町、中国町、オランダ東インド会社商館が建てられる。ただ日本町は1635年江戸幕府の鎖国令によって徐々に衰退をしていく。

1887～1954 フランスの植民地、第2次大戦中は日本軍が進駐。

1955～1975 アメリカの介入による第2次インドシナ戦争。

1976～ 南北統一。ベトナム社会主義共和国誕生。

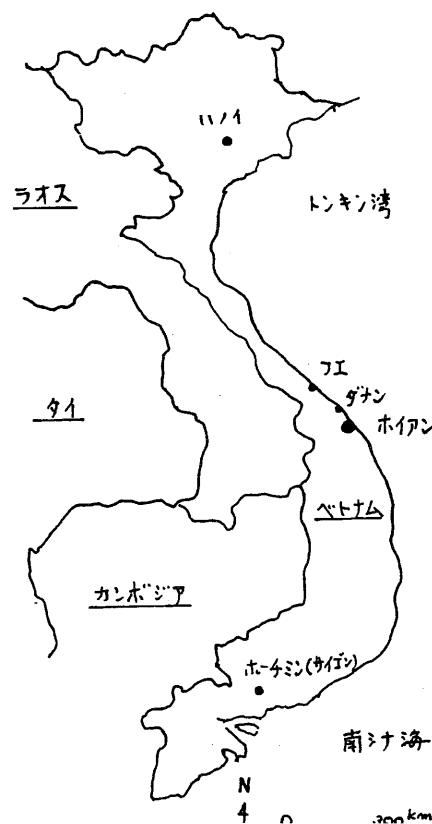
現在のホイアンに在住する華僑は多く、17世紀に清王朝からベトナムに亡命してきた明の遠臣とその家族及び商人の子孫と考えられる。(「古文書から見た町並み形成」マークチャン)

## 2. 町並みの特徴

### チャンフー通り

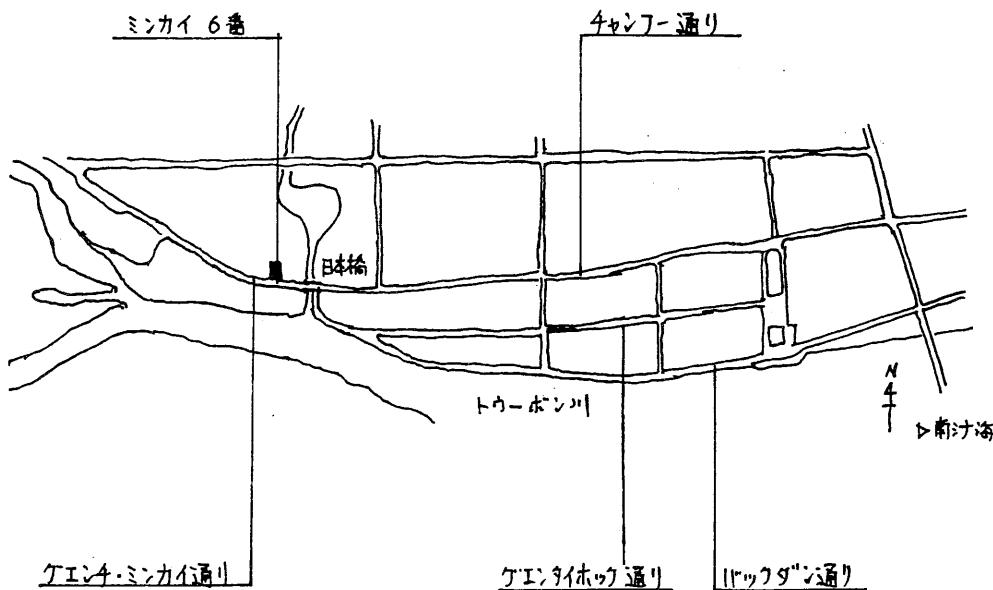
平屋形式の伝統的家屋が集中する。この町並みの形成は古文書や発掘調査によると18世紀以降で、通り南側の家並みは河に面していたとみられる。家屋後方(南)の倉庫から河の船に荷の積み降ろしをしていたことがうかがえる。しかし年代が進むにつれて河が次第に埋まり河岸が南下したとみられる。

中華人民共和国



これらの町並みは福建・広東・海南出身者によって建設される。  
**グエンタイホック通り・バックダン通り**  
 トーボン河の後退によって形成された比較的新しい町並み。19世紀以降とみられる。  
 2階形式が多く、フランス植民地時代の洋館もみられる。

**グエンティ・ミンカイ通り**  
 発掘調査により16世紀～17世紀頃の日本人・外国人居留地域であった可能性は大きいが、今のところ確かな根拠は見つかっていない。  
 現存する家屋は20世紀前半頃建設されたものとみられる。（「遺跡が語るホイアンの歴史と町並み形成」菊池誠一）  
 尚、ホイアンの地番は通りの片側を偶数に、反対側を奇数に番号付けされている。



ホイアン町並み保存地区の調査概要図  
 (1993～94年、昭和女子大学国際文化研究所が行った調査) (昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol. 1. より)

### 3. ミンカイ通り 6番建物の沿革

建設年代を特定する明確なものは今のところないが、年代を推し計る材料として下記を挙げることができる。

- 1) 土地家屋台帳には1811年と記載されているので少なくともこれ以降であることはわかるが現在の建物の状況からみるとこの当時のものというには疑問が残る。
- 2) ミンカイ 7番女主人の話では、この建物は祖父がミンカイ 6番の東隣 4番・他を含め12軒の貸家を建てたときの1つであった。このことから推し計ると人間の寿命からして建てられたのは今から100年以上前とは考えがたい。

#### 4. 敷地・配置の概要

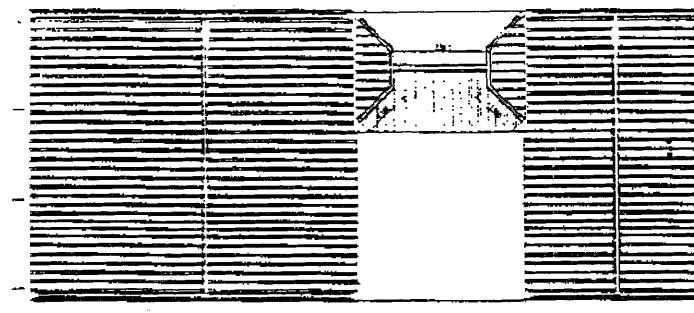
ミンカイ通り6番の敷地はミンカイ通りの北側、日本橋より西へ3棟目に位置する。間口は約8.5m奥行は約27.5mの短冊型。

敷地両側面の隣地境界は厚さ300の煉瓦壁が屋根面まで立ち上がる。その内側に通り側から前家・橋家・後家の3棟が連続して建つ。前家は通り側に、後家は敷地奥に、その巾一杯に、橋家は両者を継ぐ形で西側に寄せ、東に中庭をとったコの字形の配置で建つ。敷地の最奥には後庭がある。

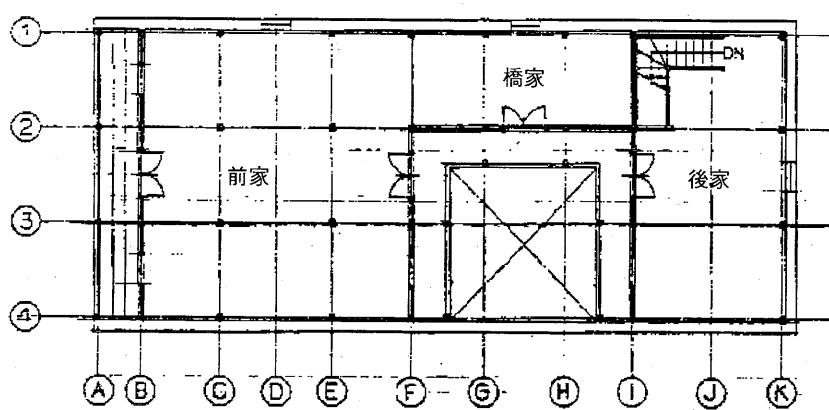
解体時は1階、2階共小割りに分割され、各々別の世帯に貸されていたが、当初は一世帯だったようである。ミンカイ通り7番の女主人からは前屋には祖先を祀るところと、仏間があったこと、そこは他の床より一段上がっていたこと、ミンカイ通り4番と6番とは左右対称に造られていたことが聞き取られている。

隣りの4番中庭には屋根がかかっており、6番にもかかっていたとみられる柱の柄穴を見つけることができたが、4番主人からは当初はなかったという話も出ていることや、骨組みや仕口に他と比して不自然な面があって、初めからあったかどうかは確かではない。

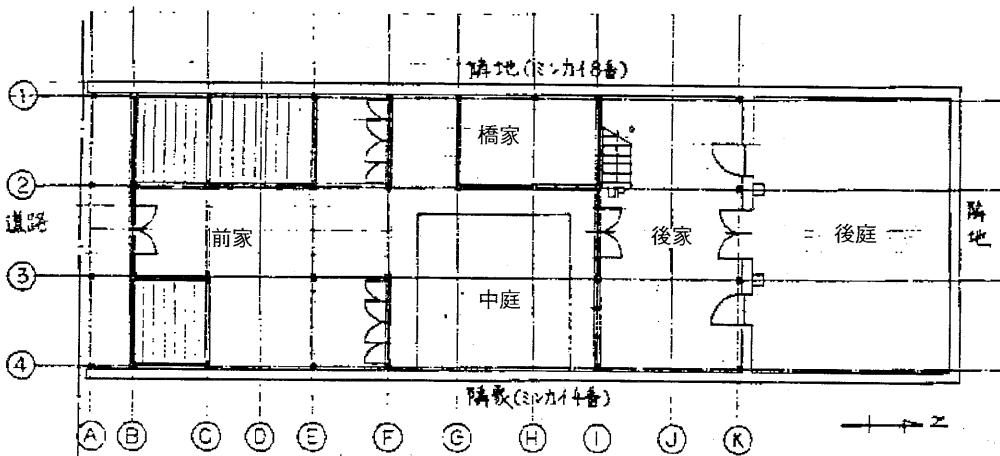
下図復元図は日本建築セミナー増田千次郎、川田常雄によるものですが、その復元根拠については現時点では資料が整わないため載せることができませんでした。



屋根伏図 1:200



2階 平面図 1:200

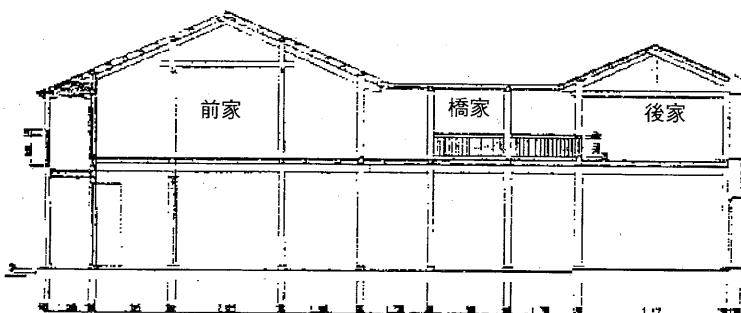


1階 平面図 1 : 200

## 5. 建物の概要

### 1) 前家

桁行3間、梁間3間、2階建、切妻造り、陰陽瓦平入り、2階正面に柱立バルコニー、背面に跳ね出しのバルコニーが付く。



長手断面図 1 : 200

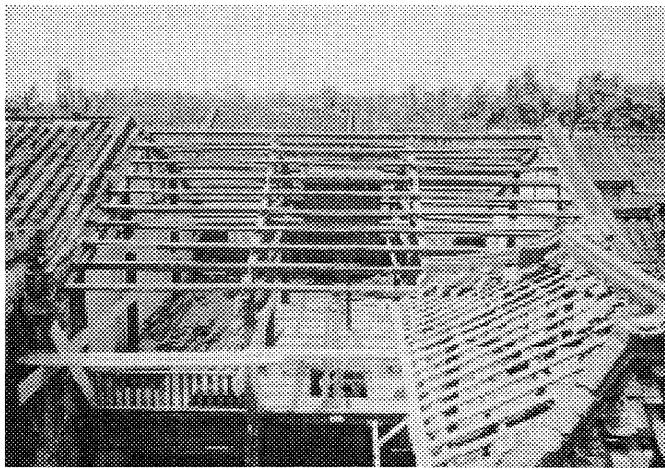
**[構造]** 柱は全て角材で、桁行方向が長手の偏平となっている。1、2階の柱は全て同じ位置に立ち、通し柱は背面一列の4本となっている。形は全て桁行方向が長い偏平柱。大きさはバルコニー柱が約 $170 \times 120$ 、他は約 $200 \times 180$ 、2階は1回り小さくなる。柱・梁共キンキンと呼ばれる堅木が使われ、橋屋・後屋も同じ材である。

小屋組は登り梁を柱に輪薙（わな）ぎ込み、棟は登り梁同士を輪薙ぎ込み、込み栓打ちとし下の差し梁から束を立てて受ける。柱頭及び登り梁の上に母屋を置き、板垂木を打ち、垂木間に平瓦を並べ野地を作る。

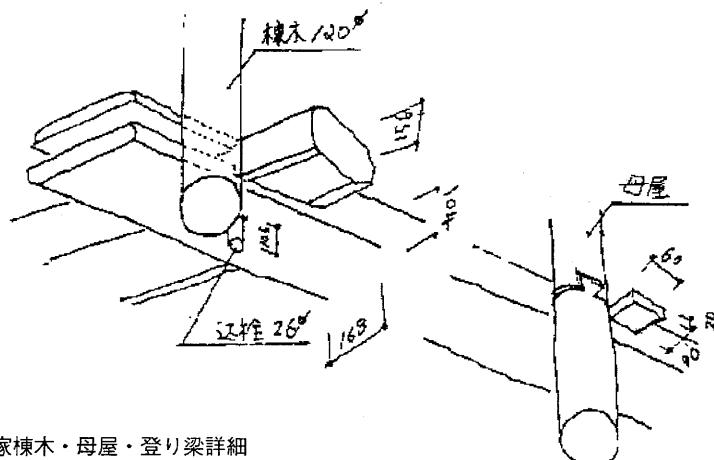
梁間方向中央間を身舎（もや）とし両側を庇とする構成になっている。これは前

屋のみにみられるもので、橋屋・後屋とは異なっている。

母屋は柱上は角材、他は全て丸太材。柱上の角材は水平にすえられている。継ぎ



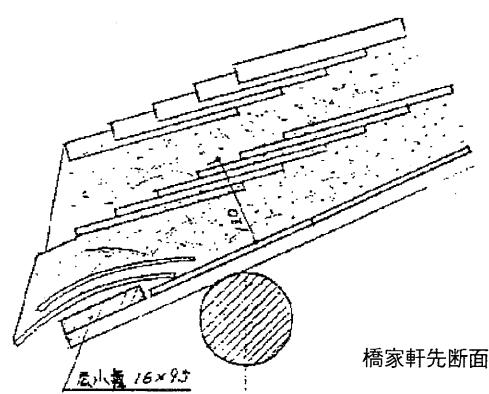
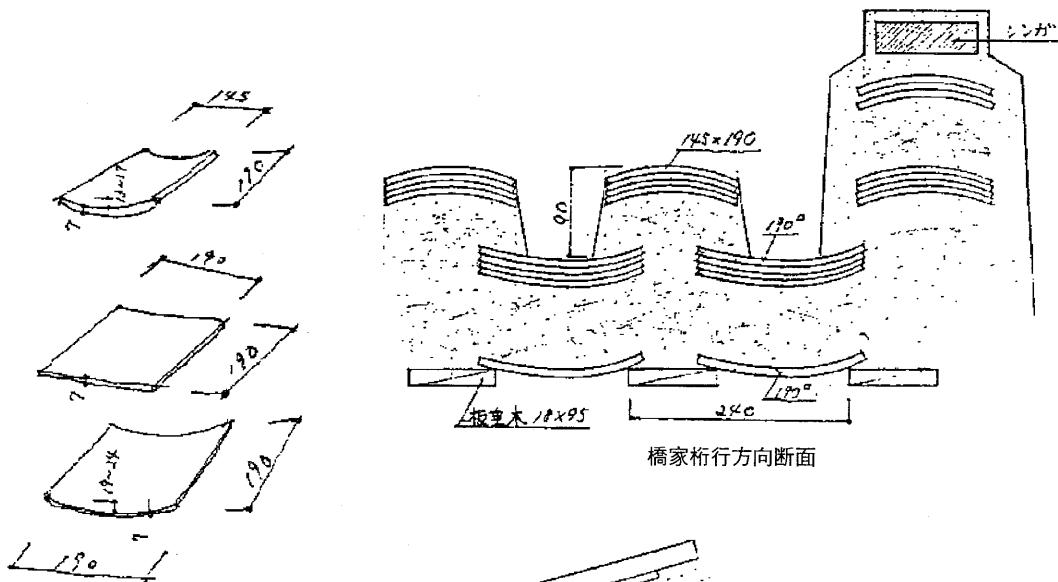
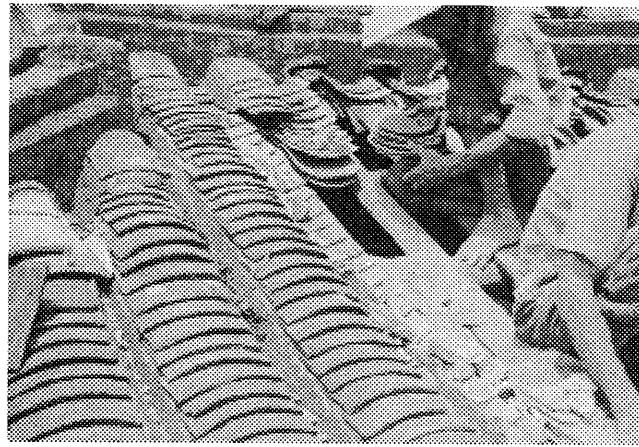
手は登り梁の上で蟻（あり）継ぎとし、柱上の場合は輪薙ぎの両立上りに付けた蟻柄（ありほぞ）穴に左右の母屋を各々びんた蟻落しとしている。



前家棟木・母屋・登り梁詳細

[屋根] 屋根は薄い素焼きの平瓦を表裏交互に葺いたもので、アムジュン（陰陽）と呼ばれている。

この建物に使われていた瓦は下図の3種類であった。190□タイプがほとんどで、野地に使うときもこれを使っている。190□の平瓦がどこに使われていたかは不明。145×190の1番小さい瓦は橋家の表～に使われていた。強度はきわめて小さく、人間が乗るだけで割れてしまう。焼成温度がかなり低いと思われる。窯はホイアン近郊で焼かれているとのことであった。野地瓦の表被に使われている葺き土はセメント、消石灰混じりの粘土のように思われるが非常にもちろい。成分は確認されていない。



橋家軒先断面

## 2) 橋家

桁行3間、梁間1間、2階建て、入母屋造り、陰陽瓦葺、2階東面にバルコニー付き。

[構造] 柱は全て角材、桁行方向が長い偏平柱。前家と同じだが桁行方向が直行するので長手方向も変わる。通し柱は西側2本と東側2本。2階バルコニーを支える持ち出し梁はこの偏平通し柱に差し梁にしてその先端をねね出す形でつくられている。

小屋組みは登り梁を柱に輪薙ぎ込み、棟は登り梁同士を輪薙ぎ込み、込み栓打ちとし下の差し梁から束を立てて受ける。差し梁は前家と異なって梁間両端の通し柱に差し込んでいる。柱頭及び登り梁の上に丸太の母屋を置き板垂木を打ち、垂木間に平瓦を並べ野地を作る。

母屋は全て丸太材を使っている。前屋が柱上の母屋を角材としているのとは異なる。

## 3) 後家

桁行3間、梁間1間、2階建て、切妻造り、陰陽瓦葺き、2階正面にバルコニー付き。

[構造] 柱は1階最奥西側と2階最奥東の2本のみ丸太材、他は全て角材。角材は桁行方向が長い偏平柱。通し柱は東手前1本と、西側より東へ2本目の手前と奥行の2本。2階バルコニーの持ち出し梁は橋家に同じ。

小屋組は登り梁を柱に輪薙ぎ込み、棟は登り梁同士を輪薙ぎ込み込み栓打ちとし下の差し梁から束を立てて受ける。差し梁は梁間両端の柱に差し込む。

母屋は全て角材を使っている。柱上ののみ水平に、他は全て登り梁の勾配なりにすえている。母屋の継ぎ手は登り梁の上で蟻継ぎ、転び止め付きとなっている。柱上の軒桁にあたる材は水平にすえて仕口を前家と同じように、輪薙ぎの両立上りに母屋をびんた蟻落し(図-1)として継いでいる。図-2の様なその類型とみられる仕口も見受けられた。

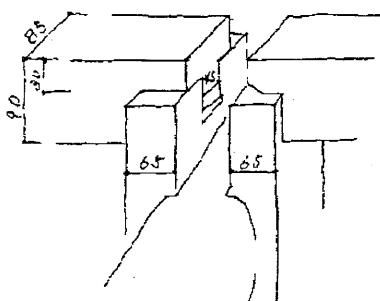


図-1 後家、母屋びんた蟻落し

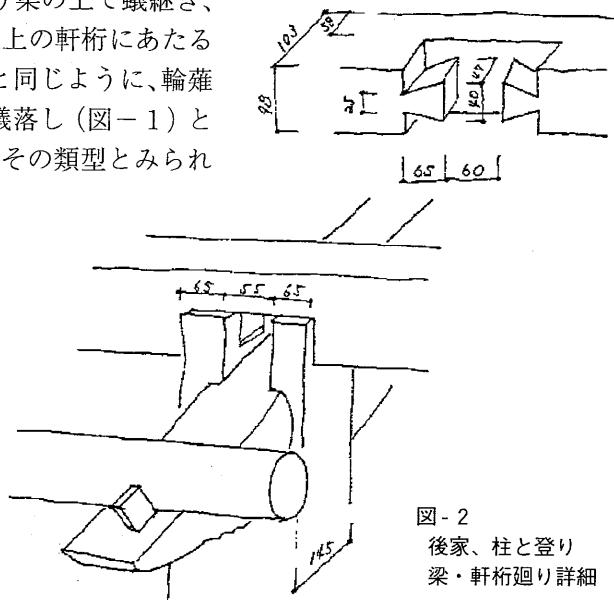
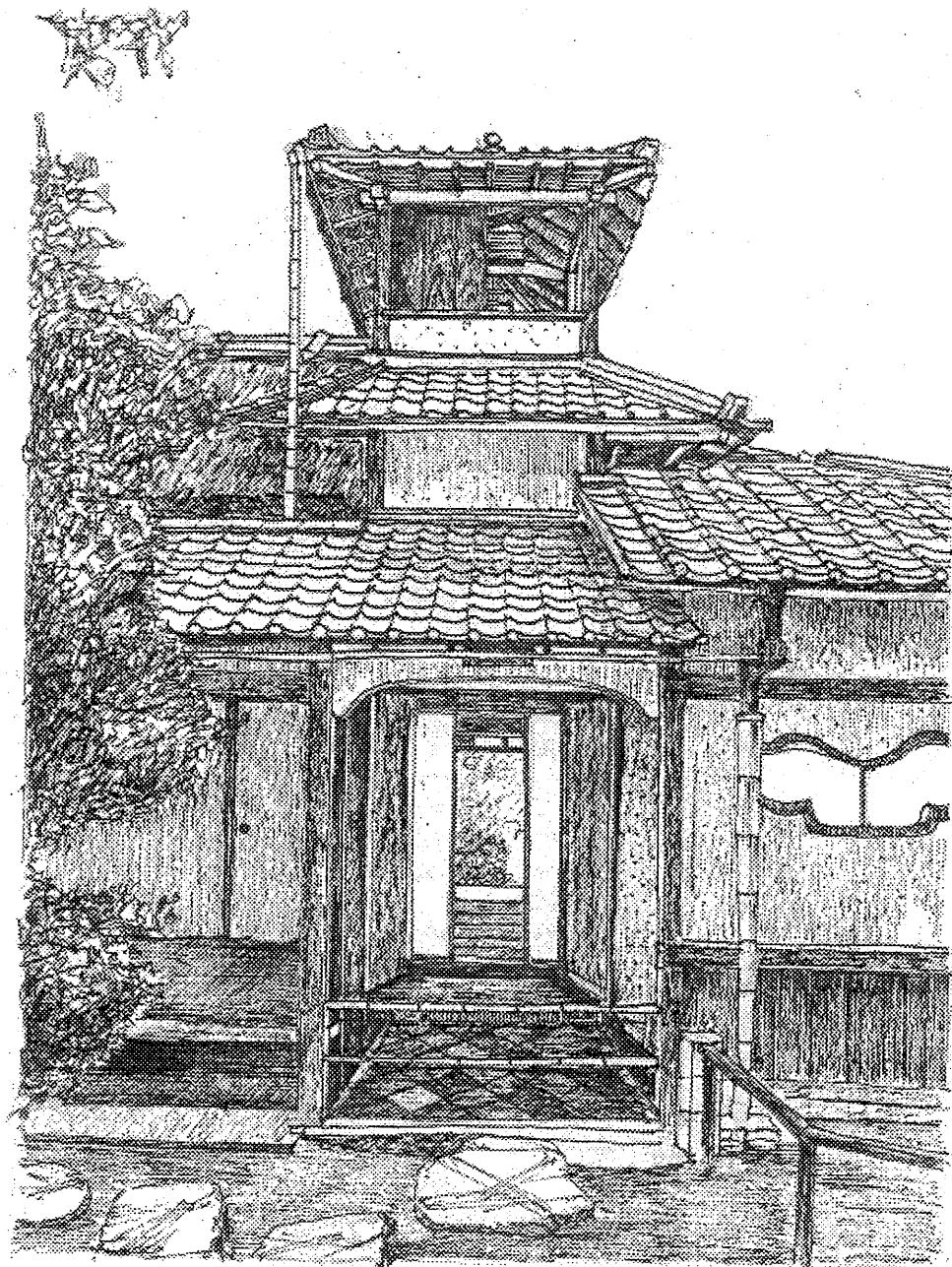


図-2  
後家、柱と登り  
梁・軒桁廻り詳細



Kawase Hasui  
詩仙堂

詩仙堂／老梅閣より玄関・嘯月樓を観る

## 落葉松

からまつと読む。

春に新芽を出し、秋には黄金色に輝き、落葉する、松である。

古くから八ヶ岳、乗鞍岳、御岳山などの山麓には、天然のカラ松が生えていた。地元の人は、親しみを込めて「天カラ」と呼ぶ。この木は嚴寒の地でもよく育つので、信州地方では明治時代から植林が始まり、それから盛んになされてきたという。現在、長野県内の人工林では半分以上の面積を占め、「郷土の木」という意識もあるようだ。

材は強度、耐久性、耐水性に優れているので、杭木や電信柱として利用されてきたが、建築材としては、狂いや、ヤニ、加工性などの問題から、あまり評判が良くない。

それでも先人がこれだけ努力して植え、育て、やつと使い頃になつた豊富にある木を、なんとかうまく生かしたいという願いや、安くなつた外材におされてしまった日本林業と山そのものの将来への危惧から、県の林業試験所では、研究員の方々や県内の製材屋さんがカラ松を生かして使っていくための努力を重ねている。

\*

昨年から、私は長野県南佐久郡川上村で木造建築の設計に携わっている。川上村の歴史と森林との関わりを理解するための場として数年前から村内で検討されてきたものである。川上村はカラ松の苗を日本中に出荷していた歴史をもつ村であり、村域の森林の六十パーセントはカラ松林となつていて、この建築に対する思いも深く、二百年を超える天カラ数本もこの建築のために用意されていた。ほかにもできるだけカラ松を使って欲しい、という希望もあり、この夏、私は塩尻にある林業試験所を訪ね、カラ松の材としての性質についてのお話を伺つ機会をもつた。

「この丸太の断面に斜めに入っている「割れ目」、旋回木理(せんかじゅうり)といふやうな。なにやら勇ましい名前だなあと思ひながら、話に聞き入る。

カラ松はねじれながら、成長していく。木は山に立つているところには、多くの水分を自分の中に蓄えている。ただし、木材として使うときには、乾燥させなければならぬ。この乾燥の途中でそのねじれが解けていくそうだ。研究員の方が言つた。

「だから、私達がね、乾燥すると 落葉松がねじれる、といふけれど、そうじゃないんです。落葉松にしてみれば、真っ直ぐに戻つてゐるだけなんです、といつたりともありますね。」

「このねじれることを あはれる といふのだ。

知り合いの材木屋さんに「今度カラ松を使ってつくらんですよ。」と語ると「ああ、あはれん坊のカラ松ね。」と言われたことを思い出す。

カラ松の乾燥は、まずカラ松の丸太を予定の寸法よりも周囲十五ミリくらい太めに製材して、脱脂乾燥機に入れる。脱脂とは、乾燥の前にヤニを抜くため、ます、サウナのような状態にして蒸気にならすことをいふ。サウナの温度は百二十度。八八まで高い温度でできる大型の脱脂乾燥機はまだ少ないが、通常の百度以下の乾燥機では、あはれない木をつくるのは難しい。

昔「流通」という言葉もなかつた頃は、自分の家の裏山で木を切り倒し、そのまま長くおいておいて、内部の水分を葉から出してしまひ、さて、といつ頃になつて木を山から下ろしてきていたと聞く。

乾燥機になんて入れないで、天日に干して気持ちよく、戻つていくものはゆっくり戻してやつて、真っ直ぐに戻つたら使えはいい、と思うが、自然に乾燥するよりむづつむづつと一旦は水分をとつてやらないと、建てた後、やつぱりあはれてしまつそうだ。

また、この脱脂をしないと、仕上がりで人が触れたときに、ヤニがついてなかなか落ちない。

「出でながらさばアルコールで拭く。そつするといつて一回出でてくるからもう一回拭く。これ  
でもう出でませんよ。」

試してみたいと思う。

今回の川上村の建築では六寸角六・五メートルの柱材四十九本を、村の方々から提供してもらおうと考えている。自ら育て、近くに生えているカラ松が、建築材として立派に使われているところを見せねばいい計画である。

「落葉松も産地によつて、ずいぶん違つんですね。」

「色の具合といい、ツヤといい、年輪のつまり力といい、私は塙山の落葉松は一番いいと思ひましたね。」

「私も佐久の落葉松は知つてますが、川上の落葉松は初めてなんですよ。」

「川上村は峠を挟んで塙山の向かい側、同じ山だから、きっといい木がとれますよ。」

「それは逢つのが楽しみだな」

この人達は、木に「逢つ」と言う。

林業試験所からの帰りは、製材屋さんに塙尻駅まで送つてもらつた。

「私達の青春時代は、旅行といろじやなかつたですね。戦後すぐですから。毎日毎日山に行つて植林でしたよ。でも四十年経つてやつと使えると思つたら、タダみたいな値段になつちやつて。」

日本の山は、険しい。けれど山の中の旅してみると、こんな感じかわづと思つはじ奥深くまで植林されている。

この人達が、植えたのだ。

私の生まれるずっと前のその風景を頭に描き、ずんと書いた。

\*

「落葉松」という詩を、一つ知っていた。

落葉松の 林を廻きて  
落葉松を しみじみと見き  
落葉松は 寂しかりけり  
去りゆくは 道は荒けり

(北原 白秋)

落葉松の夜の雨に 私の目が濡れる  
落葉松の夜の雨に 私の心が濡れる  
落葉松の陽のある雨に 私の思い出が濡れる  
落葉松の小鳥の雨に 私の乾いた目が濡れる

(野上 彰)

ちょうど、霧雨の中、落葉松の林を走り抜けることがあつた。

確かに、林の中では落葉松も、静かに 静かに している。

一九九六年九月

赤 桐 雅 子

## テーマ・『山と人との関わりについて』

講師・飛 山 龍 一

記録・佐々木 貴彬

\*\*\*\*\*

私は林野庁に入りまして、鹿児島、佐賀、岐阜、長野とあちこち各所に山関係の仕事をさせてもらいました。そして、いろいろと現場の人のお話を聞いたり、あるいは自分でも実際に山に入りまして、いろいろな事を勉強させて頂きました。

林野庁というのは国有林と、それから私有林というか民有林もやっていまして、民有林というのは普通の農家が持っているような林ですね。また、そういった方が植林をしたり、道をつけたりというところへの補助金行政とか、それから森林計画制度、そういうものをやるのが民有林部門で、国有林と民有林を合わせてひとまとめにして、林野庁と呼び方をします。

まず、「人と森林との関わり」というところから話したいと思います。

人の生き方というか生き様というか、そこに住んでる人の生活と山の景観というのは切っても切れない関係にありまして、むしろ人の営みが山の景観に投影してるというような事が非常に強いと思います。ですからここでは「人との関わりを通じて山を見る」という事で構成しようと思います。

まず、昔ですが、昔といつても今でも多少そういうとこがあると思うんですが、昔は山の扱いというのが生活の一部だったわけです。いってみれば、中心に集落があって、いわゆる雑木林の里山があって、それから茅場といいまして、屋根の茅をとる場所があって、その奥にいわゆる天然林みたいなものがあったと思うんです。もちろん江戸時代、藩有林をはじめ一部には人工林はあったわけなんですが、大部分はそういうなかたちだったと思います。

雑木林というのが哀愁を込められてよく言葉として使われるんですが、今の雑木林というのは全然人の手が入ってなくて、放置されているような状態なんですね。蔓があったり、灌木が生い茂り、うっそうとしてなかなか入りにくいような所が多くあります。今、雑木林に入るような人は大抵ゴミの不法投棄をするような人とか、死体を埋めにいくとかですね（笑い）、そんなヘンな人が多いと思います。

昔の里山林というのは生活と非常に密接につながったわけで、冬場の燃料である薪、芝、落葉、落葉は田んぼの堆肥になりますし、それから栗とか栎の木とかは昔から残しているんですね。栎の実なんかでも、山に行けば何時でも落ちているんではなくて、落ちる時期が決まってまして、落ちたらすぐに拾いに行かなければならない。というのはネズミが栎の実を大好物にしてまして、早く採りに行かないと全部ネズミに持って行かれちゃう。

という風に生活のリズムと山の関わりが密接に関係していたんだと思います。

昔の里山というのは、木が空いていて明るい状態で、落葉もけっこう取られていたんではないかと思うんですが、そういう山というのはキノコが生えやすいんです。私もキノコを探りに行くのが大好きなんですが、大体クヌギとか松が混生しているような所に松茸とか他のキノコが沢山生えるんですが、今の時代よりももっと沢山採れたのではないかと思います。

それは、「人と山との関わりが生活を媒体としてつながっていた時代」だと思います。地域によってかなり前から産業化が始まった所と最近までそうではなかった所とありますので、何時から何時までというのは中々言い切れないのですが、ごく最近までそういう所もあったという事です。

次に「産業化の時代」という事ですが、それに伴う生活の変化を五つにわけて説明します。まず、①肥料の改良（堆肥から化学肥料へ）②燃料革命（薪や炭からガスや石油へ）・堆肥を取る為に人が山に入っていたのですが、肥料ができれば何も山に落葉を取りに行く必要がないわけで、それからガスや石油が自由に手に入れれば薪や炭を取りに行く必要もありません。次に③労働環境の変化（農業からサラリーマンへ）・農業の方がサラリーマンになってしまえば中々山に入りませんね。④産業構造の変化（パルプ材、建築用材の需要の急増およびその後の減少）・パルプ材とか特に戦後の復興期には非常に建築用材の需要が急増しましたので、産業構造の変化になります。

⑤社会構造の変化（復員者による人口増加、その後の急激な過疎化）・戦争が終わって、ドッと復員者が農村に入って炭を焼いたりした人がかなりいたのですが、その後急速に過疎化が進んでいます。

産業化の時代といいましたが、一言でいえば非常にお金になったんですね。

昭和30年代から40年代というのは、ものすごい勢いで材木の値段が上がりました。で、上がったんですが、当時新聞社なんかでも国有林は伐り惜しみをしているのではないかと、外国のもっと安い木を入れたらいいのではないかという風潮があったのですが、当時としてはやっぱり戦後、家を建てる事で非常に木材が必要になった。でもそうはいってもその当時は円が非常に安かったですから、外国の木を買おうと思っても買えないという風に、

外貨準備高もないですからよその国の中を買おうにも買えなかった。そういう事で非常に国内の木材価格が高騰しました。

私の親戚にも山元がいるのですが、昭和40年代の初め頃には一雨降ると木が太って100万円になると言っていました。やっぱり当時の人の木材に対する考え方というか目の色が変わっていたというふうに思います。また、国の方もどんどん補助金を出して奨励しますし、昭和35年前後の10年間、毎年40万ヘクタールずつのいわゆる立木を伐った跡に人工林を植えるというような事が行なわれていました。40万ヘクタールというとどの位の面積かというと、東京都の面積の倍です。これを一本一本、人が全部植えていったわけなんです。これは物凄い事でして、現在で約一千万ヘクタールの人工林があります。これは山全体から見れば約4割なんですが、道路から見えるような所は生態学的にあまり多様ではない人工林になっています。それが産業化の時代です。

次に「断絶の時代」ですが、まず産業化の時代に人工林を植えたのがよかつたのか悪かつたのか議論があると思うんですが、なぜこうゆう風に全国に一斉に人工林が進んだかというと、人の生活が山との関係が切れてきたというか薄く、細くなってきたんですね。だから簡単に里山が人工林に変わるというような事が起ったんではないかと、この細くなつた糸がさらに切れかかった状態というのが今の時代だと思います。

今のゴルフ場なんかでも、森林の開発がしばしばテレビでも放映されるんですが、ただよく見て頂きたいのはゴルフ場の周辺の山はどういう山かというと、やっぱり人工林なんですね。天然林というのは大体奥地にあって、天然林を開発してのゴルフ場というのは中々ないんですね。ゴルフ場というのがよく象徴的に出るんですが、じゃあ森林の面積はどうかっていうと、バブルの時代までは少しずつ増えている。ずっとコンスタントに増えている。で、バブルの時代から少し減るんですが、ただ減り方も大した減り方ではない。どうしてかといいますと、たしかに開発もあるんですが奥地の農家の人が離農する時に田んぼや畑をどんどん植林していくんですね、ま、その人達が植林する場合もありますけど、森林組合あたりの人に「うちの畑をほおっておくのはもったいないので植えといで」という感じで離農していくんですね。

特に離農者が多いような山村は、猪や猿などの農作物の被害が非常にありまして、近年物凄い勢いで増えてます。猿なんて頭がよくて人間を見て判断するようなところがあつて非常に利口なんですが、そういう被害があるとテレビの取材が来て、マスコミの人がなにかにつけてすぐ森林開発が原因だと報道してしまうんですが、話せばあとで解るんですが、最近の被害は山林開発とはむしろ関係ない。昔から農作物の被害というのはしし威しとか鳴子とか色々と言葉にあるんですが、むしろ今の農作物の被害というのは農山村に人が

いなくなったというのが大きいんです。また昔は猟銃など鉄砲を持っていた人がいっぱいいたわけですが、最近は猟銃の殺人事件とかがたくさんあるものですから最近は猟銃の免許が厳しくなって、免許を持っている人が少なくて、なおかつ使う人が減っていますのでどんどん野性生物が増えている。とくに猿などは人家の台所にはいってしまい、食物を盗んでいってしまうという頭のよさをもっていまして、人にたいして危険を全然感じなくなってしまったんですね。それで農作物の被害が出ている。また、農家の人がだんだんサラリーマン化しますので、山に入らなくなっている。だから農山村の人と山の関係が自然に薄れて、その糸がどんどん消えようとしているんです。

野性生物による被害についてを資料の中に書いたのですが、鹿とか猪とか猿の被害というのは毎年どんどん増えている。一方天然林はどうかというとそんなに減ってはいません。どっちかというと増えている。戦後急速に天然林が伐採され、

人工林に変えられた時には野性生物にとっては受難の時期であったと思いますが、最近目立つ野性生物による被害はむしろ、たとえば鹿でいえば温暖化がかなり影響しているといわれている。東京にいると1度2度の温度変化というのは大して感じないのですが、山奥にいくと雪の量が1メートル積もったのと2メートル積もったのとでは生態系は全然変わります。1メートルでは食物がない所が30センチではある。という場面性があるというような状況になってくる。今まで木が生えなかった所までが木が生えるというような限界地帯では非常に影響が大きいです。ですから冬場のエサがとれる為に、稚い鹿の死亡率が低下してどんどん増えて逆に食物がなくなって農作物の被害が出る。猪でいえば、最近では米余りで仕方ないから減反させる。猪というのは体のダニ等でかゆい為、沼地みたいな所で遊ぶのが好きなんですが、そういうかたちで猪にとって、いごこちがいい場所がどんどん増えている。猿についても、自分達に危害を加えない事は解っていますから平気で里に下りてくることになります。

そうやって人と山との関わりがどんどん薄くなるにしたがって、山のほうからそういう被害が出てくるのです。

次に「新たな人と森林の関係」という事なんですが、ともすれば地球レベルでの温暖化防止、生物の多様性の保全、水資源の涵養、国土の保全などと抽象的に論じられる事が多いんですが、それはそれで新たな山との関係づくりとしてはいいとは思うんですが、実際に人が山に入る事、そこで仕事をする事、生活する事になりますと、昔でいえば生活を媒体としていたんですが、現在では産業を媒体にしている。それに対して最近変わった傾向としては、給料が安くてもかまわないといって、東京でプログラマー等の仕事をして大変高給だった人が山の仕事につく、というようなケースがあります。

だから、従来の物差しでは山と人との関係というのが説明できなくなって、新しい方向

が芽生えているのではという気がしています。

山に対する価値観というものが変わってきたのかなと思います。

これが人と山との関係です。

次に「森林の保護と造成」ですが、これは人と山との関係というよりも、行政と山との関係というように置き換えてもいいと思いますが、そもそも植林というのはどういう動機で行なわれたかという事なんですが、やっぱり一番大きな動機としては建築材としての、いわゆる構造材をいかにいいものに作り上げるかという事がひとつと、もうひとつは防災です。この二つが大きな動機になっています。まずは防災の関係ですけれど、これは古くは弥生時代からもう山間部の開発というのは行なわれてきました、当然山を開発すれば洪水などの被害が出ます。特に6世紀の時代に奈良盆地周辺に多くの寺院が建設されますけど、やっぱり造りすぎもあったんでしょうね、当時としてはこの辺にもスゴイ天然の檜なんかも沢山あったんですけど、大量に伐採してしまっていわゆる伐採による被害がみられます。日本というのはだいたい耕地が少ないので、その中でどんどん人口が増える。生活水準が上がると山との接点に当然せめぎあいが出てきますので、それで禿げ山には木を植える、また自然に崩壊した所でもとにかく木を植えて、それ以上傷口が広がらないようにする。というような観点から植林が行なわれてきました。

最近よく山が荒れる荒れると言われますが、本当の防災だけの観点からいえば、戦後間もない頃は、たとえば集中豪雨とかで数千人単位の人が毎年亡くなっていたんですが、最近でいえばいわゆる人命にかかる災害というのは、戦後間もない頃に比べれば格段に少なくなっている。山も当時に比べればかなり落ちついていると私は思っています。

最近の傾向としては、防災という観点からより環境重視というかたちで、森林保護とか植林が行なわれています。また、建築材を確保する為の森林の保護というのもあります。

おそらく昔では百濟あたりから渡来してきた技術者が日本の檜を見て嬉々としたんではないかと思います。日本の天然檜というのは世界でも建築材としては最高の木ですので、これを見てやっぱり嬉々として腕をふるったんではないかと思います。しかし、いかんせん造りすぎました。急速に資源がなくなっていました、もう中世の頃になると近畿地方にはなくなっています。遠くから持ってくる事が起こります。

また、遠くから持ってくるだけではなくて、近場の山に植林をして建築材としての造成が各地で行なされました。江戸時代では、完全に構造材としての杉や檜が不足してしまって、また、加工技術も上がって、いわゆる堅木である櫻なども加工出来るようになりますと、まとまった天然の杉林とか櫻林とか檜林とかそういうものについては、幕府がココは幕府の直轄地であるから農家の人にたいして、ココは切ってはいけませんと直接管

理するようになります。

私は木曽にもいたんですが、木曽檜というのは御岳山の南東部に広がる天然の檜材でして、これは日本では吉野とならんで非常に立派な檜なんですが、吉野はもうあまり資源的には少なくなっていて、木曽は以前から伊勢神宮には使っていましたし、それから秀吉の時代になりますと完全に幕府直轄地になって、大阪城などの建築材に使われたという記録が残っています。それから尾張藩になんでも引き継がれて、様々なかたちで開発されています。17世紀にはおそらく、すでに木曽の山というのはほとんど禿げ山になっていたという文献もあります。

当時かなり災害もあったみたいで、18世紀からは建築材の保護とそれから防災という観点から「木一本、首一つ」という、木を一本伐ったら首を切るぞという圧政があったんですが、逆にいうとこうゆう御布令が出るというのは、けっこう盗んで木を伐っていたという事なんですね(笑い)。大体逆を読めば当時の様子が解ると思うんですが、最初は檜だけだったんですが、やっぱり山の人達も考えていて、「ヒバだと思って間違えて伐っちゃいました」なんて言うもんだから幕府はだんだんと伐ってはいけない木を増やしていくんです。それで最後は木曽の五木は全て伐ってはならんという御布令になるんですけど。そういう事で非常に強力な保護政策になって、住んでいる人にとっては非常に災難だったと思うんですが、それが今の木曽の天然林になっています。だから本当の意味の天然林ではありません。

今話していたのは、立派な木のいわゆる社寺とかお城とかの為の建築用材の確保の事ですが、一般建築についてもかなり以前から植林というかたちで、山づくりが行なわれています。大体は江戸時代ですが、いわゆる篤農家という人達が植林を行なうようになりました。ただ量的には面ではなくて点で、全国的に広く植えられるのはやっぱり戦後の事です。戦争当時、戦後の復興期にも非常に山を丸裸にしてしまいましたので、その後に一般建築用材という事で杉、檜の人工植林が始まりました。もちろん行政も補助金を出したりと、どんどん後押ししまして、大規模に人工林が増えていきました。

それから、その他の用材としてパルプ用材や炭焼き用にも山を伐るわけですが、しかしこのような山は植林されない場合は放置される事がほとんどです。

次に、「植林から伐採までの山での作業」ですが、大体、山で仕事をしている人はどういう人かというと、民有林であれば、植林と保育管理を森林組合の作業班、木を伐る方では素材生産業者という人がいます。国有林であれば国有林野事業が直接雇用する作業員(国家公務員)、あるいはそれを請負う民間の業者に委託しています。

森林組合というのはどういう所かといいますと、農家の方なんかが組合に加盟しまして、

森林組合自体は2～5人の事務員と10人程度の作業員を抱えているんですが、作業員の人々が植林をしたり、下草を刈ったりします。事務の人は補助金の申請書を出したり、面積を計ったり、間伐する木の印を付けたりする仕事をしています。それから実際に木を伐る人ですが、素材生産業者といいまして、昔でいえばいわゆる「きこり」(樵)ですね。樵さん達の集団の会社です。

次に「人と木材との関わり」です。今まででは人と山との関わりを説明してきましたが、こんどは人と材木、建築材との関わりについて話したいと思います。

建築材との関わりとすれば、本格的には6世紀位からですね。やっぱり最初に寺院を建てた人達というのはどういうものかなと思うんですが、やっぱりどういう風にして仏様を崇めるかという事を考えていました。目の前の材料を使って、いかにいいものを造るかを考えていた。だからそれを造る職人さんというのは実際に山に入って一番いいものを集めてくる。それで木のクセを見ながらそれを活かして、本尊が、仏様が、あるいは舍利が、最もよく祀られるかたちにするにはどうしたらいいか一所懸命頭を使ったと思います。

最初の建築に対する意識というのは、そういうものだったと思いますが、これがどんどん貨幣経済がすすむと、木が物としてではなく商品として扱われるようになります。またどんどん流通するようになるとそれが規格化されるようになり、最初は「あるものを使う」といった事が、「欲しいものは遠くの何処からでも集める」ようになる。それで最近では「価格に合わせて材料を揃える」といった意識に変化していきました。

現実問題として、今の木材の流通は非常に複雑になっています。現実を知って頂くという事はとても大切だと思いますので、説明致します。

「わが国の木材生産・流通・加工体制の概要」という事ですが、まず最初に民有林と国有林がありまして、次に素材生産業者、いわゆる樵さん達が木を伐りまして、それを原木市場に持っていきます。次に製材工場に持って行き製材します。

それを流通業者や小売業者が買っていき、大工さんや工務店に売ります。

なぜ、こういう複雑な人たちで木々が流通しているかというと、昔であれば自分の山や、あるいは近所の人に譲り受けて、近くの製材工場の方に持つていってもらって加工して自分の家に使ったというのが普通だったんですが、分業化が進んでくると専門に木を伐る人達が出てきます。こういう人達にとっては、常に木を伐っていないと商売にならないわけです。

自分の家を建てるのに自分の山を伐る人達というのは、農家の人はあれば冬の農閑期に伐って建てるわけです。木にとっても冬場に伐採するのがベストなんです。春から夏

の木というのは水・養分を吸い上げますので、重いしカビが生えやすいという事で非常によくないんです。生業として素材生産業を考えますと、冬場だけ木を伐っていたんでは商売にならないわけで、一年中材木を伐っているという事になってきます。

まとまって伐ったものは、専門の運材業者に運んでもらいます。それを全部、製材工場が引き取ってもいいのですが、細いのもあれば太いものもあるのでそれをイチイチ製材段階で選り分けて、どんな商品を作ろうかなんてやっていたんではとても製材工場は困ってしまう。そういうことで伐った木を広いグラウンドのような所で一ヶ所に集めて、太い木・細い木・良材・粗材と分けるようになります。

それが原木市場といいます。原木市場で、土台用や柱用などに分けてもらうと、製材工場の方もまた業者によってはそれぞれ得意分野がありますので、柱だけを製材したり、長押を製材したりと、製材工場自体もいろいろと別れてきます

そして製材工場も分業化すれば、原木市場も相互に影響しあって柱の分業化をさらに進めます。木は丸い物ですので、丸い木を製材すれば端の方の部分にまた別の商品ができます。そういう多品目のものを販売するにはある程度まとめて販売するほうが効率的といいわけです。特に都市部では高額を出してもいいものが欲しいというお客様もいますので、専門の製品市場というのが出てきます。

製品市場は、まとめたロットで販売しますが、大工さんや工務店が必要なのは小口で多品目です。そこで製品市場と大工・工務店を仲介するのが小売業です。では、各流通業者が今、どういう現状なのかという事なんですが、まず「森林所有者」から説明しますと、今、日本の森林は7割が民有林で、3割が国有林です。民有林の森林所有者は大半が農家ですが、自分では伐採する事はなく、地縁・血縁のある素材生産業者、あるいは森林組合に委託生産・販売します。

国有林は、立木のまま販売するか、丸太にして販売しますが、いずれの場合も、入札による販売です。

次に「素材生産業者」ですが、大きく分けると、森林組合とそうではないものに分けられます。

森林組合は、間伐木の伐採や植林・保育を中心に行なっています。間伐木より大きな木の伐採（主伐）の担い手は、専門の素材生産業者と呼ばれる人達です。

素材生産業者でも、大きな機械でやっている所もあれば、チェーンソー一本で、一人親方でやっている所もあります。素材生産業者は直接山の木を買取る場合もあれば、製材工場が個人の山の木を買ってきて、丸太生産を素材生産業者に請負わす場合もあります。

山ですからいろんな木が生えていますので、当たり外れが大きい事と、買ってから伐り出すまで半年とかかかるので、非常に時間がかかる。それでその間に相場が上げ下げして、

大儲けしたり大損したりするから、いわゆる「山師」と呼ばれるわけで、「山師」の語源になっています。

また、非常にすぐれた技術を持っていますので、チームワークよく仕事をします。こういう人達の力で日本の林業は成り立っているんです。

「山を買うなら北向き斜面の山」と言われますが、確かに南向きのほうが光がたくさん当たるんですが、北向きの所というのは上からしか光が当たらないのです。木は光を求めてどんどん高くなっています。そして光があまり当たらないですから枝があまり張らないんです。枝が少ないという事は圧力が少ないので、アテ（成長段階で圧力がかかり堅くなっている部分で狂いやすい）が少ないんです。また、光が上からですので、芯が真ん中になって素直な木が出来る。だから北向きの山がよいのです。

木曽では、「御岳山を向いた木は素直で良い」という樵（きこり）の言葉があります。「御岳山を向いた」とは「北向き」とほぼ同じ意味なんです。

「原木市場」ですが、とにかく素材生産業者からいい木を集めて、今日はいい木があるからと片っ端から電話をかけてお客様を集めて販売する事が役目です。

次に「製材工場」です。製材工場はいかに安く仕入れ、いかに等級の高い木を製材するかが重要となります。日本の国産材製材業者は様々で、九州のように杉の管柱を一日五千本以上も製材する所もあれば、木曽檜や秋田杉を極端にいえば一日で5本位しか製材しない専門工場もあります。しかし、一般的な工場は、従業員が10人前後で、製材量が年間2千立法未満の工場が多いです。

製材工場も分業化というか得意分野に別れていますが、最近の傾向としては特に大手が木材の工業製品化という事で、プレカット対応の為に人工乾燥して、2度挽き（修正挽き）をして非常にムリのない材を出すという事に取り組んでいます。

（檜柱は人工乾燥が容易なのに対し、杉柱は人工乾燥が難しい）

これは非常にいい事なんですが、一方では構造用集材という新しい競争相手が出来ます。今まで無垢材で勝負していたものが、また、外材と国産材の競争だったものが、それ以外の競争相手が出来て、非常に苦戦している現状です。

「なぜ長い梁や太い柱が手に入らないか」という事ですが、山で実際に専属で伐っていますと「何立法出して幾ら」という契約になっていますから、あまり深く考えないで、とにかく早く伐って早く出したいんですね。それで一番高く売れそうな伐り方で伐るんです。だから3メートルや4メートルの定尺になってしまいます。昔は、信頼関係で繋がって

いて、こういうものが欲しいというような情報がストレートに伝わっていたのが、各流通段階でお金だけを介在した関係になっていまして、とにかく効率的に高く売れればいいという事になっていますので、欲しいと思っても中々山元まで声が届かないんです。

かりに長い木が出てきても、中途半端な長さのものは嫌われますので二束三文で叩かれてしまう。それで製品市場には定尺ものしか揃いません。また逆に定尺ものというのは、それだけのリスクと管理を伴いますので非常に価格の高いものになってしまいます。

しかし逆にいうと、今までの流通を使っていたんではそういうものは手に入らないものでも、それ以外の流通を使えば手に入るという事ですが…。

このように流通が人と人との繋がりから、お金の繋がりになってしまった中で、私がやってみたいと思うのは、産直住宅とか、それから各流通間が、お金だけではなくて、情報とか信頼関係とかで繋がった、血のかよった流通が出来ないかと思っています。

松本さんや赤桐さんが、山元の方まで食い込んでネットワークを作っている事を非常にうれしいなと思っているんです。



# 写真について

日影良孝

## アルバムという缶詰

十年ぐらい前に友達と青学の傍の店で飲んでいた。突然入り口付近が騒がしくなったと思ったらアラーキーという写真家が赤いジャケットを羽織り、女を十人ほど引き連れて入ってきた。席が離れていたので彼らが何を話していたのか僕に推測することはできなかつたが女性に囲まれてとても楽しそうに僕には見えた。アラーキーはシャッターを押すのが、まるで「癖」のごとくグラスと反対の手に小さいカメラを持ちバチバチと女性達を撮っていた。

そのカメラはコニカのビックミニ。一般人が持つようなコンパクトカメラだった。僕は少し嬉しかつた。アラーキーに親近感も覚えた。僕もアラーキーと同じビックミニをその時持つていたのである。

それから僕は常にそのビックミニを鞄に入れて持ち歩くようになった。それは女性を十人はべらせてバチバチと女性達を撮ろうと思ったわけではなく、アラーキーのように天才的な写真が撮れるだらうと思ったわけでもなかつた。ただ何となく持ち歩き、ただ何となく撮つていただけであった。ただ何となくでない時は単眼の一眼レフを持って外に出掛けた。建築を見学に行くとき、旅に出る時が僕にとって、ただ何となくでない時であった。

そうやって撮り続けた写真がいつの間にか本棚の主役になっていった。僕はマメに写真は整理するほうだが、今でもアルバムは元気に増殖している。

アルバムは言ってみれば「缶詰」である。缶詰に封印された写真を見ることは、よほどの非常時でない限り見ることはない。

僕は売れない缶詰を生産しているのだろうかと、アルバムの山を眺めて悲しくなる。ほんとに悲しくなるのだ。

写真よりも絵のほうが数倍も学べることを知つてゐるから、鞄に入つてゐるのが水彩の絵の具でないのを思うと、もっともっと悲しくなる。

「じゃーあなたは悲しい悲しいと思いながらシャッターを押しているの？」

「あなたを見ていると構図だけを気にして、シャッターを押す快感に酔いしれているようにも感じるわ」と友達は僕をののしる。

そして僕は負けじと友達に反論の言葉を用意するのだが、女性の威力に負けひ弱になつてゐる。

## 写真には時間の膜が張りつく

プリクラ的記念写真、工事記録、講演資料あるいは展覧会のための作品写真など撮る目的は様々であるが、必ずと言っていいほどその写真にベッタリと張りついているものがある。いい写真であればあるほどにベッタリと張りついている。

写真には時間軸を微分し薄くスライスした膜がベッタリと張り付いているのだ。そう写真には時間が存在する。

時間は常に動き、留まることはない。自然環境も、国家経済も、文明も、思想も、都市も町も、家も、家に用いられている素材も、生活も、愛さえも時間と共に常に変化し流れ続ける。それらの世界を瞬間的に凍らせる力が写真にはきっとあるのだろう。

例えば町の中に美しい民家が残っている。僕はその家の全景を美しく写真に納めようとする。でもその周辺にはお世辞にも美しいとは言えないビルが林立している。どうあがいても背景のビルをファインダーから消すことはできない。しょうがないから対象に近寄って美しい構図に家を取り切りシャッターを押す。僕はシャッター音に快感を感じ満足な気分に浸る。でも本当にこれでいいのだろうかという疑問がその後に沸いてくる。僕は写真に張り付く時間の膜を消し去り、実在の姿を隠蔽したのだ。

昔撮った写真で失敗だったと思っていたものが以外と生き生きとしていることに後で気がつくことがある。下手な素人写真にはベッタリと時間の膜が張り付きやすいのだろうか。「あなたの支離滅裂な反論はもういい。でもひとつだけわかったことがある。写真を撮る行為は実在を探求する作業だってことね。話は飛ぶけど、私は中央分離帯の縁石を突き破って成長している雑草を好き。縁石を設計した人間は、けして雑草を予定しているわけじゃないだろうけど、私はその雑草から実在のエネルギーを感じる。私はそんな雑草を撮りたい……」

## 生活文化同人・写真大会

誰もが下手なら下手なりに、自分が撮った写真を表現したいと思っているに違いない。もっと上手になりたいと思う気持ちを持っているのも僕だけではないだろう。何が上手なのか、その評価基準もわからないままに撮り続けることに不満を持っている人もいるかもしれない（評価？）。

そんな事を思っているときにちょうど生活文化同人のメンバー数十人で「川から東京を見る」という企画が実行された（4月26日）。神田川～日本橋川～隅田川というルートで漁

船から現在の東京を見上げた。カメラを持参している人達も多く、後日写真コンテストを開こうと、ほとんど酔っ払いの思い付きのままで選考会の日時まで決定された。審査員は吉田桂二先生と写真家の大橋富男先生、畠亮先生にお願いした。選考委員会は5月26日に行われ、想像を絶する盛り上がりを見せた（審査途中、緊張で顔を引きつらせ酒のつまみがのどを通らない人も数人いた）。

先生方の厳選な審査の結果、一位は岡部知子さん、二位は日影良孝、三位は鈴木久子さんと吉塚幸雄さんの連作が選ばれた。賞に選ばれた人も選ばれなかつた人もどれも個性的で上手な作品が多かった。今回は紙面の都合上、三者の作品しか掲載することができないが、定期的にこの写真コンテストを開けたらいいなあと思っている。写真を「アルバム」という缶詰」にしまって置かないで、どんどん表にだして欲しいと思う。（ひかけよしたか）

## 生活文化同人・第1会写真大会作品紹介

受賞者、入選者には大橋先生と畠先生の写真、吉田先生の絵が授けられた。



### 第一位「無視」 岡部 知子

青く塗られた橋の鉄骨。川べりの古びた木造家屋。その背景に歴史的景観を呈する聖橋。近代技術の粋を集めたセンチュリータワーやオフィスビルが混在して、神田川に蔽いかぶさっている。まさに時間が混在している。これが実在の芸術というものだ。（吉田先生談）

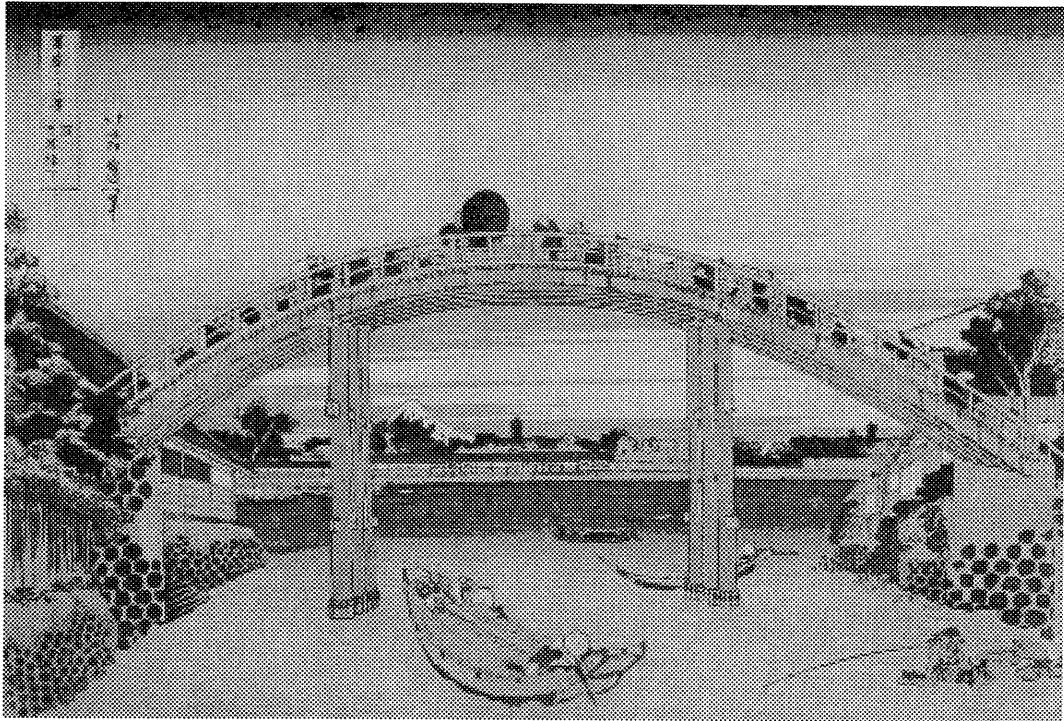


## 第二位「乱れる川」　日影 良孝

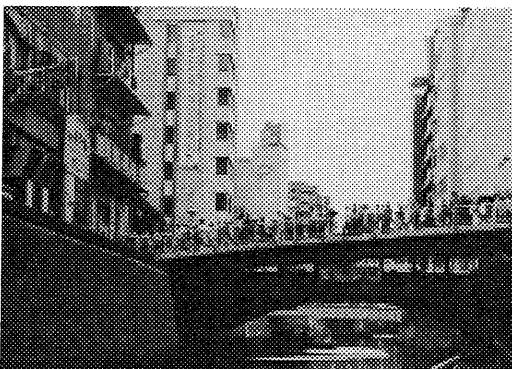
この作品を大きく紹介したのは、編集助手の特権を利用したからではありません。レイアウト上タテイチのほうがページを構成しやすかったからです。畠先生いわく、構図と光の具合が良く、手ぶれがない写真であるということです。ちなみにカメラはコンタックスです。（編）

### 第三位「江戸・東京今昔物語」 鈴木久子十吉塚幸雄

応募作品の中で唯一ストーリー性のあるものでした。過去と現在の流れが良く理解できます。昔のお茶の水の風景を見ると、私個人的には昔のほうが、空に広がりがあり、美しい風景だと思います。大橋先生は「私たちプロがこのような写真をみるとハッとする新しい発見がある」と話して下さいました。(編)



■ 水際の景観は経済・流通からリクリエーションにいたる都市活動の在り方をはかるバロメーターであった。



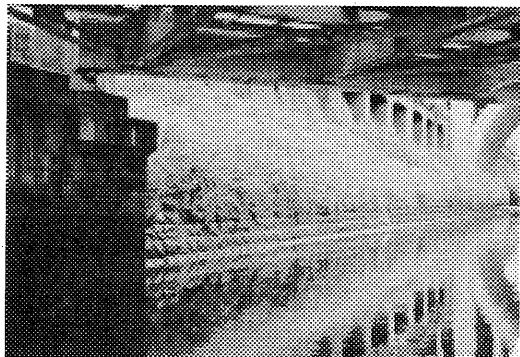
■ 橋はただ単に対岸同志を結ぶだけのものではなかった。  
交通上の結節点である橋のたもとに人が集まり、おのずと  
賑わいが生まれる必然性があった。

■ 東京には広場がない。しかし、橋のたもとは人と人との  
ふれあいの交差点がある。

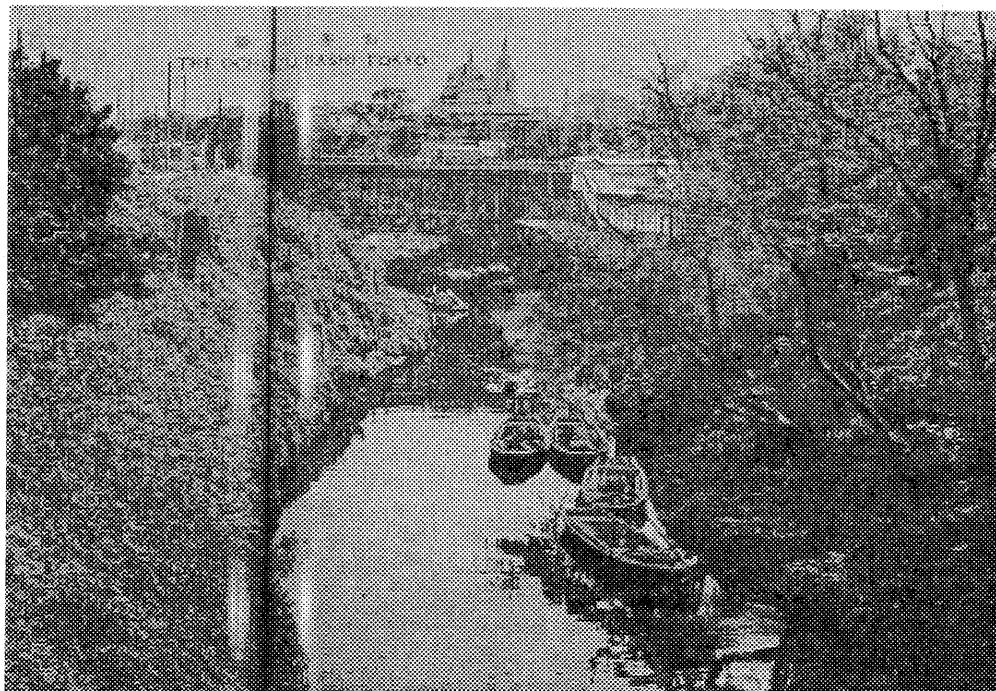
■ 橋の裏がこんなに有機的で美しい姿だったとは……

■ 本来橋は、それを渡る人よりも掘割りを行く船から見られ  
ることを意識して設計されている。

橋が高速道路の下の空間にとじこめられた現在、そのデザインの素晴しさに気付く人がめっきり少なくなってしまった。

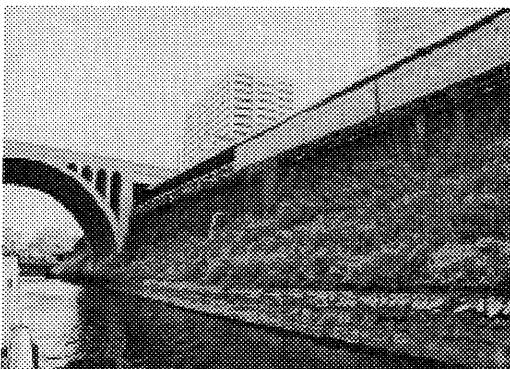


# 御茶ノ水

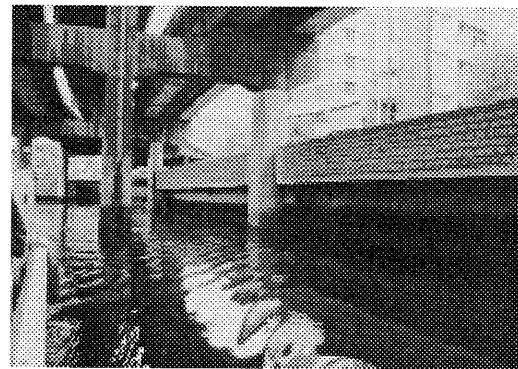


- 近代建築や橋梁が構成する水辺のすぐれた景観
- 自然と共存する土木技術によって作られた水辺の景観
- 秋のお茶の水、ニコライ堂を望む。
- 風光明媚といわれた面影をとどめている。

大正時代のお茶の水橋。



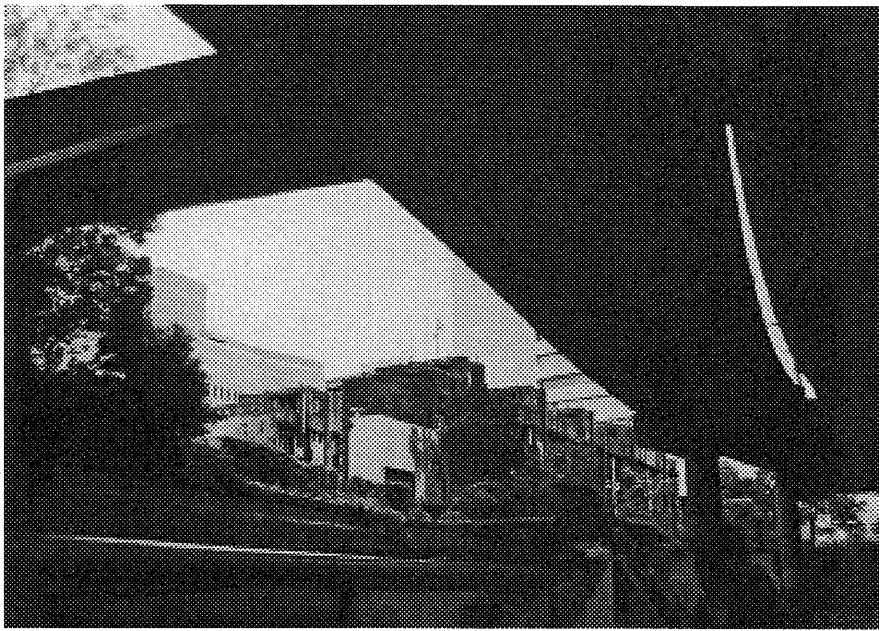
- お茶の水駅周辺は地上とのレベル差が大きい。  
この視点からお茶の水駅を眺めたことがありますか。
- 緑の深いお茶の水の渓谷には大きなアーチデヒトまたぎに架け渡された聖橋。その優美な姿は感動的。
- 南こうせつ歌舞伎の「神田川」では三置一間の恋人同志の下宿の窓から、神田川の流れが見えた。



- 都市はいつから川に背を向けて生きるようになったのか。
- 美しい水の都・東京をズタズタにしたのは、1964年 東京オリンピックではないだろうか？ ■ 高速道路が水の上を駆け抜ける現代の姿。
- 川と遊離した傲慢な現代の土木工事。
- 高速道路の下に封じこめて、日陰に追いやられたものが実に多い。
- 機能性と経済性を優先する都市の政策がこうした状況を生み出した。

記

憶



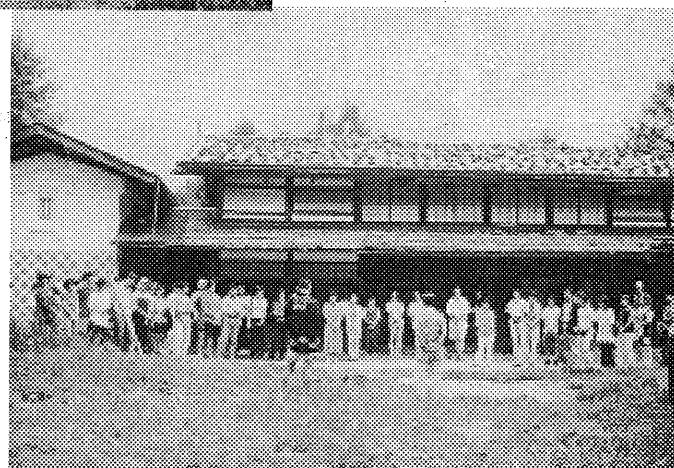
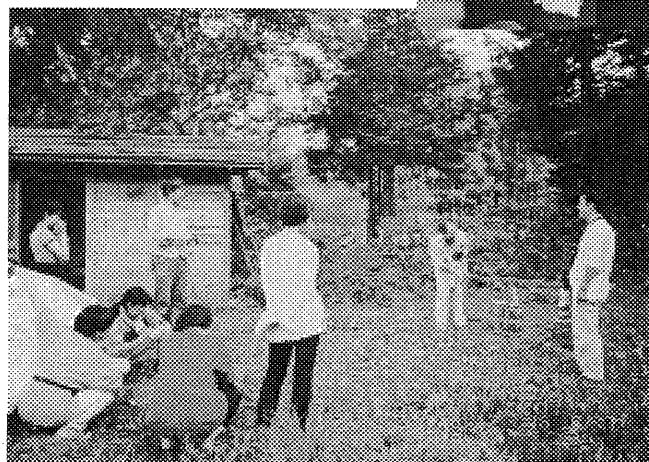
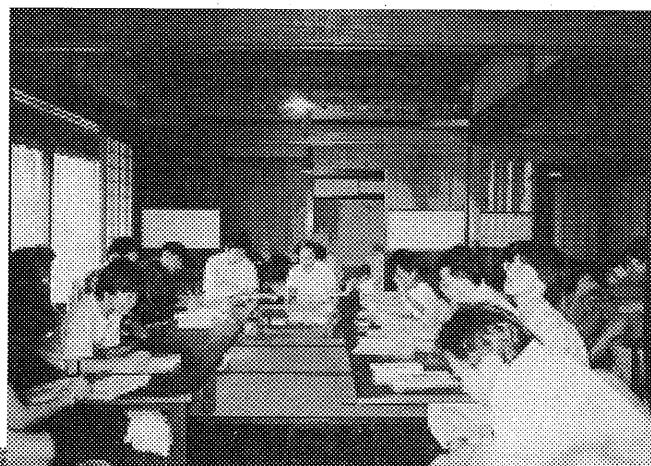
- 川の変貌を見守り続けた同潤会アパート
- 都心に残る無人の館。でも高速道路からみると屋上には洗濯物が風に揺れる。



- 鳥は遠い昔から水辺の住人。
- 擁壁の間知石も少しあは川を意識したデザイン

※ 以上 70 ページ～72 ページまで 鈴木久子+吉塚幸雄の作品

# 大平建築宿 1997 から



## 基調講演「古い町並み・これからの町並み」

講 師：西村幸夫 司会：藤原恵洋  
きき手：吉田桂二 記録：高村幸絵

### ◇問題提起：吉田

近代化とは大衆化である。大衆化とは、戦後の貧しさから脱却したい、みんなが豊かになろうというものであった。自給自足の小さい流通で成り立っていた生活から、大量供給のため、広域流通が発展した。食品などは、薬品を投入し、防腐処理が施され、長期保存のために様々に汚染されたが、そのおかげで、我々の生活が便利で豊かになったのも事実である。だが、そこで我々が失ったものは大変大きかったのである。

同様に住宅の場合もそうである。今ほど大量に家が作られている時代はなく、プラスチックなどの新建材の使用による環境汚染を引き起こしている。

一言で言うなら、近代化とは物の商品化、分業化である。それもまた、経済の発展には欠かせなかつた。さらに、人々の価値の遊離も指摘できる。それは大量供給によって、つくる人と消費する人の間で大きな隙ができてしまつたことも原因である。これらを含めて近代化の生み出した功罪だと考えられる。



### ◇日本の歴史的町並み保存の経過と展望：西村

1996年の古川に見られるように街を良くしていこうとする努力の一つとして景観条例というルールを制定することがある。日本の場合、条例制定の波は二つの大きな山が見られた。一つ目は1970年代前半であり、二つ目は1980年後半から90年頃で、現在までゆるや

かに続いている。

1970年前半は日本において歴史的町並みが初めて意識されるようになった。今まで個々の建物として保存されていたが、この頃から複数の建物や地区というように面として魅力的であるかどうかという視点で評価されるようになった。

それに先駆けて民家の見直しが起こる。戦前は国宝の民家は2棟だけであった。しかし、全都道府県の民家の調査を行うようになってからは重要文化財指定が急増した。民家の評価は地域の特徴を有するかに視点が置かれ、古くて小さいものが民家の原型をよく残している場合もある。

また、公害や環境への関心から「自然環境保全法」や「公害基本法」ができてきた時期でもあり、自然や歴史的町並みにも注目が高まっていた。地方の盛上りが国を動かし、1975年の「文化財保護法」の改正に繋がった。

最初の山が「歴史を守る」動きであるなら、次の山は「つくっていく」動き、つまり都市計画へと繋がるものである。

1996年現在、建築に関する条例は157（建設省建築審議会）あるといわれ、自然景観に関する条例を入れると倍になるだろうとも言われている。

次に、各地の動きを古いものから見ていきたい。

〈高山〉 高山は古い街を大正時代にできた街が取り囲んでできている街である。昭和40年前後から観光地化が進み、初期の昭和50年頃に面白い試みがなされた。建物を個別にも守るが、ゲートを中心に街を整備するという基本方針である。100ヶ所以上、20年以上続けられており、大変息の長い取り組みとなっている。

〈松本〉 松本は昭和40年代から現在までユニークな動きがある。松本城から見えるアルプスの山並みを大切にまちをつくっている。松本城の3つの地点から、仰角2度以下、3度以下、枠内は高さを15メートル以下に抑えるという規制を設けている。日本では数少ない取り組みである。

〈金沢〉 金沢では1968年に「伝統環境保存条例」が制定され、歴史的町並みの大切さが謳われた。金沢の地図上に歴史的町並みや山、川が色付けられ、中心部には規制のアミが掛けられ、全体的には2色で区別されている。一つは伝統環境の保存区域である。もう一つは89年の条例改正による、歴史的な街並みだけでなく、近代的なところも守っていこうとする近代的都市景観創出区域で、駅前や商業地区、再開発などを対象としている。この二つは全く相反する性質をもっているが、一緒に考えていることが金沢のまちづくりの特徴である。

〈盛岡〉 盛岡市では盛岡駅や岩手公園、川、農村部など、どこからでも岩手山が見えるように、高さ制限などのルールが決められている。岩手山をみんなが共通して守れる大事

なシンボルとして考えたからである。1971年の「自然環境保護条例」が、1976年に「自然及び歴史的環境保全条例」と名前を変えたことにも伺える。

〈京都〉 京都府では日本で初めての総合景観を考えたまちづくりを展開し、1971年に「市街地景観条例」が制定された。地区は以下の数種類に区別されている。

- ・祇園新橋、三年坂、上賀茂など伝建地区。
- ・周辺の縁を守っていく古都保存法地区。修学院、清水寺の裏側辺りでは東山などがよく見えよう規制されている。
- ・鴨川の東側の周辺は高さを20mに抑えた美観地区。
- ・巨大工作物の規制区域。1964年京都タワー建造の反省を生かして高さ規制が作られた。  
(ところが、京都駅のコンペでは、高さ規制を無視して行われた。)
- ・三条通りは近代的な建物が多く、それを生かした近代的界隈の地区。

〈神戸〉 神戸市は1978年に「都市景観条例」ができ、景観の見え方を地域のなかで組立て、都市構造を分類し、地区ごとにまちの活かし方をシステムチックに考えて取り組んでいる。巨大工作物の届け出制度や、神戸駅周辺、旧居留地、税関メインストリート、異人街などの重要地区を指定し、保全している。

伝建地区の内外でギャップが大きくならないように、伝建地区のもうひとつ外側もゆるやかな規制を設け、デザイン上配慮するようにしている。

〈小樽運河〉 壊されてゆくものを保護しようという動きがあり、小樽運河の取り組みにみられる。20年前に運河の埋立てが始まり、それに対して10万人の署名運動や市長のリコールなどの運河の保存運動がおきた。その結果、埋立てを半分でくい止め、遊歩道やガス灯が整備された。

このような動きは鹿児島県の石橋の保護や東京丸ビルの保存運動など、現在も行われている。

〈倉敷〉 戦前戦後に民芸運動が盛んになった倉敷市では、1991年に規制の範囲外の高層ビルやホテル計画に対し市民が立ち上がり、半年後に新たに条例をつくり、適用した。これは古い町並みを守るだけではなく、周辺の景色をも守るという日本で初めて制度化されたものである。

〈文京区〉 1992年に都市計画法が改正され、行政区画ごとのマスタープランが義務づけられた。文京区では地形の斜面をマスタープランに取り込み、自然地形や歴史的景観に配慮している。

〈蕨市錦町〉 蕨市錦町ではまちづくり物語パンフレットをつくり、街を歩くストーリーを大切に考えた。縦割り行政の中にはなかった生活者の視点からまちを考え、何が大事かを洗い出すことから始まっている。どんな街にし、どんなライフスタイルを営むかを基に、

それらをサポートできるまちづくりを目指している。このような生活者側からの考え方はまちづくりにさらに重要になってくるであろう。

#### ◇これからのかまちづくり：西村

これからのかまちづくりを考えるとき、昔を振り返るのはおかしいように思うかもしれないが、表裏一体を成しているのでヒントが隠れていると思われる。

##### ・明治始めの計画事例

〈宇都宮市〉かつての街道筋に二荒山神社に対置して城があり、明治にその街道を拡張し、商店街として今でも活かされている。昭和に入り、県庁と市役所が対面する様に配置された。昔の構想を継承し、ひとつの軸線をなしている城を公園として残し、現代の都市に融合している。

##### ・関東大震災後の計画事例

震災後の日本は、すばらしいまちづくりが行われていた。

〈昭和通り〉震災後、昭和通りは、一本西側の街道筋沿いに、街道を壊すことなくつくられた。建設当時、真中にグリーンベルトを設け、並木が4列に並ぶ大変立派なストリートであった。ところが高度成長期に入り、道路は人から車中心へと変わり、かつての遺産は食いつぶされ、現在は立体交差の道路となってしまった。

〈隅田公園〉日本で初めてのすばらしい公園であったが、今では水辺はなくなり、高速道路になってしまった。

〈明治神宮外苑の馬車コース〉明治神宮には、24mの馬車道、6.5mの植栽帯、12mの歩道、36mの車道、両方合わせて19.5mの歩道、計幅員120mの立派な道路が当時造られていた。しかし、現在は首都高がはしり、縁地帯は野球場やテニスコートへ姿を変え、かつての構想は姿を消した。

〈美観地区〉昭和8年、日本で初めての「美観地区」が皇居周辺につくられた。高さが規制され、道路の反対側のファサードはまち並みが意識され、現在も生きている。昭和15年の拡張計画では広範囲で美観地区を設ける計画があったが、内務省の許可が得られず、実行はされなかった。

##### ・海外の事例

〈ロンドン〉ロンドンでは1938年から高さ規制がつくられている。セントポール寺院が遠くからでも見通せるように複雑な規制を設けている。1/1250の図面に15m(50ft)角のグリッドを引き、高さが決められている。広角眺望協議区域や背景協議区域というように多面的検討を行っている。

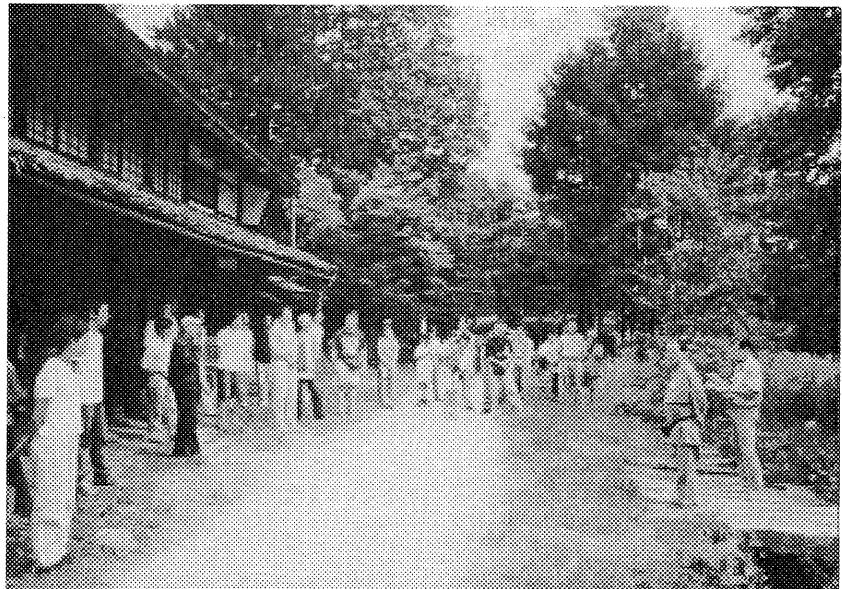
イギリスでは建築計画の公開の方法として1月分の計画を一般の人に郵送するなどの手

段をとっている。駐車場や猫小屋といったものまでも審査の対象となる。

〈パリ〉 パリでは3種類のファサード規制を設けている。フランス革命以前から道路幅員によるコーニスラインや斜線、最高高さ規制がある。年を経るに従い、棟高は高くなっているが、規制の考え方は変わっていない。景観の様態により、特定の場所から特定のモニュメントなどを透視図的に見る見通し景、高台から面的に地区を眺望する見おろし景、路上から両側に並ぶ町並みの向こうの特定のモニュメントなどをアイストップに持つ切り通し景などによって細かく規制している。前景だけでなく、背景も規制している。

〈アメリカ〉 アメリカでは他国に先立ち、1931年という早い時期から都市計画が始まった。ロッキー山脈や議事堂の景観を守ろうという動きであった。それらの高さ規制には標高や角度の計算式を用いてなされている。デザインの議論システムが確立されており、計画者は委員会に発案し、計画者自らプレゼンテーションを行い、協議される。議論は公開され、誰でも発言権を有する。決定はその会全体で行い、許可が下りなければ工事はできない。このような制度は計画の周知と住民の意識を変えることにもなり、人々が積極的に携わることができるというメリットがある。日本では、建てるまで計画すら知ることができないのが現状である。

※以上の内容は「環境保全と景観創造」(鹿島出版会)に詳しい。



#### ◇質疑応答 A：西村

Q：専門家、建築家は規制つくりにどのように関わっていけるのか。

A：日本では行政のなかの組織で決められる。しかし、欧米では建築家は行政の内外をわたり歩いてかかわる。スタッフの育て方や就職の仕方が日本と違う。将来的には日本も欧米のようになっていくのではないか。

Q：規制の妥当性を最終的にいったい誰が判断するのか。

A：妥当性は裁判で明らかになる。イギリスやアメリカでは司法が中立的に判断するが、フランスでは行政有利の判決がでることが多い。

Q：「色」の規制については

A：色は場所によって違うし、歴史やゾーニングの中身で異なっている。厳格な基準はなく、担当官の美意識にゆだねられている点が多い。

Q：用途については

A：アメリカでは規制が厳しく、それが議論の出発点となり、同時に協議によって用途変更可能である。イギリスはゆるいが、その分行政に裁量の余地がある。フランスは日本に近い。日本は行政システムが変わりつつあることから改善されていくだろう。

Q：市民の関わり方について日本と欧米の違いは

A：日本は、いい意味で人間への関心が高い。個人の業績が良い刺激になって、まちがよくなるという活動のあり方を目指したい。

◇むすび：吉田

まちづくりの評価の内容や数量化・数値化が問題ではないだろうか。冒頭の問題提起にかみあっていた。キーワードは「時間」だと思う。イタリアには「景観10年、風景100年、風土1000年」という言葉があり、地域と地域に住む人間の関係が言い表わされている。日本では、「景観3年、風景30年、風土300年」といった方がしっくりくるかもしれない。「時間」という問題を「時間と空間」というふうにとらえている。「時間と空間」というものが今ほど窮屈になってきたことはない。そしてそれが加速されてきているのである。すべての行為は金銭に換算され、時間も空間も短縮され、凝縮され、人間は手も足も出ないという生活になってきてしまっている。住宅を含めて、なにもかも使い捨てになってきている。こういう家をつくりたいという希望が無くなってきたいるというのが一番の問題である。人類が地球環境のなかで異常繁殖してしまって飽和状態になっている。もし、異常繁殖しなければ時間も空間ももっと隙間が出来たのではないか。そこを突き詰めると、生態系から外れた人類の数の問題になるが、かといって死ぬのかと言われても困る。自分たちの我欲のための異常繁殖によって地球環境にしづ寄せがきていることは認識すべきである。したがって、エコロジーということはそういう状況のなかで自分たちはどういう生きかたをしていったらいいのかを模索することであろう。21世紀のテーマは「環境」以外にはない。「保存と創造」をいつも考えているが、その相反する概念を繋ぐことと「保存と創造の矛盾的合一」もエコロジーの問題と関係している。そのこともひっくるめて「近代化の功罪」としたい。

## 第1分科会「まちづくりの様々な手法」

レポーター：八甫谷邦明 記録：佐々 伸子

サポーター：松井 郁夫

### ◇まちづくりを成功させるポイント：八甫谷

まちづくりにマニュアルはできあがっていないが、重要なポイントは挙げられる。

- ・まちづくりの主体はどこか。支持する組織は何なのか
- ・資金の問題 日本では民間のまちづくり運動を支える資金源が乏しい。
- ・市民の意識の高さ 行政に任せきりにせず、住民がまちづくりに積極的に関わる
- ・規範形成プロセス 皆の考えを共同の約束事（規範）としてまとめる

### 〈事例1〉小国町

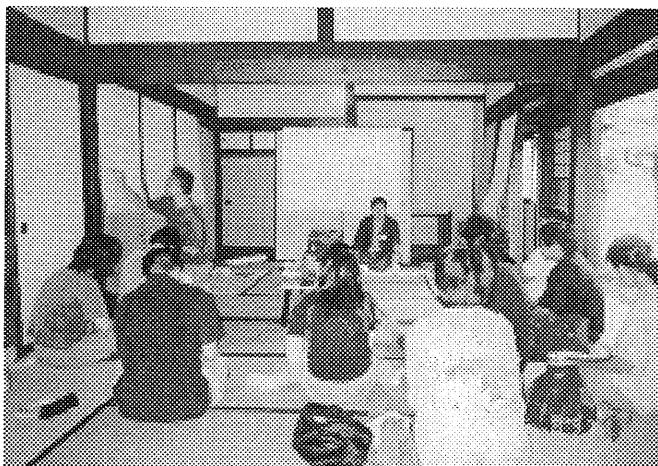
まちづくりのきっかけのひとつに「コミュニティの危機」が挙げられる。熊本県小国町は過疎化問題を抱えていた。町政の改革に取り組もうとした宮崎町長は、建築をカンフル剤にして行政組織の変革を行おうとした。

まず、町民と行政の垣根を取り払い、町民からのアイデアを募った。同時に、内部改革として、企画課を格下げし、企画班をつくり、町長直属の実行部隊として動きやすくした。企画班は民間の若手グループと共同歩調をとり、まちづくり運動を推進した。「木魂館」や「ゆうステーション」の重要ポストには民間人を起用した。さらに、町に訪れる人を通じて、外の世界とのネットワークづくりを始めた。全国的にまちづくり運動が起き始めた当初とは違い、現在は地域地域を結ぶネットワークが重要な意味をもつ。小国町の住民は他の町と連携することによって自分たちの運動を広げている。

### 〈事例2〉真鶴町

都市部における環境の危機ということに大変敏感な弁護士の五十嵐氏は、規範形成プロセスをはっきり自覚してまちづくりに取り入れようとしている。

実験的に、真鶴町では「美の基準」という共同規範を設け、まちづくりを行っている。建築や町並みのあり様を建築家に一任するのではなく、利用者や住民



の意志を共同規範として建築家に提示して、皆が納得するものを作りたいとしている。

#### 〈事例3〉近江八幡

高度経済成長期の70年代、近江八幡の象徴である「八幡堀」の埋め立て問題が持ち上がった。それに対して代々近江商人である川端氏は「何となくマズイ」という漠然とした不安感からその反対運動が始まったという。河川法改正以前の、災害回避が大命題の時代に反対運動を繰り広げるのは苦労が多かった。

そこで、行政内部に、どんな村八分にも耐え得る忍耐強い若手担当者を、運動の当初から自分たちの仲間に引き入れた。日常的な付き合いを通して自分たち思想を実現する、行政内部の出城をつくった。やがて、運動の展開とともに市民の共感を得て、その役人は市長に選ばれる。玉田市長がこうする政策は川端風のアイデアがたくさん盛り込まれている。市民のまちづくり活動に資金面でバックアップする「ハートランド基金」はその例である。

近江八幡の住民運動には古くからの惣村（中世の自治組織）が盛んだったという歴史的背景がある。

#### 〈事例4〉豊中市

大店法が施行される以前、大手企業の進出によって地元商店街の危機を懸念する各自治体では様々な規制を行った。そのなかでも先駆的な動きをしたのが豊中市である。担当者であった足田氏は、政治的な圧力もあり大変な苦労をして大手の進出を食い止めたが、その活動を住民は少しも理解してはいなかった。

その活動のなかで「住民がまちづくりの中心なのだ」という考えた足田氏は「まちづくり支援室」を創設し、住民集会などを支援している。

自治体組織そのものはまちづくりの母体にはなりえない。住民自らが住民組織をつくることが重要である。

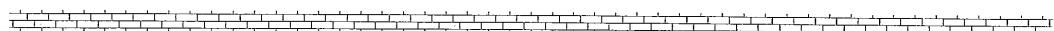
### ◇ワークショップとまちづくり：松井

建築士会などの団体が、まちづくりの規範形成プロセスの手法として「ワークショップ方式」に注目し始めている。ワークショップ方式という手法が4、5年前に米国から入ってきた時に、「これはスゴイ」と思い、のめり込もうと考えた。今では住宅の設計においてもこの方式を採用している。この方式はいいツールではあるが、万能ではない。（まちづくりにおいて）市民の意識が育っているところや、もともと同じ目標で集まっている人々のところでやらないとしっかりした意見は生まれない。

都市計画においてはまちづくりの主体を行政にあると勘違いして、行政区画に分けてものごとを進めたので、住民がついていかなかった。そこでは、住民の意見は邪魔物扱いにされてきた。生命がちゃんと生きていける環境やそこに住む人のアイデンティーになるう

る原風景を残すことが忘れられてきた。

市民の意識は向上し、市民運動が行政に影響を与えるようになってきた。「住民参加」とともに、行政が市民の中に入っていく「行政参加」も必要である。



## 第2分科会「住民参加のまちづくり」

レポーター：藤原 恵洋 記録：五島 朋子  
サポートー：五島 朋子

住民参加の意義と具体的な方法を、参加者自らが手足、体を動かして議論し進めるワークショップ方式の実践を通じて考えた。また、まちづくりに欠かせないフィールドワークの実践と大平宿の魅力を十分に味わうため、戸外にも繰り出した。

### ◇ゆるやかな関係づくり

立場の違う人々が具体的な議論を積み重ねていくためには出会いの場面の関係づくりが重要であり、その「ゆるやかな関係づくり」のやさしく楽しい手法を行った。

(1)まちづくり自伝シート 事前に用意した「まちづくり自伝シート」に自慢話や故郷、将来の夢について応えるうちに、その人の人柄やまちづくりに対しての考えがわかり、それをもとに話し合う。参加者の情報交換にはずみがつく。

(2)他己紹介 他人が自分を紹介する仕掛け。ペアの相手の似顔絵を描き、インタビューをして得た情報をその人に代わり皆に紹介する。紹介と参加者間の雰囲気づくりを図る。

(3)ネームチェーン 自分のニックネームとそれにふさわしいジェスチャーをつけて紹介する。次の人はそれまでの人の全てのニックネームとジェスチャーを再現し自分の分を加えて次に伝える。



## ◇フィールドワーク

### (1)課題選び

- ・「むらはおもしろミュージアム」　額縁を持って村の中を歩き、気に入った風景、気になる場所を切り取りながら村の魅力を再発見する。
- ・「形容詞探し」　あらかじめ用意した「さわやか」、「心地よい」などの形容詞にふさわしい場所を見つけだし、伝え合う。
- ・「欲しいもの・足りないものづくり」　村の中を散策し、足りないものや欲しいものを探し、創造提案する。

3つのうち希望順位により「むらはおもしろミュージアム」を行った。

### (2)方法

ファッシリテーター（ワークショップ運営役）とサポーターの2名を含む総勢9名は、さっそく、額縁を「からまつや」の自在鍵に構えた。額縁は当日になって、「おおくらや」の建具を拝借し間に合わせた。細長い形で、縦に使えば掛け軸、横に使えばパノラマ写真のように風景が粹取られる。この額縁に納まった自在鍵は、まさに掛け軸風の構図で、額縁を構えたフジッコ（ニックネーム）はそれに『松竹梅』と名付けた。大平宿30景のうちのまず第1景が出来上がった。民家の位置を落とした地図に、名付けたばかりのタイトルを書いた付箋を貼り込めば大平宿「むらマップ」となる。

さて、この額縁によって私達が切り取った大平宿30景は以下の通りである。「紙屋」の庭を覗きこんで付けた『大平の懐』、「紙屋」横の蔵の海鼠壁と手前の草の縁とオオハンゴウソウの黄色い花の取り合わせで『風のレジェンド』、「紙屋」の正面を捉えて『桂ちゃんの目』、「深見荘」の囲炉裏端で串刺しのイワナが焼かれているところを捉えて『釣りたての味』、「下紙屋」の下の大壁の様子を額縁に収めて『壁のコラージュ』等など。大平宿らしい風景を次々と発見しては額縁を構えて見つめ直す作業を繰り返し、タイトルを書いた付箋で地図を埋めていった。

## ◇ディスカッションとまとめ

「むらマップ」を会場に持ち帰り、以下のルールで議論した。

- ・発見した3つのことを3枚の付箋にそれぞれ書き、一人ひとつずつ発表する。
- ・他の人の意見に否定的な見解を与えない。
- ・似た意見を関係付けながら整理し、模造紙に貼り込む。

この議論で得られた共通の発見は、「うつろいゆくもの」「自然の中で風化していくもの」「時間の経過がうみだすもの」の美しさであった。さらに「人、先人、祖先たちの手による人工物、時間の影響、変わらぬ自然といったものが入れ子構造のような状態で私たちをと

りまいっているのではないか」、「私たちが大平宿の中で違和を感じた人工物は、今回のテーマに準えるならば、まさに『近代化の功罪』という論点に帰すのではないか」といった意見につながった。

#### ◇最後に

ファシリテーターとしての藤原氏により、ワークショップの手法の意味と意義がその都度示された。それは次の通りである。

住民が参加して行うワークショップの現場では、共有した経験や具体的な情報をもとに議論を積み上げていくことを常に意識し、わかりやすく開かれた議論の場を作るために議論のルールを工夫することがポイントである。ワークショップとは、そのような場を可能にしていく仕掛け全体であり、参加者同士が水平な関係にあるという意志・思想を背景としている。

### 第3分科会「古建築の修復と現代の工法」

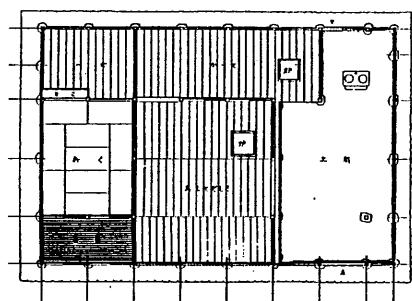
レポーター：渡辺 隆 記録：中村美和子

サポーター：小林 一元

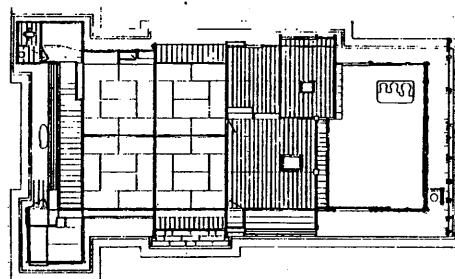
	古い形式の民家 旧高麗家	現代住居に近い民家 旧進藤家	設計指導者がいた民家 旧林家
	1700年代前半 埼玉県飯能日高町 神主さんの家 (国の重要文化財)	1847年(江戸末期) 千葉県袖ヶ浦 庄屋さんの家	1830年頃 千葉県 大原幽学が設計指導 (県の有形文化財)
土台	なし	外廻りのみ	
大黒柱	なし	あり*江戸中期以降普及	意図的になし
天井	奥の間のみ(竿縁)	各部屋張ってある	
床板	竹だったのでは?	突き付け、脳天釘打ち	
貫	足元貫・内貫・天井貫 外廻りは化粧 1寸2分~1寸3分	胴貫が1本入る  9分	
壁	外部:土壁 内部+鴨居より上:板壁 (板15mm厚)壁下地:竹小舞 *江戸中期までの特色	内も外も土壁(板壁なし) 内外ともに真壁 *関東民家の特色	
構造形式	シンプルで合理的 柱の長さを通りで揃える *この時代に多い 上屋梁が下屋梁の上に跳ね出 した形をとる*関東民家の一 つの特色(江戸末期に崩れる)	意匠性高い 屋根を大きく見せる 高さも高い 三方せがい造り 腕木形式で軒を深くする *江戸末期に増加	単純明快で分かりやすい 上屋は上屋で固め、下屋は下 屋で新たに出す形をとる
土間	差し鴨居なし 建具は入っていない	差し鴨居あり *江戸中期から一般化 梁が6寸で3間飛ばしてあつ た(勿論たわんでいた)	差し鴨居あり 太鼓落としの梁使用
足元	大引と地貫で固める	外廻りは土台(平使い) 内側は大引と地貫	大引太い*明治までの特色 大引は全て柱に差してある
小屋組	母屋の継手に中世鎌あり *中世鎌の使用はこの頃まで 相欠き四方差し鎌の所あり	重ほぞ、棟束あり 上屋梁の上にもう一段小屋梁 →建物の規模と関係ありそう	
栓	全部鼻栓	差し鴨居関係は込み栓 小屋の方は鼻栓	
その他特徴	モジュール:6尺2寸2分5厘 床の間:古い形式 建ててから造作までに、1年 以上おいている 柱5寸(外廻りは4寸)	北側の彩光・通風考慮 普請帳が残っていた (石や瓦は江戸から取り寄せ) 式台玄関と縁側の下屋は瓦 *この時代千葉県で多い形式 規模は高麗家より10坪大 お茶室は明治5年の増築	モジュール:6尺2寸2分5 厘 座敷廻りの障子を外して、縁 廻りの外へはめる →座敷が広く使える工夫 押入があちこちにある

## ◇古建築の修復

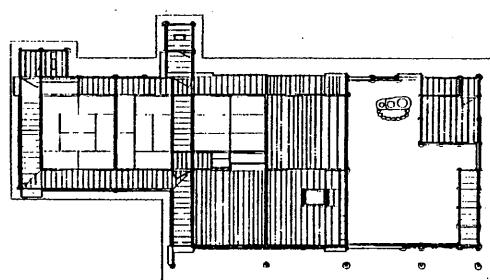
- ・民家と社寺建築の違い 社寺建築は木割りに従い、一つのマニュアルのもとに建てられている。民家は自由奔放に造られている。
- ・実測調査 気をつけなければならないことは、建前までに刻んだ仕事と造作で刻んだ仕事の見分けである。貫穴は建前以前に、天井の欠込み、鴨居・敷居・長押は造作仕事。場合によっては長押の首切りは建前前のこともある。
- ・文化財の修復 文化財の修復においては、当初どのような形だったかという仮説立てが前提条件になる。最近の修復では、手間をかけても当初材を使えというのが基本になっている。一方、接着剤を駆使しないと修復できない状況ではある。
- ・民家の復元 かつては元通りに復元すればよかったが、最近は構造上の配慮も必要である。民家は壁の配置が偏っており偏心率は不利であるので、構造上の補強方法が課題である。天井は水平構面の剛性に以外と効いている。



旧高麗家



旧進藤家



旧林家

## ◇現代工法の展開

### (1) 山下邸(石神井公園)

現代計画研究所と共同で始めた「民家型工法」の第1作。天井を張らず、小屋組を見せ、野地板・床板はベイマツ4cm厚(雇い実)張りで省力化を図る。外壁は漆喰塗りの大壁。部屋の四隅に柱を立て、頭繋ぎの横架材を廻し、面材を間柱で受けた単純化した構造。2階床梁は成が6寸で9尺スパンとし、継手がない1本もので連続梁とし、モーメントを軽減した。

### (2) 箱根の別荘

2間グリッドの校倉造り。田中文男氏が昭和40年代にやっていた校倉造りをシステム化したもの。150×75の部材を重ね、30cmピッチでダボを埋込み、耐力壁にした。38条認定を取ったが、更新はしていない。徹底的に構造計算と実験をやったため、基礎データができた。18mm角の堅木のダボは20kg／本のせん断力がある。この工法は大スパンが可能である。欠点は配線と雨仕舞いである。改良法として、柱で軸組をつくり、その間に落し込み板で耐力壁とし、板には縦横ともに2本溝にして雨の侵入を防ぐ。

### (3) リビングショーアのモデルハウス

「家づくり85」の国産材を使ったモデルハウス。屋根は垂木なしで、母屋に4cm厚の野地板を張る。小屋梁は2間スパンに対し、梁成を15cmに抑え肘木を使い、2階床梁は30cm。工期を抑えるために床はパネル化し、建具枠も工場で組んだものを現場で取り付けた。合理化を考え、継手はすべて真継ぎにしたが、色々な要素が集中し、施工上の問題となつた。先人の知恵に従い、持ち送りや肘木を使う方がよい。使用木材の材積は0.9～1立米／坪で、半分が板類である。

### (4) 今後の課題

商品化された現代の住宅の見直し：大工の人工を比較すると、前出のモデルハウスは8.5人／坪、建て売りは3～5人／坪、在来軸組プレカットは1から1.5人／坪である。建設費は、モデルハウスの場合現在の物価に換算すると80～90万円／坪、建て売りは40万円／坪、昨年ゼネコンの下で施工した物件は合理化の末60万円／坪であった。

プレカット工場は全国700社が競争をし、8～9千円／坪の時代である。途中までプレカットを利用し、機械でできない部分を手で加工するなどの工夫の余地はある。環境負荷を考慮し、何世代にもわたって暮らせる住宅づくりを心掛けるべきである。

日本の山を守る：日本の林業が存続し、山が健全な状態にあるために国産材を使うべきだ。山には使える木材がいっぱいある。国産材が使えるように山と連携し、流通のルートを開拓する必要がある。

## 第4分科会「自然を遊ぶ」

インストラクター：羽場崎清人 記録：岡部 知子

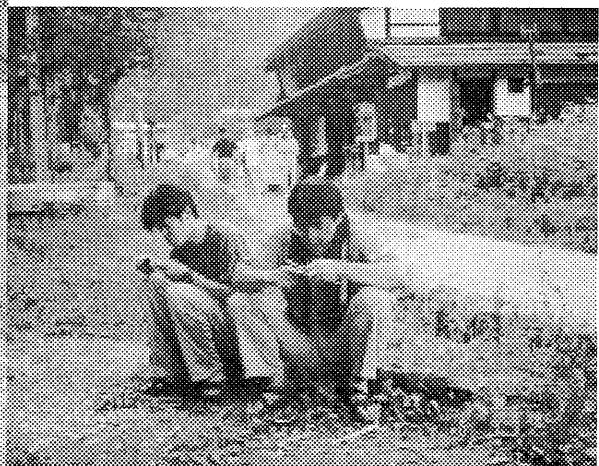
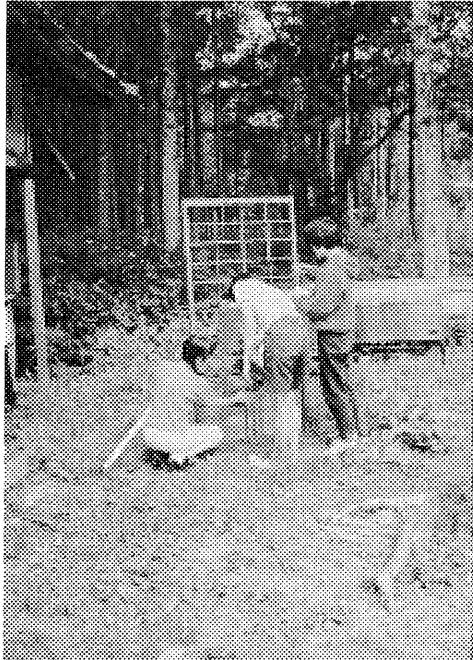
サポートー：岡部 知子

羽場崎さんを隊長に、大平宿に参加した子供たちが目を輝かせた唯一の分科会で貴重な一日を過ごすことができた。都会に住んでいる子供たちは畑に親しむことはもちろん少ない。彼らは目を丸くさせ、爪を真っ黒にしながら、じゃがいも掘りに没頭した。収穫したじゃがいもは、蒸して食べられるように川で洗い、火にかけた。蒸しあがるのを待っている間に、子供たちは切り出しナイフをうまく使いこなし、羽場崎さんに小割にもらった木で「my hashi」作りに精を出す。大人も負けずに本気を出していた。ひとりで幾膳を作る子がいれば、彫刻を施しこだわりの箸に仕上げる子や、二本の箸が対称にならず三本目に手をかける子など、様々である。

ナイフで手を切り、泣いてしまった子がいた。周りで心配そうに眺める子供たち。危険だと、刃物を使わなくなった今の子供たちはそんな場面に遭遇することもない。怪我をした子にはかわいそうだが、子供たちは、怪我をするとどうなるか、道具は単に人を傷つけるものでない、ということを学んだはずだ。

お酒を飲んで楽しんだり、難しい話に耳を傾けたりすることができない子供たちが、「自分も大平宿に参加している」と実感できる分科会だったと思う。

(以上敬称略)



## 第5分科会「ドイツの郷土保護とエコロジー運動」

レポーター：赤坂 信 記録：佐川 彩  
サポート：益子 昇

最初になぜ郷土保護という問題に自分が関わる様になったかということについてお話ししたいと思う。郷土保護運動というのは自分達の生活領域に関して、住んでいる人間がコミットしたり安全や快適を考えていくことだと思って勉強し始めたが、資料が少なかったので昔の文献を読むうちに、そこに住む人がその環境をいい状態につくりあげたり、キープしていくという話ではなくて、故郷（農村部や小都市）を主として都会に住む（そこに住んでいない）人々が守っていくという運動だと気がついた。

1976年に、文化財保護法の改正があり伝建群の保存制度が生まれた。その頃は日本ではディスカバーリヤパンというブームがあり、人が生活、生産している風景がいったい観光の対象になるのかと考えた。当時の国鉄が京都、奈良、鎌倉といった歴史都市だけでなく、いわゆる名もない町までマーケットを一気に拡大した時期だった。その中で歴史環境の保存を修論のテーマとし、今井町、妻籠等を歩きまわって、ドイツの郷土保護の日本版をやってみたつもりだった。それが、ドイツの郷土保護をテーマとするようになったきっかけである。

### ・反近代化としての郷土保護

工業がなかった時代では、農業イコール経済であった。ドイツは19世紀後半に工業革命を体験するが、農業は農業で効率化を迫られ、農村風景が激変する。土着の農業労働者は姿を消し、外国、特にスラブ諸国からの労働者が入ってくる。彼等はじきに工場へと労働の場を移す。19世紀後半から20世紀初頭にかけドイツ史上最大の人口流動があった。これまでなかったような日常的な価値観がひっくり返る経験をする。19世紀後半から歯止めのない経済、工業、農業共に経済開発の動きが生活上の価値観を大転換させた。また、その反動もあった。そこで起きたのが「復興運動」というもので刷新と復古という面が一度に出ている。その運動の主たるもののが郷土保護運動であったといわれている。刷新という面では青年運動がある。若い人達が改革的な意識を持ちながら社会の旧態からの離脱ということ、新しい価値観の創造を目指す運動を開拓する。ここでまた、自然的な存在や素朴な生活への理想を再び勝ち取ろうとすることが青年運動の中に出てくる。一方、復古という面では工業化時代に反工業化を唱える旧来からの勢力、先ほど工業が現われる前、経済=農業だったと申し上げたが、富の源が全て農業に代表されているという時代に勢力をもっていた人々がどんどん追いやられ、工業という新しい経済勢力に対して何とか盛り返

そうとする。保守主義という言葉に代表される旧勢力の人々である。

19世紀半ば、リールという人が大都市工業化に対する敵意の表明をする。その半世紀後の復興運動との共通点は大都市に対する敵意であり、大都市嫌いという感情である。これは青年運動の主体と昔の富の代表（旧勢力）が奇妙に一致しているところでもあった。青年たちは「静かでゆったりとした生活」、「昔からよく知られた信頼のおける関係」を農村の中に見いだそうとした。一方、リールは「ドイツ農民は我が祖国では他のヨーロッパ諸国は見られないような生活上の意味を持っている。すなわち、農民はドイツ国民の未来であり、我々民族の精神を元気づけ、若返させてくれるのがひとえに農民階層なのだ。」と農民層を讃めあげる。その裏には19世紀半ば、農民のプロレタリア化を農民の堕落、荒廃だと非難していた現実がある。彼が言いたかったのは社会階層の身分の安定は農民層が不動のものであってこそそのものだということである。農村は望ましいプロトタイプがあるのだという幻想を持っていたから、リールは自分の理想に照らして、農村の都市化と墮落を非難していた。

「郷土保護」という言葉は音楽家であるルドルフという人物が19世紀末に考えだしたとされている。この運動が支持され、発展していくのはどんな時代かということについて触れたいと思う。19世紀後半というのは、自然や社会が大きく変化した。自然保護や歴史研究に対する市民階級の関心が高まる兆しが見えてくる。しかし、19世紀初めにも似たような傾向が生じる。これはナポレオンがドイツ諸邦を支配してゆく際、そういった外国からの勢力に対する反発としてナショナリズムが高まっていったことに起因する。そこで、民俗、民謡、民話、昔話、伝説、法、慣習、遺跡の調査、採取というようなことが盛んになる。祖国と人民の存在を自ら問い合わせ契機となる。すなわち、ドイツ人のアイデンティティーを目覚めさせることになったのである。この時も郷土研究が一般の人に広がっている。医師、教師、弁護士、商工業者がそのメンバーであり、こうして郷土の発見となったのが19世紀前半である。

19世紀後半には大きな人口流動や価値観の転換があり、“私は誰か”“ドイツ人とは？”ということをしきりに自問される時代になる。そしてドイツ郷土保護連盟というができる。ここでその連盟の生まれる前後の話をしたいと思う。

郷土保護という言葉を作ったルドルフという人は、1840年、法律教師の息子としてベルリンに生まれ、ピアニスト、作曲家、音楽学校の先生をしていた人物である。

1878年に風景の破壊に対する警告をある雑誌に投稿するが、この時代はほとんど反響がなかったという。また、2～3年後に『自然と近代化生活の関係について』という論文を発表している。風景問題に関心を抱くようになったのは、毎年家族で過ごす場所が、経済

偏重の耕地整理のやり方によって破壊されたということから、つまり工業によるものではなく、農業の方の効率化による破壊ということがこの人の問題意識と関係があった。

この時代は普仏戦争に勝って、賠償金をたくさんもらって、いろんな人が会社をいっぱい作った時代、泡沫公社群生時代という。シロウト投資家が百出していろんな開発をする。ルドルフは、「そういった風景の破壊は人間の精神にも害を及ぼす」と述べ、「国民の精神生活が貧しければ貧しい程その生活の外見は単調となり、金持ちと貧乏人の区別がなくなってくるということ、またその逆もあり、むしろそこに問題がある。風習や、民俗衣装における特徴的なものが消えてゆくことは単に精神的な貧困化の印にとどまらず、人々の階級身分の体面が消えていくことであり、身分上の喜びを捨て去るものだ」という。19世紀半ばのリールの話をしたが、まさに半世紀前の発言に共通するルドルフの保守主義の立場を明らかにしている。ルドルフは、こうした精神的没落に対抗して、数多くの指導的文化人に署名をもらい、1903年に郷土保護連盟結成の呼びかけをして翌年連盟ができる。1904年、ドレスデンに設立。連盟は「ドイツ民族が無傷のまま清廉に保たれ、ドイツ国土がとりわけ、無思慮な工業利用の為に自然が破壊されたり、広告物によって、風景の悪化が生じたりしないようにすること、記念物や自然の詩情によって国土が守られること」を記念物保護に関連する課題として、ドイツ各政府に要請した。組織面では6つの専門分野からなる。

- 1 記念物保護（建築のフィッシャーが担当）
- 2 伝統的な農家や町屋の工法の保存（連盟の初代会長、シュルツェ＝ナウムブルク）
- 3 廃墟を含めた風景の保護
- 4 原産物植物とその環境の保護
- 5 可動な物件である民芸
- 6 習慣、風俗、祭礼及び民俗衣装

#### ・ドイツ郷土保護連盟の設立時の状況

19世紀末から今世紀にかけてドイツにおいては、郷土保護に関心があつたが、他の国においてもそうであった。イギリスのナショナルトラストが19世紀末、1900年、フランス、ポーランド、スイスに郷土保護関連団体の結成。1909年に郷土保護の国際会議がパリで、そして1912年にシュトゥットガルトで開かれた。こうしたヨーロッパ全土に広がる復興運動の潮流の中で共通しているのは郷土保護的な運動だった。ドイツ郷土保護連盟の設立に当たり、主要メンバーは、フックス（入植地建設に詳しい国民経済学者）、コンベンツ（後にプロイセン国立天然記念物保存局を設立。三好学という明治時代の植物学者がコンベン

ツの所で学び、日本に天然記念物という考え方を持ち帰ることになる。) シュルツェ＝ナウムブルク(会長)、ミールケ(事務局長)である。シュルツェ＝ナウムブルクは画家、建築家、作家としての才能に恵まれた人物であり、当時ワイマール芸術大学の教授でもあった。『文化研究』(1901年から執筆、全9巻)を著し、その中で彼は不調和な建築物が文化景観をいかに壊してきたかを非難している。一方、ルドルフは連盟設立の前年、ミールケとともに多数の有力な文化人の署名をもって郷土保護の団体の結成を呼びかけていく。今後の活動のプログラム作成にあたって、ドイツ農村福祉及び郷土育成協会を設立したゾーンライという人物が準備段階で討議に参加したが、ゾーンライの協会のメンバーは郷土保護連盟のメンバーと重複していた。この様に異なる組織の間で人事的に重層することは、世紀の変わり目に集中して起きた。郷土に関する諸運動に強いイデオロギー的関連と共通性が与えられたということや、事実、様々な方向で相互に関連する問題が同時に生じていたためであろう。

### ・郷土保護から郷土育成へ

簡単にいうと郷土保護の対象というのはモノである。モノといえないもの(民族舞踊など)もあるが、広くいうと物件のことである。やがて郷土保護が郷土育成という名になるが、それまで使っていた郷土保護という言葉が、あまりに色々な人が使っていて、あまりよいイメージを持たなくなってきた。あまりに一般化してしまい、ロマンチズムが濃厚に出て、真面目にやっているのに誤解をされるので、名前を変えようということになる。郷土育成というのはモノではなく、ヒトに関心が移っていく、すなわち、郷土保護の担い手としての人の育成を重視するという考え方である。

郷土保護から育成へという改名の契機として、1920年代の後半、郷土保護連盟は組織団体にはつきものの問題を抱えていた。即ち、協力者問題である。連盟自体の活動方針の変化や、新たに加わる賛同者の増加によって問題が深刻化した。シュルツェ＝ナウムブルクは「郷土という言葉にはセンチメンタルな響きがあり、安易にとられ易い。この運動の本来の意味に合わない。保護すべき狭義の郷土ではなくわが国全体をはっきりイメージできる象徴的な存在なのだ。」として、1927年に郷土保護の呼称は十分でないと批判している。この呼称が世間の誤解をもたらし、あらゆる混乱のもととなっていたのだろうか。

ブッセは「郷土(ハイマート)は、商売人やおしゃべり、偽詩人、まやかしものの舞台として、残念ながら今なお多くの人々を夢中にさせるところとなっている。—中略—

郷土について根拠もなくうわついた甘美な言葉で多くが語られすぎてきたし、今でもそうである。自分がやっていることもよく分からぬ者が、一生懸命郷土の将来を考えようと

も、ロマンチックに演出された『おふざけ』ではどうにもならない。』と嘆いている。まやかし、偽詩人というのは、ワイマール時代によく現れるインフレ聖者のことである。当時大変なインフレーションで、自ら聖人、聖者と名乗るものがごろごろ出てくる。長髪、髭を生やし、甘い言葉で女性に近づくのが早い、道徳的にも困ったといわれる若者達、インフレ聖者の時代である。ロマンチックに演出された「おふざけ」というのは入植行動のことと、自然、緑のやすらげる環境が欲しいということで近郊の緑地を占拠し、そこにコミュニケーションをつくったのである。いわば“環境奪還闘争”いうようなもので、経済闘争に期待しない人々がいた。たとえばマルクシズムを信奉する人達の“いずれ我々の明日は来る”と信じて都市や工場地帯を舞台に労働運動をやる人たちがたくさんいたが、またそういうのに我慢できない人たちがいる。そうではなくて、一人一人が革命的な行動ができるんだといって何名かでダーツといって占拠してしまう。それはほとんど潰れてしまうが、このように金より環境だとはっきり言い出す人達がいた。現代のアメリカの運動ではディープ・エコロジストといって非常に実行派というか、電気を使わないなら使わないとか、生活信条まで根底的に変えてしまうような非常にラジカルなものがあるが、ドイツの場合、戦前にそういうものがあった。そういう人達が入植行動を起こしたりしている。時代錯誤、骨董趣味、自然耽美を非難し、伝承というものがいつも無条件にお手本を示してくれる訳ではないことを知る時、近代の発達、特に技術とそれにともなう社会の変化を前向きに捉えていこうとする人々が郷土保護運動の中から出てきた。郷土保護連盟はドイツ工作連盟と協力関係にあり、この中には、建築家、工芸家もいた。やることは専門に応じて当然違うが志を同じとするものであった。この路線はむしろ産業擁護といった立場にたっていたため、保護派からは妥協的だと後に批判されることになった。Volk (フォルク) には国民、大衆という意味があるが、このフォルクを郷土育成の担い手に据えようという考えがあった。つまり国民教育をやろうということである。郷土保護から育成への転換期の傾向が連盟50周年につくられた『ドイツ郷土保護の回顧と展望』という本の中に認められる。これまでの郷土保護の目標の設定に対する批判として守るべきものは何か、救うべきものは何かという連盟の発足当時とは異なる郷土育成を論拠とする概念が新しく選別され明確となる。これまでの郷土保護のモティーフは情緒的なものに基づくもの多かった。すなわち、古さゆえに評価されるべきとか保護されるべきとか、あるいはなにものにも替え難い“手付かずの自然”をありがたがるなど環境の変化に対して盲目的あるいは無関心であったことが挙げられる。しかし、その“育成”についての解釈についても相違があった。同じ会報に二人の違う意見が載っている。

シュルツェ＝ナウムブルク会長、ヴァーゲンフェルトという人物、両者ともに郷土育成

の担い手は人間であることを強調するが、シュルツェ＝ナウムブルクは、民族における大衆は反文化的であるとして否定している。一方ヴァーゲンフェルトは、彼等こそ眞の郷土に憧れているのであり、文化価値や自然美に盲目なのは彼等は文化の相続人にされていないからだとしている。ヴァーゲンフェルトの表現を借りると「あなぐらのような安アパートに生まれ、大都会の路上や煙突の林立するボタ山のあいだに育ち、毎日毎日、工場や鉱山の立坑の中で歯車のきしむ音を聞きながら、生き延びようともがく彼等はドイツの風景の魔力、即ち祖国の自然的、歴史的な美を全く知りもしないのである。ドイツの自然や文化財産の美を味わうことから締め出され、彼等は自らの郷土の中で疎外されているのだ」と述べている。端的にいえば、シュルツェ＝ナウムブルクは文化の担い手として望ましくない者は切り捨てた。逆にヴァーゲンフェルトはフォルクこそ担い手であるとし、大衆に民族の歴史や同族意識を得させるための国民教育の必要性を説いた。1930年に、ヴァーゲンフェルトは、「余りにも長いあいだ、郷土保護や郷土育成は専ら教養人の領域にあった。しかし、郷土の美の上に郷土の人間が住んでいるのだ。もし、我々が今までないがしろにしてきたフォルクとしての価値を認めたいと思うならば、フォルクとは郷土の守り手、それは単に郷土の価値の守り手ではなくてドイツの本質を守護するものに違いない。しかし、これまで通りの考えならば保護も育成もただのつぎはぎ細工に過ぎない。」と述べている。ヴァーゲンフェルトについて補足すると、方言詩人として後に名を残す人物で新しい郷土保護運動の中心的な指導者であり、ヴエストファーレン地方の民族性の保持と育成のために当地の郷土保護委員会を改組し、目的を明確にした郷土連盟とする考えを表明している。彼は若い頃に工業地帯で教師をしており、そこで労働者問題、ことに民族問題に直面する。彼はその体験からある確信を得るに至る。即ち、「文化価値の保存だけを目標とした郷土保護では、時代の最も重要な関心事を見逃すことになる。なぜならば、文化は民族性豊かな土壤無しには生きてゆくことができない。このままでは郷土保護が文化から命を奪ってしまうのではないか」と危惧していた。つまり、健全なドイツの家族が、当時東の方からスラブ系の人々がどんどん流入することで危機に瀕しているのである。事実、相当数のドイツの村が外国人に占められていた。ヴァーゲンフェルトはドイツのフォルクを文化的に強化する必要を論じた。

19世紀のリールの理論によれば、農民を鍛えあげて自分たちの階級を守るために防波堤にみたてたわけである。ヴァーゲンフェルトはドイツの健全な（労働者、フォルクの）家族というものをきちっとした形に育て上げて、大量に流入してくる外国人の防波堤に考えたのではないかと思う。それが郷土保護の担い手のひとつである。連盟の会長であるシュルツェ＝ナウムブルクは、“ふさわしくないものを除く”という考え方であり、片方は、“い

や、そうではない、鍛えあげなければならない” ということである。

### ・戦後のエコロジー運動について

『生態平和とアーネー』という本 (U. リンゼ, 1986 - 内田・杉村訳、法律大学出版局、1990) によって今まで郷土保護運動あまり知られていない側面が明らかになった。この中で、ドイツの政党の中に緑の党という のがあるが（彼等は自ら党派的であることを否定しているので本当は党といってはいけないのだが、議会政治に参加するためには一応政党的グループのかたちをとらなければならないので、普通は“緑の人々” という訳が適當かと思われる。）その構成メンバーのなかには、“緑の人々” が登場する前に社会民主党に属していたのが相当数いて、新左翼的な性格をもっている団体である。この運動のイメージを創出した人物は「緑を象徴とする着想」を得たのは1976年のこと、それは1969年アメリカのバークレーの国民公園で放たれた緑の風船玉がそのきっかけであったというようなことを言っている。アメリカのあがれが元々のイメージだと。著者のリンゼは、この点について激しく論難している。歴史性の欠如はドイツの新社会運動の特徴だというけれど、あろうことかアメリカを引き合いにだすとはという憤りが伝わってくる。ここにドイツの環境運動に関する「新」と「旧」の世代間の断絶性が感じられる。

緑の人々が政治的、社会的に認知されたのは、1977年にニーダー・ザクセン州で緑の環境保護という名前で初めて政治上のアイデンティティをみいだす、つまり議席を確保して以来のことである。その緑の運動のおおもとが戦後のアメリカなんだという考えにリンゼは我慢ならない。なぜ戦後の新しい運動とそのベースとなった戦前の動きが切れてしまったのかという点がリンゼにとって問題であった。エコロジー運動のもとは戦前にもあったということは後で述べる。一般的のドイツ人にとって戦前のものを引きずりだすことに対する抵抗感がある。これはナチズムに絡めとられたという過去がある。少しでもナチスと関係があったものは全てドブに捨ててしまおうということをやってきたわけで、なるべくそういういったものと運動の根がそこから現代に繋がっているということはなかなか認め難い。若い人は若い人で戦争中にドイツが何をやったのかという話は繰り返し聞かされているので、皆、幼くてもそういうことを知っている。だから、新たにアメリカの影響で正に新生な運動なのだというふうにしたいのではないかと憶測している。戦前というけれども、今世紀初めには労働者の階層でも自然に親しむレクリエーションが盛んに行われていたのである。労働者の文化と生活を問う1907年から11年に行われたアンケートでは市民層（ブルジョアジー）のみならず、労働者層にもロマン主義的な自然志向がパラレルに存在していたことを示している。市民層、そして労働者層、形は違うけれども森に行く。つまりブルジョ

アジーが郷土保護運動をやったりして森に行って、静かでいいなどのんびりしていると、向こうから労働者諸君が隊列を組んで歌をうたいながらやってくる。“なんて奴らだ”とブルジョアジーの贊美を買う。だけど同じ森に行っている。まず先にブルジョアジーがいろいろなことをやる。労働者層もそれに対して“私たちもやりたい”と同等の権利を獲得しようとする。イギリスでも階層によってレジャーの楽しみ方が違うが、時々階級融和というのをやってみるけれど、うまくいかなくてまた元に戻る。ドイツの場合は森林に入っていって自ら休養することを労働者層も今世紀始めに既にやっていた。私が郷土保護について知っていたのは正にブルジョアジーの階層の活動としてであった。また同時に労働者層の自然志向があったということを、この本で知った。そういうアンケートが実在したことを見たとき、資料をとりよせて確かめたが、当時、いろんな人が労働者問題を考えていたようである。この時代にレーフェンシュタインという人物が『労働者問題－特に近代の大企業と労働者の心身への影響の社会心理的側面を考慮して』という題の論文の中でアンケートを行っている。その中では1900年ごろのプロレタリアが工場街を自分達の生活空間であるとアピリオリに認めていたわけではないのだということが確認できる。

この時代の労働者はさまざまな労働文化団体に所属していた。その労働文化団体のルーツは社会主義鎮圧法（1878～1890）以前にさかのぼる。部分的にはブルジョアジーないしは教会サイドから設立されている労働運動の互助会としての役割を果たすもので、社会主義鎮圧法時代にはこうした労働者団体が政治的行動をカムフラージュする機能を担うことになった。ビスマルクが下野し、社会主義鎮圧層が廃止されるとこれらの周辺の政党の多くは発展した。こうした文化団体には政党が設立したものに労働者スポーツ協会、労働者合唱連盟、自由国民舞台、自由思想家運動、労働者語学グループ（エスペラント連盟など）労働者禁酒連盟、労働者婦人連盟、各種の趣味グループ（労働者ラジオ連盟、チエス連盟）等、これらの団体は党で区分されるものではない。たとえ党によって設立されたものであってもである。野外レクリエーションに関する労働者の文化団体としては、すでに19世紀末に誕生しているものがある。それはプロレタリアの徒歩旅行協会で、旅行クラブ、「自然の友」という名で当時は少数派の文化団体だった。1895年、ウイーンにカール・レンナー（後にオーストリアの首相になる人物）によって設立されたもので、現在も続いている。レーフェンシュタインが労働者層の実態調査を始める2年前の1905年には8647人の会員をもっていたという。この頃、ドイツとスイスにも支部を構えていて第一次大戦中の1914年は会員の減少はあったもののそれでも1万9千人いた。大戦中の1918年に2万6千人の会員数を数えた。ワイマール共和国時代に入って1920年には会員はその3倍になる。さて、ここまででは、主としてワイマール以前、すなわちカイザー時代に起こっ

たことである。この時代には1904年にはドイツ郷土保護連盟が設立され、ブルジョア層の環境運動の拠点となる。1906年に天然記念物保存の部局ができる。このようしてレーフェンシュタインが調査した時代には様々な階層によって自然の中でのレクリエーションが行われていること、そして自然が重要な関心事であったということがわかる。こうした点がエコロジー運動のルーツといえるであろう。労働者が要求したのは賃金だけではない。自分達の心身を休める自然の環境を求めていたのである。いわばむしろ金より環境という、環境奪還闘争であった。自分達の住むべき所を探し、住み着くというラジカルな入植行動が展開されていった。

### ・戦前の日本における郷土保護運動導入の試み

第一回の郷土保護国際会議がパリで、第二回がシュトゥットガルトで1912年に開かれる。この郷土保護の万国会議の状況が、石橋五郎（文部省の外国留学生で神戸高等学校の教授）によって報告されている。1913年（大正2年）黒板勝美という東大の教授が石橋五郎の報告における郷土保護について解題している。黒板の見解は、「保護の対象は過去の人間活動が地上の上に残存せしめた痕跡の中で歴史美術等の研究資料にとって必要なものであり、したがって何より学術上の意義をもつもの。しかし史跡はそれにとどまらず、人間活動の舞台となり、それに密接に関係する天然状態も史跡に含めるべきである。」と主張。今でいう歴史的環境の保護につながる主張と見ることができる。さらに、歴史的事実でないものであっても歴史的伝承にともない国民が信じ感化を受けた種類のものも彼にとっては史跡に含まれるべきものであった。学術上の意義を重視する現代の史跡保存制度の中では、遺構をともなわないものは冷遇される傾向がある。黒板のドイツ郷土保護への評価は次の3点である。①歴史環境の保護、②伝承地の保護、③台帳法。これは文化的な価値や学術上貴重なものをあげ、フランス流の一番大事なものから大事ではないものまで全部ランクをつける方法ではなくて、台帳に登録する。黒板が気にしているのは、「差等区別を附す」ということ。つまりランキングすることを非常に嫌った。これは非指定物件の軽視を招いてひいては破壊、廃滅を招くというのである。

ドイツ郷土保護の特徴というのは、その地域に固有であれば保存しましょうという考え方である。たとえば小さな村にパンの博物館があつたりする。パンの博物館？とフランス式の当時の中央集中的な価値観だったら馬鹿にしてしまうかもしれないが、どんなものでも歴史がある。そこに住む人々の共通の思い出があってこそ歴史なのだということである。

伝承地の保護とは、伝説上のものでも、つまり史実にないものでも保存の対象とするということである。日本の現代の文化財保護法ではそういうものは全て排除している。と

ころが、戦前は明治天皇の歩いた後を「聖蹟」と称して全部指定する動きがあった。これはさらに代々天皇の聖蹟、そして伝説上の神武天皇の聖蹟までに及んだ。聖蹟は、史跡のトップにランクされるものであった。これは戦後、G H Qが入って来てから聖蹟が解除されるまで続いた。一方、内務省が日露戦争後に一生懸命やっていた地方改良というのである。これは日露戦争後の財政破綻（戦費による）の立直しや、社会矛盾の激化、講和への不満で動搖した民心を国家主義で統合することを目標に内務省主導で推進させた官製の国民運動である。欧米の列強に伍して経済戦を闘いぬくことができる国民づくりと国内の体制の整備・強化が地方改良運動によって進められる。いわば国政の一端を担う国民（臣民）の育成を目標とする運動がオカミ肝煎りで全国的に展開されるのである。内務省の官僚が全国行脚をしてお国の政策にお金を寄付したり、財産を投げうって協力した人々を顕彰することを熱心にやる。また同時に國家の宝、地方の宝も（再）評価し、顕彰していった。ここに史蹟名勝天然紀念物保存制度とリンクする点がある。ただ保存の対象を決定する際、史蹟名勝天然紀念物保存法によって国家による歴史の選別、保護、顕彰ということをやる。これは、国家の意向にそなうだけが保存の対象とするシステムを生むことになった。

ヨーロッパのハイマートシュツ、すなわち郷土保護は、田中琢氏によると「学術重視する国家による保護策の前にいえていく」という。私は学術重視というより権力に依りすぎたのだと思う。特にナチスに絡めとられてからは、あれは本来の連盟の活動ではないという人がいるかもしれないが、なるべく國の近いところで事業を進めていこうという姿勢があった。したがって非常にお役所的なところがあった。また、戦中の金属供出の際に隠してある教会の鐘を“文化財の記録、保存だ”といって調査し、その情報を当局に手渡すようなことも連盟はやってきた。

さて、わが国の郷土保護運動というのは存在したのだろうか。史蹟名勝天然紀念物保存協会という民間団体（徳川頼倫会長）が明治の終わり（1911）に設立され、これが保存法制定（1919）の推進母体となる。日本版ハイマートシュツで展開されたのはこの時代だったのか。田中琢氏によれば、「わが国のハイマートシュツの時代は…関東大震災とともに終わった」という。その原因として2点があげられている。制定された保存法自体が、国家による歴史選別が前提となっており、自然と歴史を総合した環境の保存する立場とはほど遠いものであったこと。さらに関東大震災（1923）で江戸時代の遺物が大量に失われてしまったことが民間の運動に大きな転機をもたらしたことである。しかしながら、前述のようにドイツのハイマートシュツ自体も変質をとげていたのである。本郷高徳という造園家が「郷土保護と独逸のハイマートシュツ」という記事を『庭園と風景』（17巻1号、

1935) に寄稿している。

「其の主張とするところは保持的、国粹的であり、一見それが時勢逆行の感なきにはあらざるも、産業の発展や誤れる風景の修飾、利用の結果として何物にも換え難き郷土的毀損、廃滅を目のあたりにみるとき心あるものとして此のハイマートシュツツと共に鳴るのは無理もないことである。」と郷土保護運動の国策的で国粹的な特徴を、「国土装景」を目指す市民団体の美化協会の運動と比較しつつ、紹介している。

その2年後の1937年に北村徳太郎が「ドイツ郷土保護に関する一訓令」(都市公論・20卷、3号、1937)というバイエルンの訓令を紹介している。その中で1935年にドイツの自然保護法が制定されていることを北村は次のように評価している。①日本の史蹟名勝天然紀念物の中の名勝と天然紀念物に該当するものである。そして、②国立公園法に該当するものである。③都市計画法の風致地区規定のごときものであり、これらを統一総合されたような法律であると評している。ドイツの自然保護法は世界初のものであるとはいえ、北村の解釈はあまりに楽観的で過大な評価である。

現代のドイツではむしろ世界初のこの自然保護法が批判されているのである。自然保護法発効50周年記念日(1985)に、「環境および自然保護連盟」の会長のヴァインツィールルは「魚類、爬虫類の4分の3、鳥類、哺乳類、鱗翅類の半分以上、シダ、顕花植物の3分の1以上がドイツから永久に姿を消した。」として、自然保護法は完全に失敗だったと言明している。法があってもこれだけ無くなってしまったということなのである。

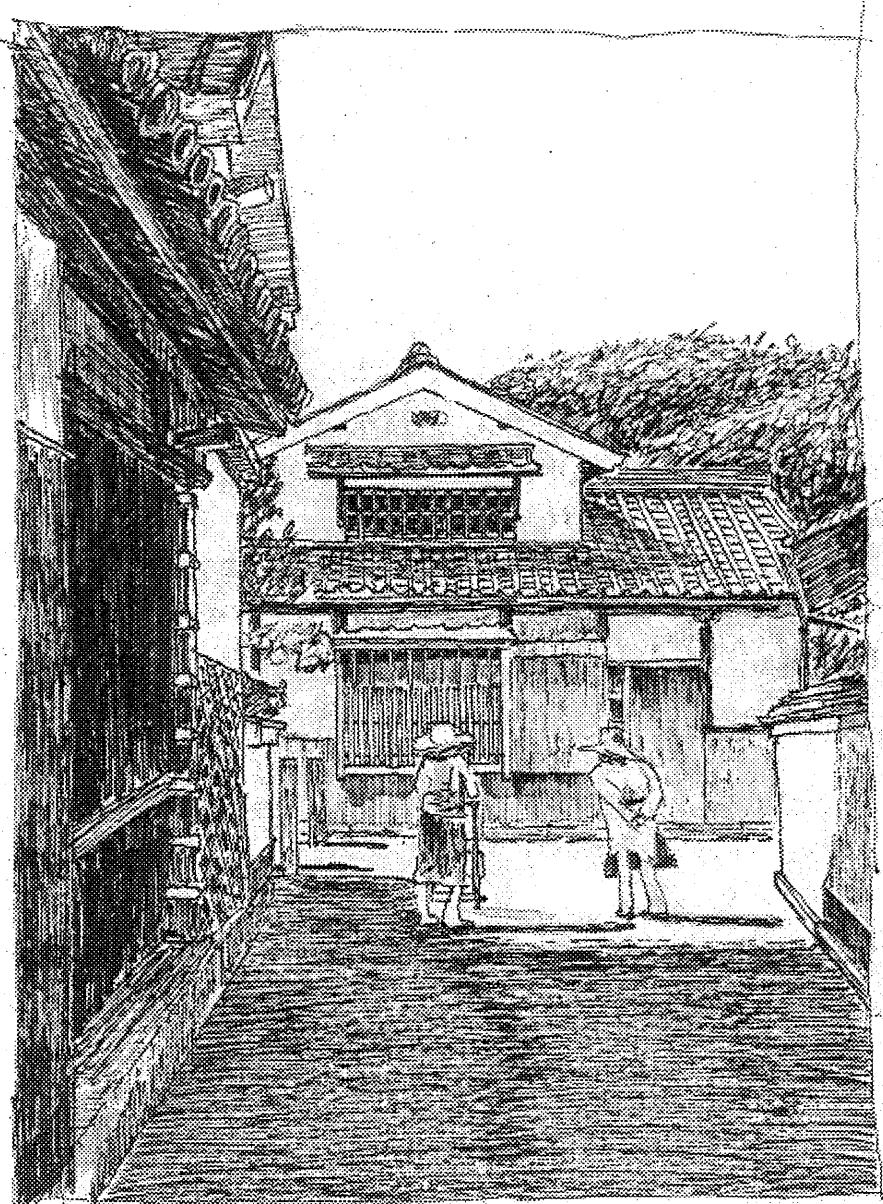
前述の田中琢氏の説の通り、関東大震災後は郷土保護運動がわが国では大々的にとりあげられることはなかった。本郷や北村の紹介にしても散發的で、制度のなかに採り入れようという動きはなかった。ナチスには注目しても、郷土保護にはおそらく関心がもちにくく時代となっていたのであろう。世界各地に労働運動が起こったようにまた世界の各地で郷土保護運動がほぼ同時代に多発した。「賃金」ではなく「環境」を求める運動は、上の両者が結びついたといえる。後のエコロジー運動の下地を成す環境奪還闘争は労働運動の主流とならなかったが、思想のラジカルな大衆化に貢献した。生活改良運動にみられるように自らの人生を賭して自らの信条を日常生活の中で確実に実践しようとする集団が生まれていくのである。

#### 参考文献：

赤坂 信(1992)：ドイツ郷土保護連盟の設立から1920年代までの郷土保護運動の変遷、造園雑誌55(3), pp.232~247

ウルリヒ・リンゼ／内田・杉村訳(1990)：生態平和とアーネーク、法制大学出版局

田中 琢(1982)：遺跡遺物に関する保護原則の確立過程、『考古学論考』平凡社、pp.765~783



— 100 —  
— 100 —  
Ranta

### 塩飽本島町・笠島／香川県丸亀市

建物に囲まれたこじんまりとした路地は住み手の生活の一部として機能しており、人を描かずにはいられなかった。

# 御 縁 木 物 語

高 橋 俊 和

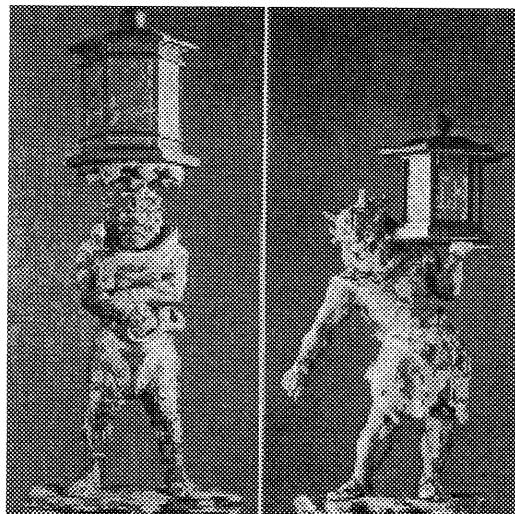
(高橋木造建築研究所)

これまで出会ってきた、御縁のあった木にまつわる話をしてみたいと思います。

## 第一話 天燈鬼・竜燈鬼

昔、彫刻を志すきっかけになったのは、高校生の時に美術全集で見た奈良興福寺の木像、天燈鬼・竜燈鬼の写真でした。これを作りたいと思って、その材料となる木を捜して建築現場から三寸五分角、長さ一尺五寸ぐらいのおそらく梅だったと思われる芯持ちの木端を拾ってきたのですが、それが私がはじめて素材としての木を意識し、木と出会ったスタートでした。

とても天燈鬼・竜燈鬼のようなものは作れるはずもなく、しかたなくトーテムポールのような四つ足の人物像を彫ったのを記憶しています。その時に実現できなかった、あるいは近づくことのできなかった悔しさはずっと私の原動力になっていて、今思えば、鬼だけでなく鬼が掲げる建物の形をした「法燈」にも直感的に引かれるものがあつたのでしょう。そのスピリチュアルな造形世界の構築は今も私の夢であり続けています。



竜 燈 鬼

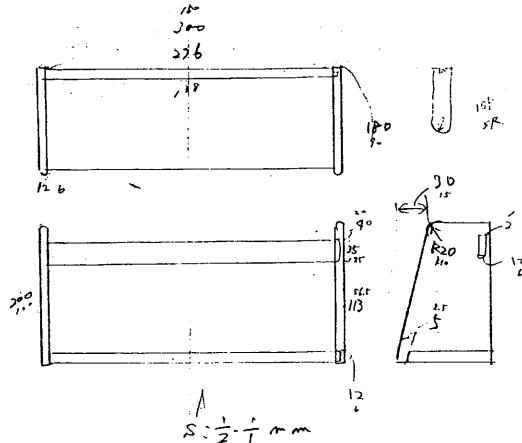
天 燈 鬼

## 第二話 木からの宣告

木の技術を習得するために木工の訓練校に入った時、私は、決して頭は良くなかっただけれど、さりとて悪くはない信じていました。木の技術はつきつめて言えばオスとメスあるいは凹と凸をいかに作って組み合わせるかということに他なりません。その対の組み合わせは当然ながら、ずれると組み合わされません。ぴったりずれない位置に作ってはじめて組み合わされるわけなのですが、簡単な本立てを課題で作った際に、凹と凸が合わない

事態がおこりました。当然組み合わされるように、自分の頭と手が作ったはずのものが、組み合わされないことを、リアルにそのものが私に示しています。「あなたは頭が悪い」そう宣告されているように感じて愕然とし、一瞬頭が真っ白になりました。

結局新しい材料をもらって作り直すことになったのですが、今まで良しとして疑うこともなかった思考方法ではこんな簡単なものですら作れないことがショックでした。私がそれまで生きてきた時間と、それまで受けてきた教育のその総体を問い合わせざるを得ないほどの、私にとっては事件でした。私がより複雑な伝統工法という技術に向かっていったのも、あの時私に宣告したものに対する弁明とそれに対する解答を探そうとした結果だったのかもしれません。

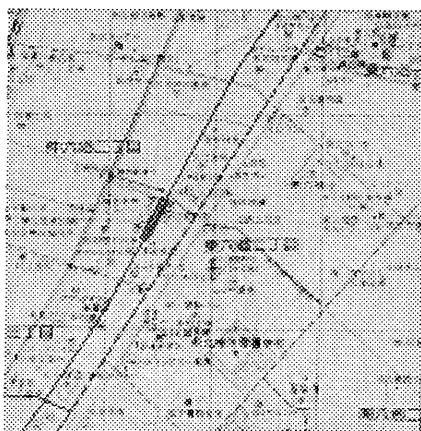


木立て図面（当面のもの）

### 第三話 雜色の家具工場

大学とは何かを問いつつ、結果として二つの大学を中途でやめ、訓練校を経て、初めて勤めた職場は東京大田区の蒲田の一つ先の雑色という駅に近い家具工場でした。そこは六人の家具職人と二人の塗装職人が働く町工場で、半年以上長続きした若い人がまだ誰もいないという職場の、新しい小僧としての就職でした。

そこには無口で無愛想だけれど戦争の体験を仕事中に物語っては涙を流す人や、足の不自由な小人症の人、心臓にペースメーカーを入れた休みがちの人など様々な生い立ちを

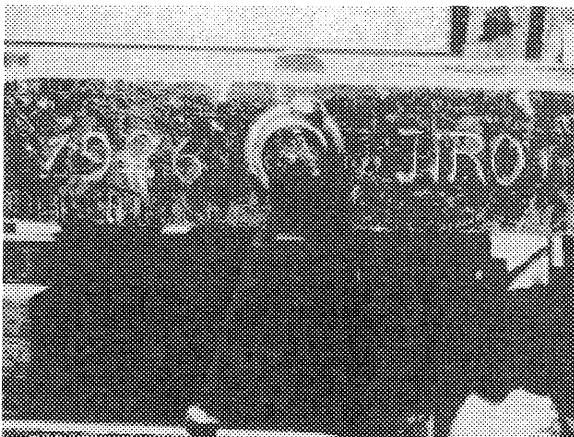


京浜急行、雑色駅周辺

もった人たちがいました。わたしがついた親方は、その工場の唯一の稼ぎ頭で当時五十歳をちょっと過ぎたばかりの人でしたが、健康測定で肉体年齢二十五歳の折り紙をつけられたような体力の持ち主で、連日三時間以上の残業とその後の赤ちょうちんで午前様が当たり前の毎日でした。そこではフラッシュの家具が主でしたが、その親方のチームで私は月産百台をこえる家具を作ることも度々でした。夏のある時、洋材のコクタンを挽き割った時に出る微細なおがくずが原因で、外に出していた腕や首回りの皮

膚に強い湿疹が出て何年もアザが残ったようなこともありました。木といつてもその木の扱われ方もその木を扱う人たちも様々だということを悲哀とともに教わることの多い町工場での一年半でした。

#### 第四話 時を旅する木の道具



二郎先生の万力

二郎先生の万力

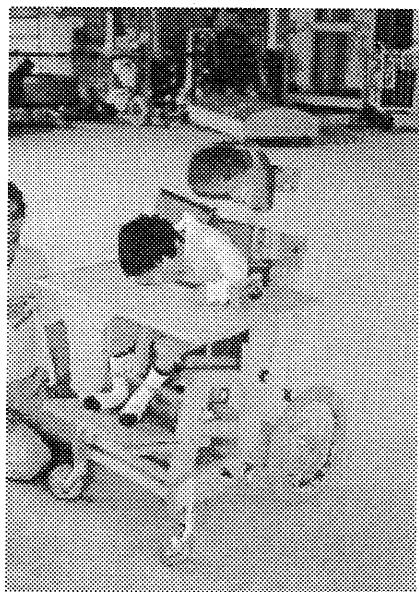
に変色して、角という角は摩滅して、おびんずるさんのように丸く、そして様々な傷跡が刻み込まれ、鉄のハンドルは黒光りしていました。二郎先生をはじめとしてそこで世話をになったたくさんの弟子たちの作業を半世紀以上も助け、見守ってきたことになります。そこで次々に生まれていく新しい作品は、そうした歴史を重ねた古老の道具たちの手で、育まれ生み出された赤子のようなもので、その作業場には時間を越えた温もりとまなざしが充満していて、それが新しい命に注ぎ込まれていました。その空間は全体が生きた骨董といつてもよく、過去から未来へと旅するタイムマシーンのようでした。

#### 第五話 命を支える木

木は不思議な素材です。家はもちろんのこと、道具になって汗にまみれ泥にまみれたりする一方で、工芸品として美術品として人の心をなごませたりもします。また、メカニックな機械や装置として使わ

百歳を超えてもう亡くなっていますが、世田谷に林二郎という木彫家具の草分け的な人がいて、しばらく修業させてもらったことがあります。その仕事場はタイムトンネルで戦前の世界に舞い戻ったような古色蒼然とした世界で、使われている機械や道具はすべて骨董に近いものでした。

その中でも特に記憶に残っているものに、1926年の年号が彫られた木製の万力があります。木の肌はあめ色



脳性マヒ児のために作った車イス

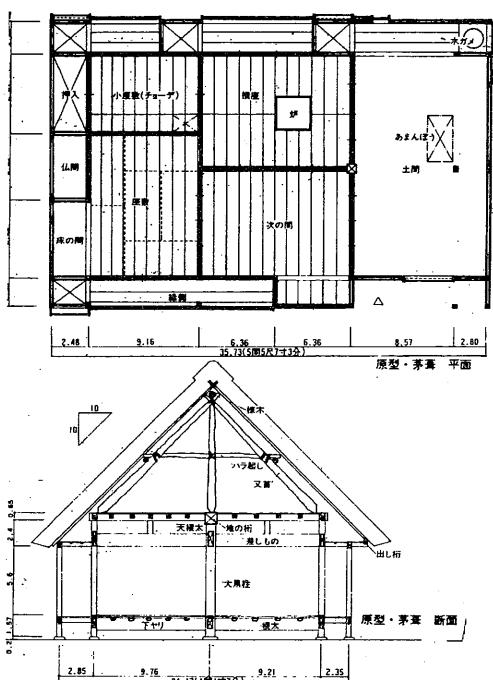
れることもあります。昔ながらの水車や織り機といったものその他に、近年のものとして障害をもった人たちのための姿勢保持装置というのもその一例です。子供の成長や障害の変化にデリケートに対応させることができて、木が文字通りダイレクトに命を支える役割を果たしています。それはメカニックな機能を備えた装置であるにもかかわらず、けなげでやさしいフォルムは、しばしば障害によって固くなりがちな雰囲気をなごませ、ほほえましく感じさせてくれます。木で作られたものは機械や装置となってもヒューマニティを感じさせるものです。

## 第六話 家の死に水をとる

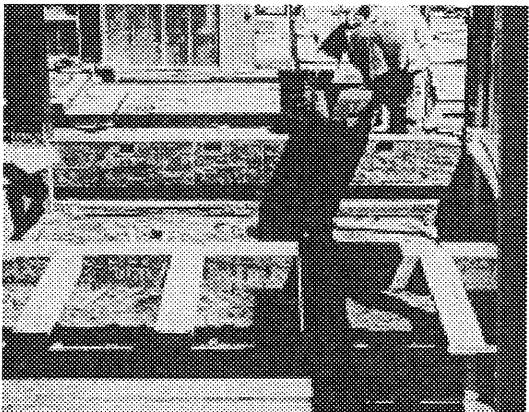
生と死を見続けてきた民家もいずれ土に返る時が来ます。三宅島の棟梁のもとで建築を学んでいた時に、建て替えのために撤去される運命の二百年以上を経た民家があって、家の原型を学ぶにはいい機会だということで、ただ壊すのではなく、一本一本解体させてもらえる機会を得たがありました。

屋根から始まってひとつひとつの部材が作りあげられる工程のまったく逆をたどるように、その姿をさかのぼって行きます。最後には大黒柱が一本残るだけの状態になって、すべての部材は二百年を越す歳月の重みから解放されて、静かに横たわっていました。しかし、その民家は移築されることなく大黒柱を除いてすべては破棄される運命の木たちでした。私たちの仕事は、解体作業と共に、その一本一本を克明に記録して、その家の歴史をたどり創建当時の姿を図面に残すことでした。しかしあまりに傷みのひどい部材は記録をとることもなく、安易にゴミ処分場に捨ててしまったものも何本かありました。後で知らされるのですが、捨てられた木の中には北側の四畳半の「チョウデ」と呼ばれるプライベートな部屋の、その一角の床を支えていた足固め（土台）も含まれていました。なぜその材が記録する価値がないと思うほどにひどく朽ちていたかといえば、その部屋がお産や病人の看護に使われる部屋で、産湯や死に水をその一角に捨てる習わしだったからでした。

何代にもわたって人間の生と死を看取つて



三宅島で解体した民家復元図



床の解体作業

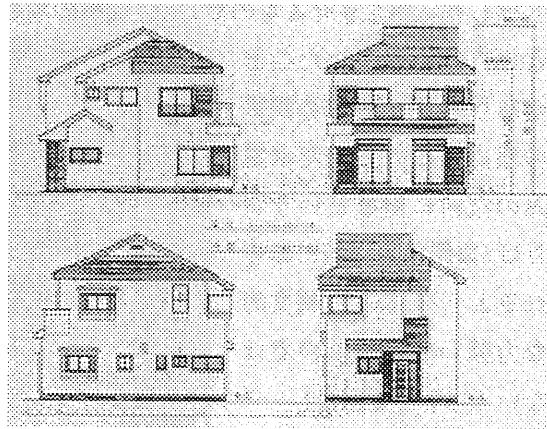
きた水によって木は命を削られ、土に返つていったのです。私たちはゴミ捨て場まで行って、ゴミにまみれながらその材を探しましたが見つかりませんでした。せめてその木たちの記録を残すことが、その家の死に水を取るということであったかもしれませんのに、人間の生死に最も深く関わった木の最後の姿を看取り、その記録を残せなかったのは今でも心残りでなりません。

## 第七話 手から離れていく木

建売住宅は良くも悪くもその時代の建築技術とシステムの有り様を象徴しているところがあります。社長が元大工という会社の下請け（手間請け）として、私が経験した建売住宅は、伝統工法の工法や考え方からは対極にあるような建築でしたが、それだけに現代の建築が到達したある頂点を感じさせるものもありました。いかに早く、安く、無駄なく、合理的に、トラブル少なく造るかが、よく考えられ、ある意味でそのシステムはよく機能しているように思いました。

私たち（当時三人）のチームはあまりにもそういう仕事に慣れていなかったので、社長の特別の配慮で手間賃を上積みしてもらったり、他の大工衆も早く造る技術をいろいろと教えてくれました。そこはまだ人間臭さの残った現場だったといえるでしょうが、より省力化をめざして人間を遠ざけようとする流れは止めようがありません。最近風の便りで、その会社は採算が合わず、建売から手を引くそうです。年間二百棟も手がけ、それだけの大工を抱えて、木にこだわっているほうの仕事ぶりだったのですが、一抹の寂しさを感じると共に、仕事を急に無くす大工とその仕事の行方が気がかりです。プレカットに取って代わられ、大工は造作専門の取付工となっていくのでしょうか。

そうした建売住宅の仕事で、最も印象に残っているのは、和室の柱のスミカケ、加工でした。その柱材は表面を透明なシ



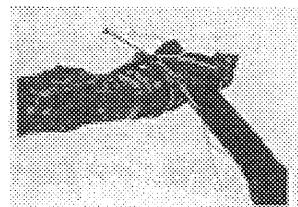
請負った建売住宅立面図

ートでラミネートされていて、柱面を傷つけないためにスミカケも加工もそのシートの上からおこなわなければなりません。木に触れずに木の家を造る、そんな木造建築があるということが驚きでした。もっともその柱材は芯が集成材で、表面には木目の印刷された紙が貼りつけられたものなので、「木もどき」と言ったほうが正確でしょう。それは木造建築というより、木質建築といったほうがよく、現代の状況を端的に示しているように思いました。そこでは木は樹木から遠く離れ、もはや幻影となって、触れることもかなわないフィクションの世界に行ってしまったようです。

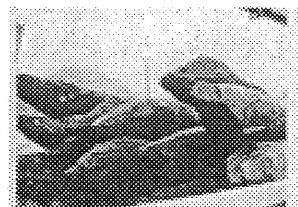
## 第八話 民家の縄文的世界

ちょうど建売住宅を造っている同時期に白川郷合掌造り民家の移築に伴う調査の仕事がありました。現代の住宅を代表する建売住宅と、昔の庶民の家を代表する合掌造り民家の両方にそれも同時期に関わることになったのは、不思議な巡り合わせでした。建売住宅が木から遠ざかろう遠ざかろうとするのに対して、合掌造り民家は自然そのものに近い造りです。興味深かったのは軸組の木構造よりはむしろ、屋根と礎石工事でした。今日でも基礎工事をする人が建前の時には鳶となって高所仕事をするように、民家においては礎石の据えつけと屋根工事は杣が中心の仕事でした。木の加工は必要最小限にとどめて、蔓や藁繩によって組み上げられる屋根とそうした技術をつかって設置される礎石は、民家の最も民家らしいところと言ってよいでしょう。それはまるで円空の彫刻のように、荒々しく、強く、勢いがありますが、その表情は実に優しく、生命力のほとぼしりを感じさせるものでした。軸組の木の技術について、白川の人の口から「小細工」という表現を聞いたことがあります、本来の民家の原点は手の込んだ木組みの技術にあるというよりは、草屋根や礎石にみられるような、むしろ縄文的な力強い姿だったのでないでしょうか。

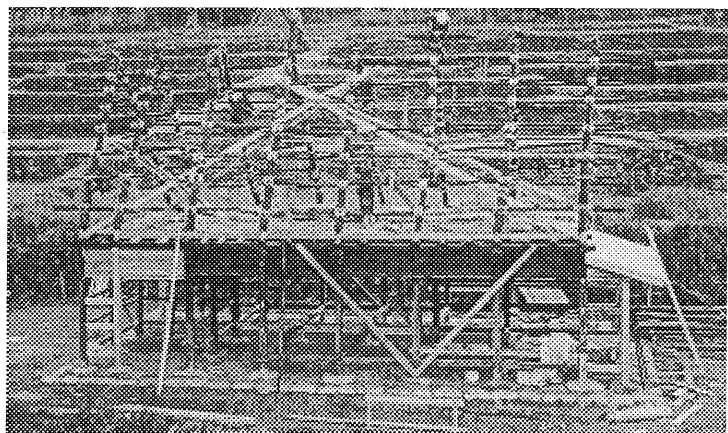
移動中の合掌造り民家 ▶



合掌材上端のネソでの結束



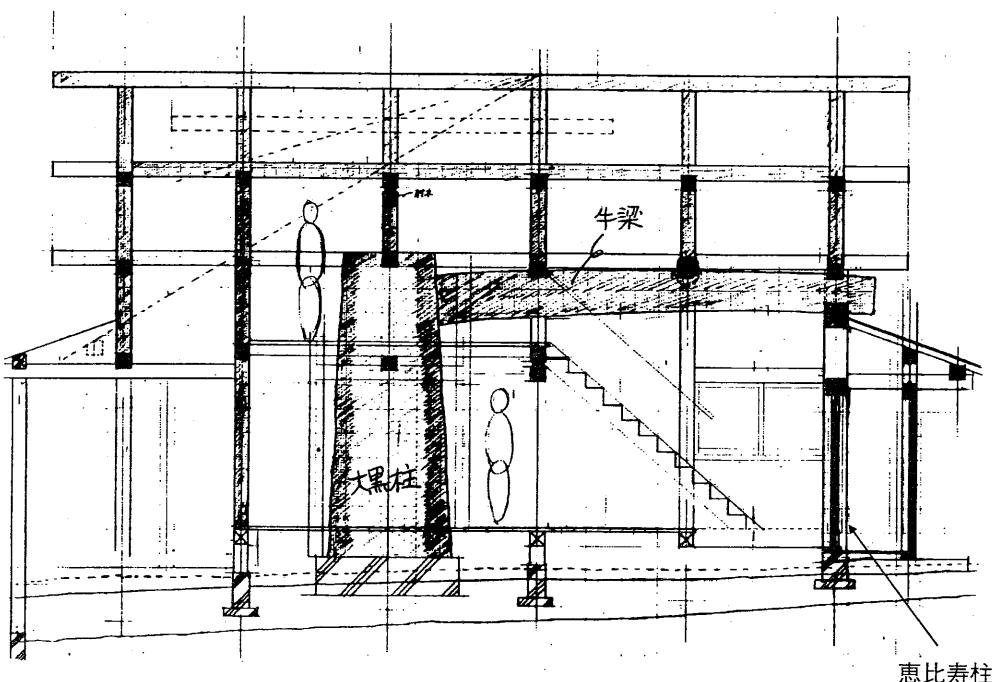
合掌材のコマジリ



## 第九話 いにしえの水

去年建てた自宅の大黒柱は、直径1.5メートル、高さ4メートル、重さ1.8トンの中が洞になつた杉の老木で、縁あって高野山から運ばれてきたのですが、工事にあたっては基礎工事をすませた後、すぐに大黒柱を設置して回りに足場を組み、その場所でスミカケ、加工をしなければなりませんでした。足場に一人乗って牛梁が組み込まれる仕口を刻んでいると、ノミを打つ音が山にこだまして、自分が木にとまつたキツツキか、セミのような気がして不思議な錯覚に陥ってしまう時があります。

表面から年輪を数えてちょうど四百年ぐらいのあたりで年輪が特に詰まったところがあつて、ノミをふるう度に水しぶきがとびました。四百年前といえばちょうど秀吉の時代にあたりますが、今まさに四百年間封印されてきたその時代の木の姿を玉手箱を開けるがごとくに、切り開いているかと思うと、胸が熱くなるのを感じました。そしていにしえの水を含んだ木の切りくずを、思わず口にして噛み締めました。ほろ苦い味と共にその時代、その木と時を越えて契りを結んだような気がしました。その時の大黒柱から出た木くずはゴミとして捨てることができず、今も袋に入れて保管しています。(もし欲しい方がいるようでしたら差し上げます)

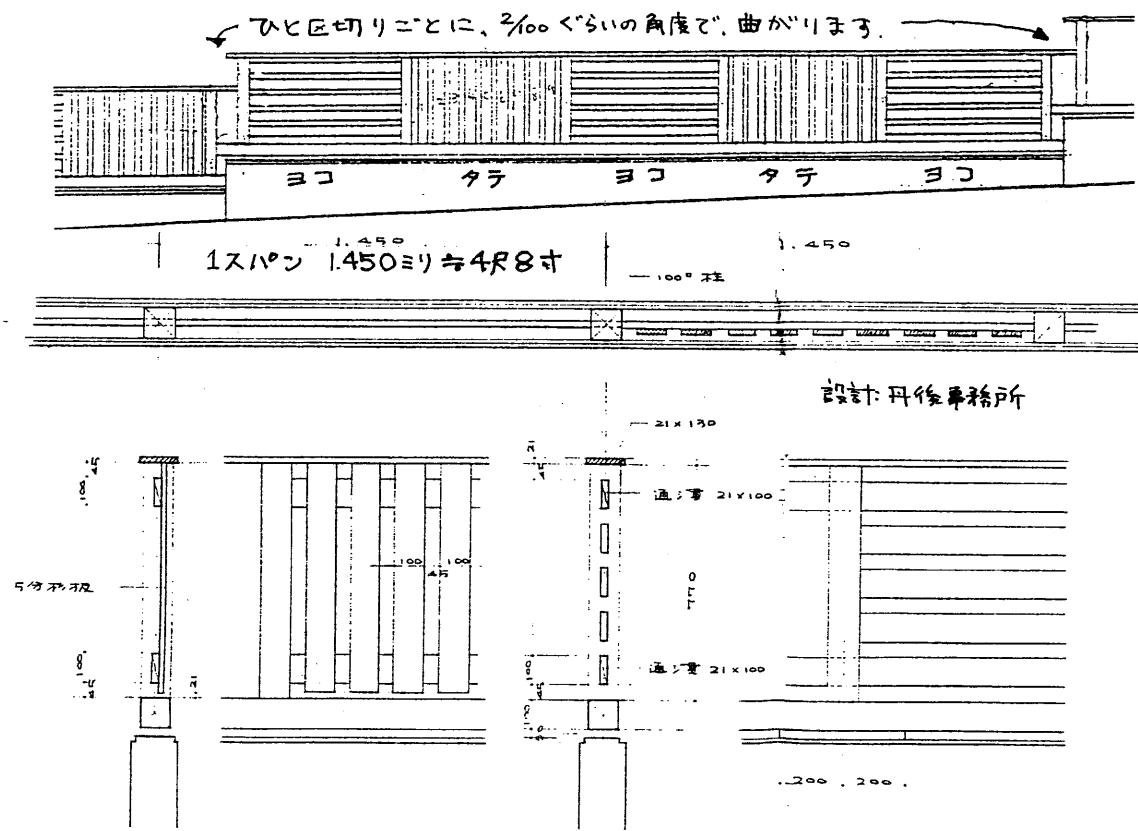


自宅 断面図

たかがへいされどへい

森山 ゆき

お久しぶりです。「まだやってるのー?」と言われながらも大工見習い2年目に突入しました。さて、私がおいてもらっている会社(柳雁木材)では、林場、事務所、下小屋と全部木造で建てかえをしてきました。その最後が庭の輔装工事と塀づくり。その塀づくりを私が墨つけからやらせてもらうことになったのです。親方が相談役になってくれますが、私が責任者です。会社としては、若い者に勉強させようと任せてくれたのですが…。へいはへいでもこれって「棟梁」みたいなものですよね。親方に教えてもらしながら見よう見まねで始めましたが、さあ大変!! どうなる!?



4/15 もう基礎ができていたので、長さを実測する。

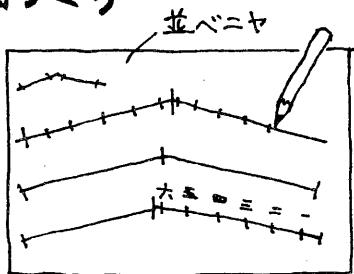
4/16 柱の割りつけ・板囲づくり・木拾い

### 柱の割りつけ

図面では1スパン 1,450mm ≈ 4尺8寸。4~6スパンで「ひと区切り」しかし実測した長さを4尺8寸で割ると半端が出る区切りもある。そこは4尺9寸や4尺7寸にする。図面と同じようにはいかないもんなんですね。このように柱の位置を決める。アシカーボルトと柱がぶつからぬいかも確認する。



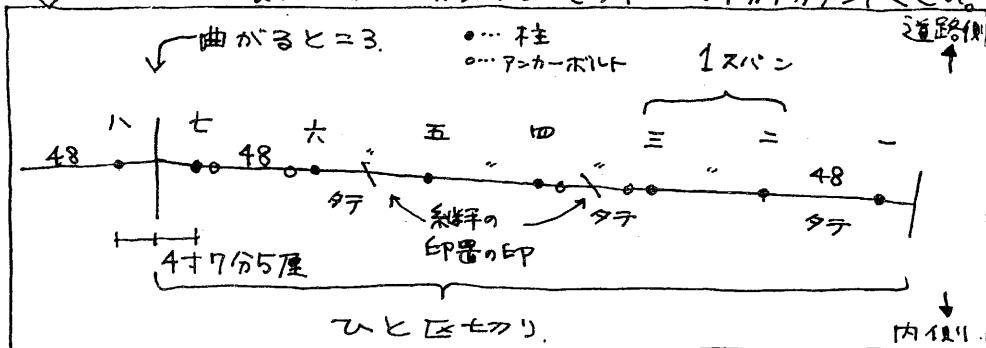
### 板囲づくり



↓拡大

なんて書くとカンタンモラタガ、ナカナカメンドくさい。

- ①鉛筆で実測したキンの長さを縮尺どおりに一本線で引く。
- ②柱の位置も正確に印する。
- ③ボールペンでなぞり、柱は目立つようマジックで●印にして、はじめから番付をうつ。
- ④それぞれの「区切り」の両端の余りの寸法、塀のじょうのタテ・ヨコなど墨つけに必要な情報を記入。



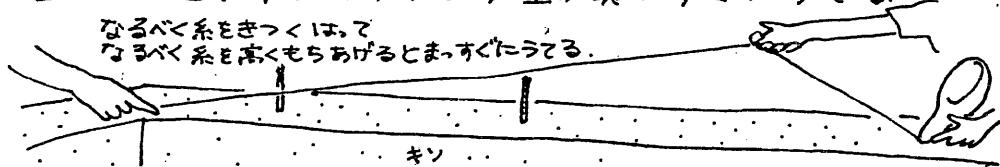
木拾い (もうここで何がどうなるか把握していないよダメ!)  
材木屋さんに材料を注文するのは初めての経験!

土台……セバ 3±5分角 出回っている木材の長さ。  
柱 " " (3mと4m)、縦ぐら位置、  
ネコ " 3±5分×1本 縦手に必要な長さなどを考慮。  
かさぎ 七巧味 4±5分×1本 して本数を決める。縦手の位  
貫・板 杉 3±5分×1本 置は「スパンの真ん中がカッ」  
イイ」と親方に教わった。

4/20 キソ上バ墨出し、尺杖・矩計棒・角度定木づくり

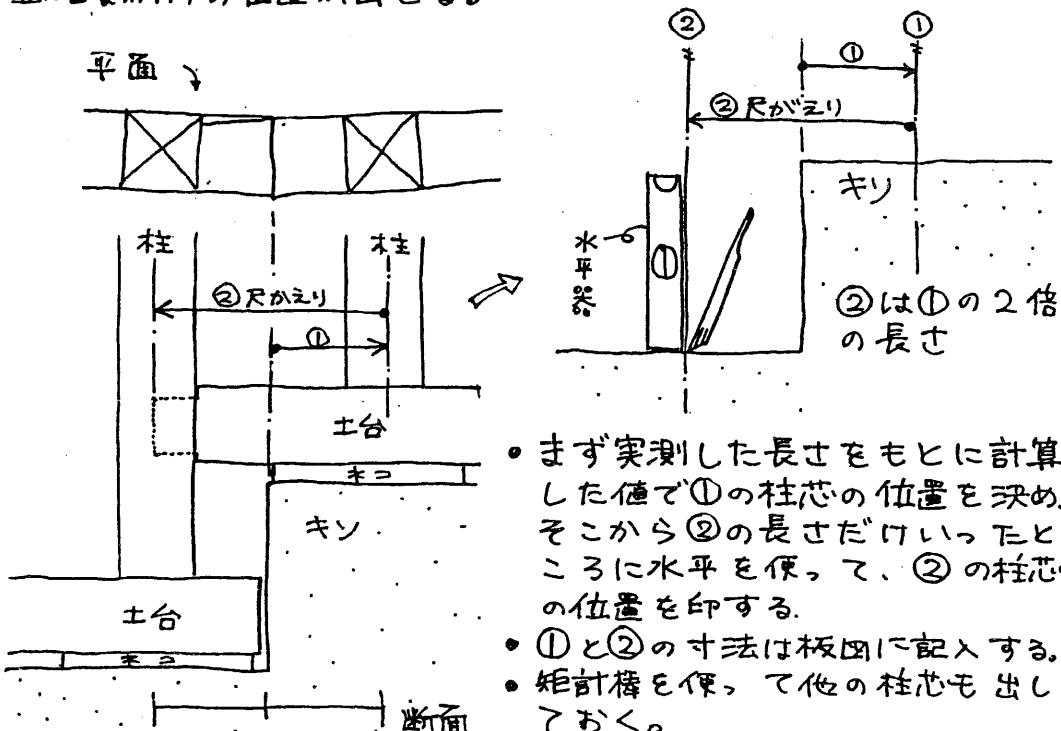
## キソ上端に、キソ・柱の心墨をうつ

本来なら、やり方に水糸を貼ってスミを出すのだが、既にやり方が外されていたので、キソの中の真ん中を芯とし、アンカーボルトをさけるために芯から一寸逃げたところに印をし、墨つぼで「逃げ墨」を打った。長さが26尺近くある長い「区切り」では、「区切り」のはじからはじまで水糸をはり真ん中辺りで印をして、2回にわけて墨つぼで心墨をうつと、1回でうつより墨が真っすぐにうてる。



### (後からわかったこと)

本当はここで正確な長さがわかるので、基礎に段差があるので土台がとなりの柱にささるところ(2P前の立面図を見て下さい)、正確な胴付の位置が出せる。



- まず実測した長さをもとに計算した値で①の柱芯の位置を決め、そこから②の長さだけ引いたところに水平を使つて、②の柱芯の位置を印する。
- ①と②の寸法は板図に記入する。
- 矩計棒を使つて他の柱芯も出しておく。

これをやらなかつたので「胴付が1分ぐらいたしかったのかも!!

## 尺引え

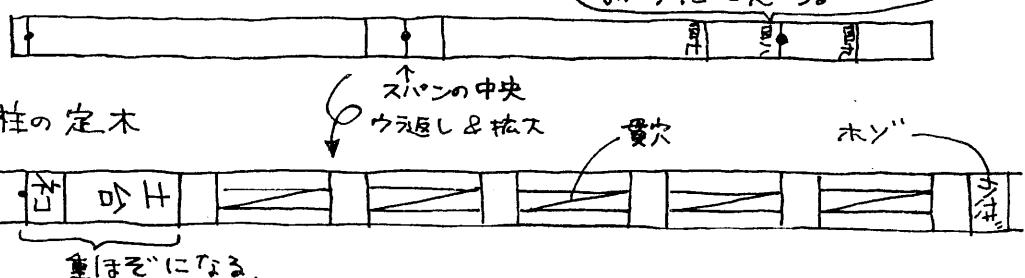


付あける 1寸角ぐらゐの4m材(なかなかまつすぐのものがなくて多少反ったものでもガマン)に自動カンナをかけ墨をする。字をかくこよく書くのが難い。

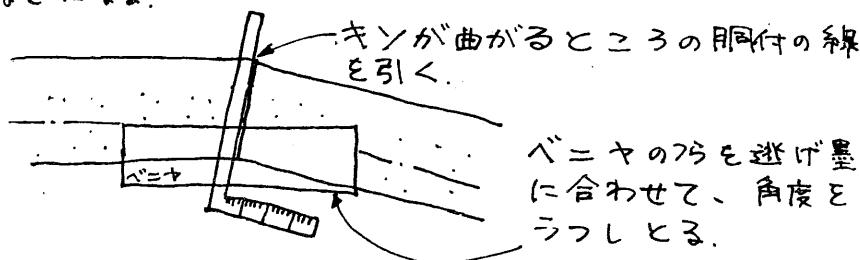
## 短計棒

柱のスパンの長さの定木

木ノトは3種類のスパンの長さを3面に分けた方がよがうだと思ふ。



## 角度定木



4/21～ やっと墨つけ

まずヒバの3寸5分角をきれいなのは柱用、汚いのは土台用に分ける。

**土台** ①木を選ぶ。(長くとる所は真っすぐな木、目立つ所はキレイな木)

- ②上端、外からの向きを決める。(上下より左右の反りが少なくなるように。下むくりになるように。キレイな面を外からにする)
- ③心墨うつ。難しい。なかなかまつすぐにならず角度もやる。
- ④柱芯の位置・穴・継手ナドをすみとする。(継手は追掛大栓で、上木・下木をまちがえないよう順番通りに墨する。)

**柱** ①大体約3尺に(長めに)長さを切る。(4m材を4つ切りする)

- ②手押しカンナで、1つの角を直角にしてから自動カンナをかけて全て同じ寸法にそろえる。

- ③木を選ぶ(入口付近の目立つ所はきれいな木を)

道筋イカ

- ④ひと区切りごとに、向きをそろえて並べて、木口に番付をふる。  
 ⑤並べたまま、もようがタテ(貫穴2つ)かヨコ(貫穴5つ)か貫穴ナシかエニピッタリで書いとくヒまちがえない。(でも組み立てたら2本ぐらいい違った!!)
- ⑥心墨を打って、心墨に短計棒を当てて、墨つけする。

- かぎ**
- ①本当は土台に合わせて同時に墨すれば、土台と長さがずれないとしかった。しかし別にやってしまった。
  - ②大体長めに長さを切り、130mmより大きめに中をさいて手押しカンナで曲げを取って、自動で中をそろえる。
  - ③柱芯の位置、胴つきを墨つけする。

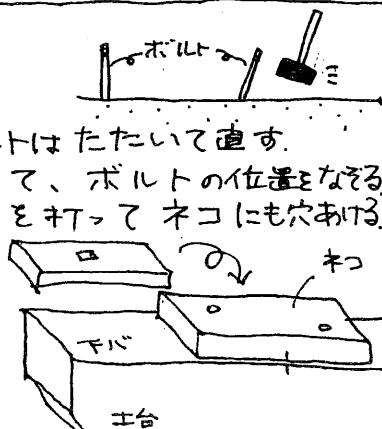
5/6～亥川村（親方がやると、土台が全部2日で終わってしまった!!）

- 土台**
- ①スパンの長さや、継手（追掛大栓）の上木・下木をまちがえていないか確認する。
  - ②穴ぼり、継手、ホゾをつくる。
  - ③組んでみて調整する。この時心墨が曲がっていったり、アリがゆるか、たり墨つけの木口が出る。
  - ④ナナメに曲がるところは、角度が大きい戸附は「5枚ほど」（ここが腕の見せ所らしいから、作ったならムズカシイ…！）
- 

5/11～13 組み立て

### 土台しき

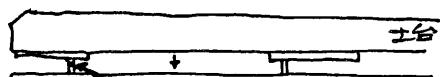
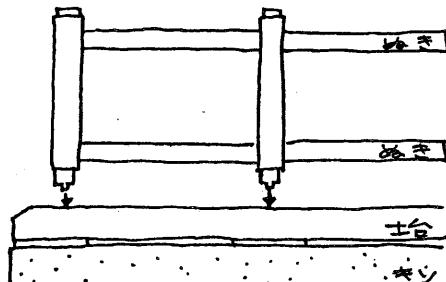
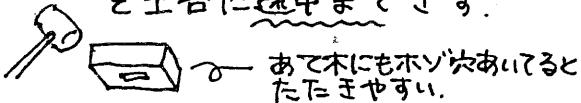
- ①キソの上バに柱芯を出しておく。
- ②ナナメに曲がっているアンカーボルトはたたいて直す。
- ③土台を柱芯を合わせてキソに置いて、ボルトの位置をなぞる。
- ④ボルトの穴をドリルであり、ネコを打ってネコにも穴あける。



## ⑤ 土台をキソの上にあろす。

### 柱+貫

① まず柱に貫を通してから柱を土台に途中までさす。



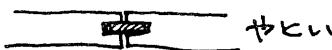
② 中3本の貫をさしてから次の柱もさす。



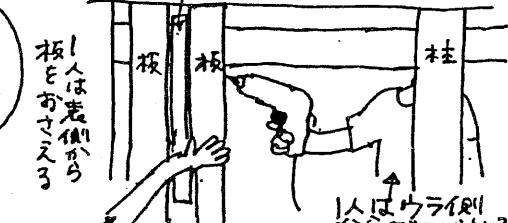
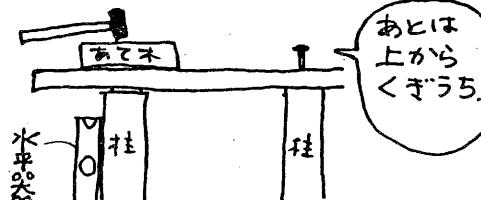
### かさぎ

#### かさぎとかさぎのつなぎ方

親方のアイディアで「ちょうどちょあり」という、ヤトイガが△の形になったようなものになった。やといだと離れちゃいそうだけどこれならちゃんとぴり合う。ナレホド!



かさぎは柱のゆがみを水平器で見てから、あて木をして割れないように注意しながらうらげんのうでたたいて入れる。



タテの板をはって完成!!

スキマの中にした定キをはさんだ

(竹かご)をしました。コクーかた。  
端の完成の翌日、昇降盤を使っていたら、木がはね返って手の平に当たって切りました。ひとつだんだんと機械に慣れねば!!

# 木のいのち 私と木の十年

岡 部 知 子

## 奥さんから外さんへ

私の家は板材を主に製造している材木屋です。平成に入るまでは普通の構造材、つまり杉・桧などを中心にして、針葉樹で3寸5分角の柱材を主に作っていました。日本で伐採された丸太だけを市場で買い求め、製材し乾燥させて製品作りをしていました。その当時、乾燥することや、ましてやその後に修正挽きまでして、製品作りをしている業者はほとんどなかったので、作る端から飛ぶように売れてはいました。最高のものを求めて作っていましたからそれは当然の事だとは思うのですが、売れれば売れるほど赤字を増やすだけの柱づくりだったのです。当時一般の材木屋は仕入れした丸太を製材して柱の形になると、生きの良いまますぐに製品市場に出荷していました。刺身や野菜などの食べ物は生きの良いほうがいいのですが、木というものは乾くときにその木の持つ性質が出てきて反ったり、曲がったりしますので、時間をかけ良く乾かした後、修正挽きしてから家作りに使ったほうが良いのです。しかし、狂いの出にくい製品とするために木を乾燥させたり、その過程で曲がったものを修正挽き等していると当然経費も材積も掛ります。そしてその当時は乾燥という品質で値段は決められていませんでした。本来、木は性質や特性を見なくてはいけないのに、節があるなしだけで判断され、どこの産なのか全くおかまいなしです。大壁がほとんどの家づくりには、どうせ見えないのでからと安いものが第一に求められていました。ウチでも始めから乾燥をしていたわけではありません。少しでも他所より良いものをと、試行錯誤の結果のことですが、これでは食べていけないので、柱ではなくそれだけ手を尽くしたという附加価値を認めてもらえるようなものと考えて、仕上げに使われる板材を製造し始めたのです。しかし販売網を持っている大手の建材メーカーならいざ知らず、「岡



絢の会 古河町並見学

部材木店の作っている内装材です。」なんて言ってもどこの設計事務所も大工さんも知っているはずがありません。市場に出しているとき、真っ先に柱材を買ってくれていた人達も、板材には目を向けてはくれませんでしたし、ましてや、バブルの真っ最中です。そしてまだ新規建材が巾をきかせていた建築ラッシュ時代のこと、建設会社や大工さん達は、次から次に来る仕事こなさなくてはいけないのに、何もムクの板材なんて一番のクレーム対象で扱いの面土臭いものを、喜んで使ってくれるはずなどなかったのです。そうはいっても、ただお客様を待ち続けるわけにもいきません。岡部材木店は亭主と義弟と私の三人で営んでいますが、亭主は工場のきり盛り、機械の設定。義弟は仕入れと乾燥の段取り。私は電話番と帳面付けとあとはパートのおばさん一人分。ということで工場にいなくても支障のないのは私だけ・・・。さあどのようにして、ムクの板材のことを知ってもらっていくか、私の営業活動は始まりました。



木造フォーラム 青森・平山家住宅

## 設計事務所を訪れて

毎日地域を決めて、看板を頼りに設計事務所・工務店と俗にいう飛び込みセールスをしましたが、ムク材というものに関心のある人は少なく、余り効率の良いものではありませんでした。そのうち雑誌などを参考に、木に関心を持っていそうな設計事務所に電話をして了解をとり、見本と単価表を持って歩きました。材木屋が歩き廻ることを珍しがられ、ほとんどの方が快く話を聞いて下さいました。「いいことだよ。今まで材木屋だけだよね、外に発進しないのは」と理解あるほんの一握りの人は言ってくださいましたが、10年前の設計者はというと、ムク材はどう使うのか、使うとどうなるのかさえ想像が付かない方が大部分、ましてやムクの性質や特徴なんて気にした事がないような方が多いと感じられました。お陰で当時の私のおぼつかない説明でも、どうされることもなく今日にいたりました。そんな状態ですから目からも理解してもうためにはと、施工例の写真を撮ろうと思い、大工さんが「板の工事が終ったよ」と言う言葉を掛けてくれると、カメラを持って現場に飛んでいきました。

当時は外材、国産材という意識も一部の人間にしか問題視されていませんでした。で

すから、出会った人の中には「無垢の板をこんなに厚く使うなんてもったいないなあ、日本の山に木がなくなってしまうよ。自然破壊だよね。」と言われたことがあったのです。そして「僕は木を薄くスライスしてあるものを張り付けてある合板を使うことにしているよ。」と言われたものです。

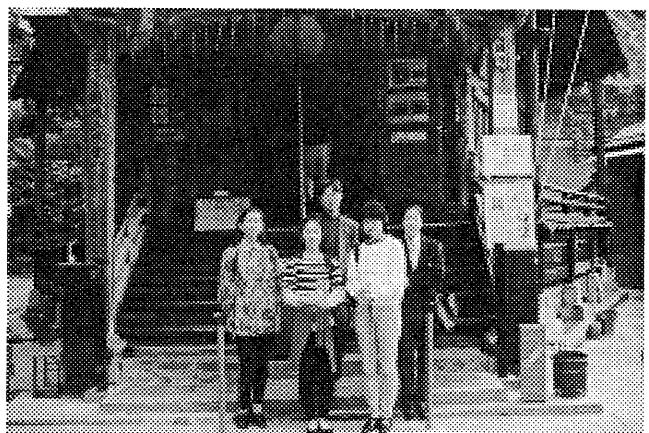
つまり、木は大事に少しづつ使わなくてはいけないという事なのでしょう。しかし、合板の中味が、どこから持って来られたものなのか、どんな状況にあったものなのか当然意識のないところだと思います。私は唖然として返す言葉もなく返ってきたのでした。同じ様な意識の人に沢山出会いましたし、同じ様な意味の言葉も何人もの人から聞きました。

それまでは、ムクの板材を使うということと、山の緑を守るということが、共存し得るのかということに対して、自分自身に問題提起しているゆとりもなかったものですから、何か吹っ切れない気持ちのままに、その場を去りました。それでも今になって思い返せば、この体験が、日本の山や家づくりに対して私が深くのめり込んでいく一つのきっかけになったのだと思います。

## 会との関わり

説明に伺ったある事務所で、たどたどしい私の説明に同情してくれたのか、「木や建築に興味があるなら、こんな会があるよ」と言葉を掛けてくれた人がいました。それをきっかけにいくつかの会に参加させていただくようになり、初めは板の事を知つてもらうのが目的だったのですが、参加することによって色々な知らない世界が見えてきました。

「いい仕事をするには、良く遊ぶこと」と昔から言われていますが、「仕事しろ!」「こういうふうに、しなくてはいけない」と強制されても良い結果になるはずはありません。(今では多くの方に板を使っていただいていますが、右も左もわからない私に、思うようにさせてくれた亭主には感謝です。) 柱材から板材に転換した時、この板を多くの人に知つてもらいたいと外へ出たわけですから、板屋をしていることがわかってもらえれば私の課せられ

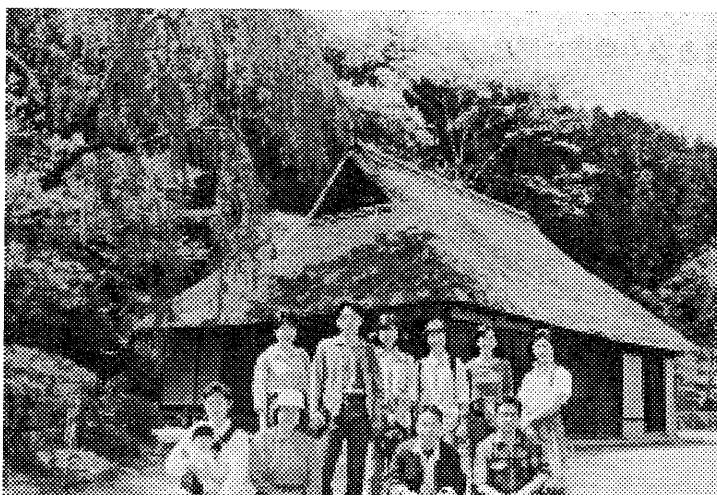


建築セミナー 会津のザサ工堂

た任務は終りです。あとは自分の引き出しを沢山作れるように、楽しく遊ぼうと思いました。遊ぶといっても、ゴルフにマージャン、ジャズダンス、というわけではありません。建築と関わりながら私なりに楽しむことです。

興味のもてるセミナーも沢山ありましたが、一番楽しさを感じたのは見学会です。歴史的な建築の違い、和と洋の違い、気候地域的な違い、意識もしていなかった世界が面白く、機会のある度、時間の許す限り参加していました。私が建築に対してまるっきりの素人ということもあり、色々な視点から沢山の方がその人の立場で話を聞かせてくれました。建物を見るのは立体的な絵を見るようでわくわくしました。それまでは、家を見るときは間取りに設備にカーテンの柄程度しか見ていましたが、楽しさがわかってくると、素晴らしい建物を見たあとは、良い本を一冊読んでしまったくらいの満足感があります。ある会に入った時は会員としてもっと楽しみたいと、建築や町並みを見て歩く分科会を発足してしまったくらいです。

そして、人の本当の有難さを感じられたのも会に入れてもらえたおかげです。人の紹介で会に入りました。その会を通して一人の人と知り合い、その人がこの生活文化同人に誘ってくれました。言い方を変えれば、この二人が私の出発時点の恩人だと思っています。沢山の人と知り合い話をしてことで、その人が何を求めているのか、求められているのかが見えてきます。今まで色々な方にお世話になった分これからも、人ととのあいだに橋を渡して少しでもお返しができたらと思っています。



絢の会 高麗家住宅

## 気持ちの発展

## 家づくりの一員として

建築の設計をしている方には、人それぞれに得意な分野を持っている人が多く見受けられます。そのお陰でたくさん人から色々な方向、視点で話を聞く機会に恵まれ、かつては意識していなかったことを気付かせていただきました。

幸か不幸か、バブルの弾けた今こそ、生活文化を大事にした家づくりをするには何をどうすればいいのか、しっかり考えなくてはいけない時期にきているのではないかと、沢山の方に出会ったり、色々な家づくりを見せていただいて、私も私なりに家というものに対して理想をいだくようになりました。

その一つに、家づくりこそ、他の業種の話を沢山聞いて欲しいと思い、異業種との交流をもっと持つて欲しいという思いがあります。限られた予算のなかで最大限の出来上がりを求めるとするなら、聞く耳を持って物事にぶつかっていって欲しいと思うのです。これは材木屋として自分の都合を押し付けるために、そうしていきたいと言っているではありません。より良いものを作るためには、自分にはない知識や情報は、それを持っている人からどんどん吸収していくとよいと思うからです。いい仕事仲間を作り、自分にはない世界を覗いていけるようになれば、本当によい家づくりにつながっていくと思います。そこに関わるものすべてが横につながり、それぞれの立場から提案をしあえる仲間を広げていく。人のつながりは仕事を与えたりもらったりすることから継続することもあるかもしれません。本当に気持ちが通じ合えなくては継続に無理が生じると思うのです。気持ちが通じ合えば、仕事も活動も自然に広がっていくような気がします。ある現場の打ち合わせに立ち合う機会があり、その時建具屋さんが図面を見ながら言いました。「こここの建具はこう納めるより、こうしたほうが無理がないし、きれいですよ。」すると設計者はその言葉を反発することなく素直に聞き入れていました。予算とデザインと素材をどうベストに納めていくかということで、その設計者に主張がないというわけではないのです。まさに「建具の事は建具屋に聞け」です。本来なら「図面通りにやればいいのだ」というのが普通の話です。何でも人のことを聞けばいいとは限りませんが、多少聞く耳を持つことも必要でしょうし、柔軟に対応することがまた、施工コストを抑えベストの家づくりにつながるのだと思います。

材木の場合を言うと、無理な仕入れには、何が何でも手にいれなくてはということで、仕入れ単価もオーバーしてしまいますし、急ぎの注文だと、乾燥させる時間もありません。限られた予算の中で、最大限良いものを作っていくこうとするなら、木の都合も少し聞き入れて欲しいのです。そしてどういう状態の材料がいくらになるのかということも、もう少し把握してほしいのです。丸太は3m、4m、6mという形で市場に並んでいます。例えば4mなら10,000円のものが4,5mのものになると20,000円になる要素があるのです。物の流れの状況を知り、予算に応じた物の求め方というのもあると思います。そこから考えてゆかなくては、材料仕入れにしろ施工段階にしろ、色々な面で無理が生じてきます。設計者に対して強制出来るものではありませんし、生意気と思われるかも知れませんが、限られた予算や納期の中で最良のものにするには、そこで何が出来るのか、やってよいのか、その思いをプロとしてどう形にまとめのか、大変なことだと思いますが、すべての業種が提案したものをとりまとめ、施主の期待に応えることは設計者の役割だのひとつだと思います。自分の置かれた立場というものがそれぞれにあります。それを認識し合いながら、そしてまた次の仕事を互いに、共に出来ることを待ち望むような関係にならなくては次の発展は難しいでしょうし、良い関係を持続することは出来ないと思います。そんな形で仕事が出来るようになればというのが今の私の理想です。



犬山の帝国ホテル 町並ゼミ参加

## ■生活文化同人会則

### ●生活文化同人の目的

1. われわれは、自らの建築（オリジナリティ）へと向かうアプローチ（方法論）について互いに研鑽し合う。
2. われわれは、生活文化という視点で各分野の伝統技法に学び、未来のモノづくりに活用する。
3. われわれは、旅を通して固有な地域環境に学び、新たな創作活動への契機とする。

### ●会員の種類

生活文化同人（以下同人）の会員は以下による。

1. 年会費
2. 会報購読会員
3. 定例会聴講会員

### ●総 会

年会員によって構成され、年1回以上開催することとする。世話人会においての年間の活動報告等を行うものとする。

### ●世話人会

世話人会は世話人によって構成され、本会運営に当たっての各種活動方針の決定機関とする。

### ●世 話 人

同人年会員の中から、積極的に提案、および行動することを原則として自薦、他薦によって自由に本会の運営に参加し、責任を持ち事務局に協力する。その任期は1月から12月の1年間とする。

### ●事 務 局

事務局は以下の構成による。各担当は世話人会で決定する。

- ・事務局
- ・会計
- ・機関誌編集局
- ・会報編集局

### ●同人の活動

- ・大平建築宿の開催（1回／年）

- ・定例会の開催（5回／年）
- ・機関誌の発行（1回／年）
- ・会報（生活文化）の発行（隔月）
- ・他ネットワークとの交流
- ・その他

### ●入会の手続きと会員の特典（平成8年）

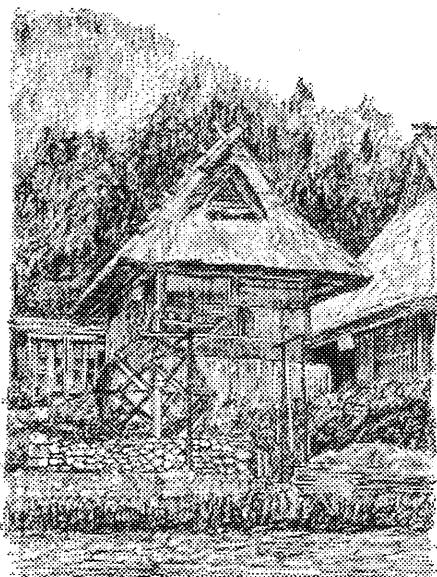
1. 年会員 7,000円：定例会聴講、機関誌・会報の購読
2. 会報購読会員 2,000円：会報の購読
3. 定例会聴講会員 聽講費：2,000円／回（学生割引 1,000円／回）

○年会員・会報購読会員は1月から12月までの年単位とし、中途入会の場合も上記とする。

○年会員は1家族ひとりで可とする。ただし、定例会聴講の場合は年会員でない家族は聴講費（学生割引と同等）を払うものとする。

○会費納入先 郵便局 総合口座 10010-54101181

生活文化同人代表 吉田 桂二



美山／京都府北桑田郡  
個々の建築のもつ美しさもさることながら  
郡体としての美しさに目を奪われた

解体した古材を再用しての数寄屋住宅づくりに取り組んでいる。横浜市内の丘陵地帯の一隅で今年三月から建て始め、大工たちと現場に泊り込み、悪戦苦闘の毎日である。施工の直営工事という進め方で小生は設計監理者と現場代理人という双方の立場で、あらゆる責任を一身に……いや一介の技術者として本望ではないか。がんばれ、がんばれ。

小間の茶室の屋根工事に茅葺職人たちがやって来て、彼らの作業を見上げるたびに、初冬の青空に私の心持ちがようやくすいこまれてゆくのを感じる。

「何でもいいんです。どんな材料を使ってもいいんです。」そう呟いてくれた小町和義さんのひとことにどれほど勇気づけられたかしれない。そして本号に原稿を寄せてくれたような方々にこそぜひ見ていただけるような仕事にしたいと願うや切。

〈M〉

## —生活文化 第3号—

1998年8月発行

編集・発行 生活文化同人

発行所 同人機関誌編集局

(アカシサス建築工房内)

〒324-0055 栃木県大田原市新富町2-3-34

T E L 0287-22-2288

F A X 0287-22-7977

印刷所 有限会社イリサワ商事印刷部

〒320-0806 宇都宮市中央3-5-15